

瀬戸内町文化財調査報告書第6集

瀬戸内町内の遺跡 2 —近代遺跡 分布調査編—



2017年3月

鹿児島県大島郡 瀬戸内町教育委員会

瀬戸内町文化財調査報告書第6集

瀬戸内町内の遺跡 2 —近代遺跡 分布調査編—



2017年3月

鹿児島県大島郡 瀬戸内町教育委員会



佐世保海軍軍需部大島司庫（水溜）跡（Ⅰ期）



掩蓋式観測所跡（Ⅱ期）



三浦艦船給水ダム跡（Ⅲ期）



第18震洋艇壕跡（Ⅳ期）



大島海峡航空写真（北西方向から）



大島海峡航空写真（南東方向から）

序 文

本報告書は、瀬戸内町教育委員会が平成 26 年度から平成 28 年度にかけて国の補助を受けて実施した、瀬戸内町内の埋蔵文化財分布調査の成果をまとめたものです。

瀬戸内町では、平成 16 年度に町内の遺跡分布調査報告書を刊行いたしましたが、それから 10 年以上が経ち、すでに周知されている遺跡の資料が増加しただけでなく、新たな遺跡も発見されております。また、近年注目を集めてきている近代遺跡も数多く残されております。

今回報告する調査では、瀬戸内町内で先史時代の遺跡が 54 遺跡、近代遺跡（戦争遺跡）が 206 箇所の軍事施設跡を確認する事が出来ました。これらの事から、瀬戸内町域の奄美大島南部・加計呂麻島・請島・与路島の各集落で、古くは貝塚時代から人々の生活が営まれていた事が明らかとなりました。また、明治・大正期からは、島内だけの環境だけでなく世界情勢が混沌とする中で、時代の激流に翻弄されながらも力強く生きた先人達の姿を垣間見る事が出来ました。

戦後 70 年の節目が過ぎました。戦争体験者の高齢化に伴い、年々戦争についての伝承も困難となってきました。こうした点を考慮しても、戦争について「自ら語らずとも存在において語る」近代遺跡（戦争遺跡）が果たす役割は重みを増してきており、瀬戸内町教育委員会では今後も近代遺跡（戦争遺跡）の分布調査を継続する計画です。

本報告書の刊行によって、町民の皆様が地域の歴史・文化により興味・関心を抱くようになると共に、埋蔵文化財が町の教育や観光に一層活用されるようになることを期待しております。

末尾になりましたが、分布調査および本報告書の刊行に際して、多数の指導助言をいただきました文化庁文化財部・鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島大学・鹿児島女子短期大学並びに関係者各位、そして分布調査の際に、激励とご協力を頂きました町民の皆様に対しまして、心より感謝申し上げます。

平成 29 年 3 月

瀬戸内町教育委員会

教育長 上田 敏也

報 告 書 抄 録

ふりがな	せとうちちょうないのいせき				
書名	瀬戸内町内の遺跡				
副書名	近代遺跡 分布調査編				
巻次	2				
シリーズ名	瀬戸内町文化財調査報告書				
シリーズ番号	6				
編著者名	鼎 丈太郎				
編集機関	瀬戸内町教育委員会				
所在地	〒894-1592 大島郡瀬戸内町古仁屋船津23				
発行年月日	平成29(2017)年3月31日				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村					
瀬戸内町 46525			2014.7.1 ～ 2017.3.31	瀬戸内町 全域	町内遺跡 発掘調査 等事業
種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項
近代遺跡 (戦争遺跡)	近代		砲台跡 弾薬庫跡 防空壕 等	統制陶器 ガラス瓶 煉瓦 等	

例 言

- 1 本報告書は瀬戸内町教育委員会が文化庁及び鹿児島県教育委員会の補助を受け、平成 26 年度から平成 28 年度にかけて実施した、町内遺跡分布調査事業による近代遺跡の分布調査報告書である。
- 2 遺跡名称は、調査段階で瀬戸内町教育委員会が把握していた名称を使用した。今後の調査成果により変更する事がある。
- 3 本書で用いる時代名称と時代区分は、高宮広土・新里貴之（編）2014『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』六一書房に従った。
- 4 本書掲載の地形図は、瀬戸内町役場作成 1/50,000 の地形図及び国土地理院の地形図を適宜調整して使用した。掲載の縮尺は統一せず、挿図内にてスケールを提示している。方位は磁北を示す。
- 5 本書掲載の写真は、鼎丈太郎が撮影した。航空写真については、瀬戸内町撮影の写真を使用した。
- 6 本書の編集は、與嶺友紀也、鼎さつきの協力を得て、鼎丈太郎が担当した。
- 7 本書の執筆は、鼎丈太郎が行った。また、英文サマリーについては、與嶺友紀也、ナサニエル・ジェームズ・ヘイズの協力を得た。
- 8 調査・報告書作成にあたって、以下の方々にご指導・ご協力いただいた。
浅野啓介（文化庁）、石田智子（鹿児島大学）、伊波直樹（株式会社島田組）、齋藤達志（防衛省）、新里貴之（鹿児島大学）、竹中正巳（鹿児島女子短期大学）、樋泉岳二（早稲田大学）、永山修一（ラサール学園）、野内秀明（横須賀市）、水ノ江和同（文化庁）、原剛（軍事史学会）、森幸一郎（鹿児島県教育庁）、森達也（沖縄県立芸術大学）、山岡邦章（岸和田市）、山下信一郎（文化庁）、渡辺芳郎（鹿児島大学）
- 9 調査で得た図面・写真等各種記録及び採集遺物等は、瀬戸内町教育委員会で保管している。

凡 例

- 1 遺跡範囲について、現段階で範囲が確定している遺跡・軍事施設跡は実線及びドット表示を行った。未確定及び未調査地については、推定範囲を円で囲み破線で示した。
- 2 遺跡及び軍事施設跡の座標は、世界測地系の座標を使用している。また、表記は 60 進法を用いた。
- 3 引用・参考文献は、巻末に記載した。
- 4 本報告書で記載している「近代遺跡」は、近代に構築された「軍事施設跡」の総称である。
また、「軍事施設跡」は現在の記述の際に使用し、構築・運用時の記述は「軍事施設」を使用する。
- 5 「瀬戸内町内の軍事施設一覧表」の時期区分欄にその運用期間を記号により、Ⅰ～Ⅳ期を「●：運用」、Ⅴ期を「○：残存」、「△：半壊及び一部残存」、「×：消滅」、「？：文献のみで確認し現地未調査」と表記した。

目 次

巻頭図版 序文 報告書抄録 例言・凡例

第1章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査経過	2
第2章 瀬戸内町の概況	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の方法と成果	10
第1節 調査の方法	10
第2節 遺跡名称の整理	10
第3節 調査概要	11
第4節 調査成果	11
1. 皆津崎地区	19
2. 古仁屋地区	24
3. 久慈地区	34
4. 西古見地区	41
5. 実久地区	48
6. 須子茂地区	55
7. 瀬相地区	58
8. 秋徳地区	69
9. 安脚場地区	73
10. 与路地区	81
11. その他の軍事施設跡	84
12. 関連施設	86
13. 遺物	87
14. 文献史料一覧	89
第4章 総括	106
第1節 瀬戸内町の近代遺跡の特徴	106
1. 時期区分	106
2. I期：奄美大島要塞開庁以前	107
3. II期：奄美大島要塞開庁後から太平洋戦争直前	107
4. III期：太平洋戦争期前半	108
5. IV期：太平洋戦争期後半	109
6. V期：終戦後	110
7. まとめ	110
第2節 近代遺跡の現状と課題	111
1. 調査の状況	111
2. 保存の状況	111
3. 近代遺跡の現状と課題	111
引用・参考文献	112
英文要旨 (Summary English Military Facilities)・要旨	113

第1章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

瀬戸内町教育委員会では、埋蔵文化財の周知・保存・活用を目的として、瀬戸内町内における埋蔵文化財の分布調査を2003（平成15）年より実施している。2005（平成17）年までに実施した調査により、本町では49の遺跡および近代遺跡の一部を確認しており、以上の調査成果については同年に『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』としてまとめている。

しかし報告書刊行から10年以上が経過し、各遺跡では採集資料の他、道路工事等の試掘調査に伴う資料も増加し、新たな遺跡や近代遺跡も確認されている。また、町内では現在も諸開発工事が続いている為、瀬戸内町教育委員会では今後の諸開発行為との円滑な調整を進める必要性も生じてきている。

これらの状況を受けて、町内における従来の調査で把握された遺跡や未調査地における遺物・遺構の残存範囲、帰属年代、周辺環境、遺跡の性格等、埋蔵文化財に関する情報を更新し、埋蔵文化財保護の基礎を再度固める必要が出てきた。

そこで瀬戸内町内における埋蔵文化財の位置、内容把握および遺跡分布地図の作成を目的に、2014（平成26）年度から2016（平成28）年度にかけて、国庫補助事業を活用して瀬戸内町内の埋蔵文化財の分布調査を実施した。

第2節 調査組織

2014（平成26）年度

事業主体	瀬戸内町教育委員会	
事業責任	瀬戸内町教育委員会教育長	森山 力蔵
事業統括	社会教育課課長	竹熊 幸一
	社会教育課図書館・郷土館課長補佐兼館長	登島 敏文
調査担当	社会教育課図書館・郷土館主事	
調査指導	文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門調査官	水ノ江和同
	株式会社島田組沖繩支店調査員	伊波 直樹
	防衛省防衛研究所戦史研究センター戦史研究室所員	齋藤 達志
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター助教授	新里 貴之
調査補助員	鼎さつき・田中祐子・正智子	
調査作業員	武田正利・武田政文・永井俊三	

2015（平成27）年度

事業主体	瀬戸内町教育委員会	
事業責任	瀬戸内町教育委員会教育長	森山力蔵（6月退職） 上田敏也（7月就任）
事業統括	社会教育課課長	竹熊幸一（6月異動）

		高田信幸(7月就任)
	社会教育課図書館・郷土館課長補佐兼館長	登島 敏文
調査担当	社会教育課図書館・郷土館主事	鼎 丈太郎
調査指導	横須賀市教育委員会	野内 秀明
	文化庁文化財部記念物課史跡部門調査官	浅野 啓介
	鹿児島県教育庁文化財課文化財主事	森 幸一郎
調査協力	鹿児島大学法学部人文学科教授	渡辺 芳郎
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター助教授	新里 貴之
調査補助員	鼎さつき・田中祐子	
調査作業員	勇光久・岩元剛・江口しづ代・江口政男・江原正治・黒木政昭・昌谷武昭・島田正俊・武田正利・武田政文・徳元薫子・供利義也・永井俊三・平川正博・前田芳之・前枝真嘉・宮原伸清・安真継・山下輝	

2016(平成28)年度

事業主体	瀬戸内町教育委員会	
事業責任	瀬戸内町教育委員会教育長	上田 敏也
事業統括	社会教育課課長	高田 信幸
調査担当	社会教育課生涯学習係主事	鼎 丈太郎
調査指導	文化庁文化財部記念物課史跡部門調査官	山下信一郎
	鹿児島県教育庁文化財課文化財主事	森 幸一郎
	岸和田市教育委員会生涯学習部郷土文化室文化財担当	山岡 邦章
	陸上自衛隊幹部学校教育部戦史教育室教官	齋藤 達志
	軍事史学会副会長	原 剛
調査協力	沖縄県立芸術大学全学教育センター教授	森 達也
	鹿児島女子短期大学生活科学科教授	竹中 正巳
	鹿児島大学法学部人文学科教授	渡辺 芳郎
	鹿児島大学法学部人文学科准教授	石田 智子
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター助教授	新里 貴之
	ラサール学園教諭	永山 修一
	瀬戸内町久慈集落	
調査補助員	鼎さつき・與嶺友紀也	

第3節 調査経過

2014(平成26)年度から2016(平成28)年度にかけて、国庫補助を活用し瀬戸内町内の埋蔵文化財分布調査を行った。2014(平成26)年度と2015(平成27)年度は現地踏査と資料整理の他、近代遺跡に関しては聞き取り調査および資料収集を実施した。2016(平成28)年度は現地踏査を行いつつ、資料整理および報告書作成を実施した。

以下、各年度の調査内容を日記抄に略述する。

2014（平成26）年度

- 7月～3月 採集資料および出土資料の整理作業（図面作成）を実施。
- 7月～3月 アジア歴史資料センターおよび瀬戸内町立郷土館所蔵の瀬戸内町関連資料の目録作成を実施。
- 8月～3月 埋蔵文化財、近代遺跡に関する調査データの整理。
- 9月9日 西古見集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。久慈地区（久慈）・西古見地区にて、近代遺跡の分布調査を実施。
- 9月11日 安脚場地区（安脚場）にて、近代遺跡の分布調査を実施。
- 10月1日 西阿室集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 10月2日 実久集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 10月8日 瀬相地区（三浦）にて、第17震洋艇壕跡の現状確認調査を実施。
- 11月6日 西古見地区にて、近代遺跡の分布調査を実施。
- 11月15日 池地集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 11月25日 須子茂地区（モン崎）にて、近代遺跡の分布調査を実施。
- 12月3日 古仁屋地区（古仁屋）にて、近代遺跡の分布調査を実施。
- 12月10日 秋徳地区（先鼻）にて、砲台跡の現状確認調査を実施。
- 1月8日 瀬相地区（三浦）にて、艦船給水ダム跡の現状確認調査を実施。
- 1月29日 皆津崎地区にて、近代遺跡の分布調査を実施。
- 2月3日 古志集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。久慈集落にて、白糖工場跡の表面踏査および聞き取り調査と旧国民学校・奉安殿・貯水施設など近代遺跡関連の施設についての聞き取り調査を実施。
- 2月4日 瀬相地区（三浦）・須子茂地区（モン崎）・実久地区（実久）にて、近代遺跡の分布調査を実施。
- 2月5日 久慈地区（久慈）にて、第44震洋隊について調査を実施。
- 2月12日 皆津崎地区にて、灯台跡の現状確認調査を実施。
- 2月19～21日 安脚場地区（安脚場）にて、壕跡・塹壕跡・タコ壺跡・探照灯跡の確認調査および、皆津崎地区・安脚場地区（安脚場）・実久地区（江仁屋離島）・西古見地区にて、砲台跡や棧橋跡・標柱（陸軍用地）の海上からの確認調査を実施。
- 2月24日 木慈・嘉入の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 2月26・27日 於斎・勢里・佐知克・野見山・諸鈍・生間・本生間・諸数・勝能・押角の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。瀬相地区（瀬相）にて、大島防備隊・隊門の簡易実測を実施。
- 3月24日 瀬相地区（三浦）にて、近代遺跡蚊竜基地跡の現状確認調査を実施。

2015（平成27）年度

- 5月～3月 埋蔵文化財および近代遺跡に関する諸資料の整理作業を実施。
- 9月21日 実久地区（江仁屋離島）にて、兵舎跡・井戸跡・砲台跡の現状確認調査を実施。
- 11月9日 久慈地区（古志）・宇検村部連にて、砲台跡・土盛り施設・探照灯跡の現

- 状確認調査を実施。
- 1月12・13日 伊須・蘇刈・嘉鉄・清水・節子・網野子・勝浦の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 1月29日 安脚場地区（徳浜）にて、砲台跡・防空壕跡・沈殿施設跡・給水施設跡・タコ壺跡など近代遺跡関連施設の現状確認を実施。
- 3月7・8日 実久・芝・薩川・瀬武・武名・俵・瀬相・渡連・安脚場・徳浜・諸鈍の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 3月10日 久慈地区（久慈）にて、佐世保海軍軍需部大島支庫関連の取水口跡と沈殿池跡の現状確認調査を実施。
- 3月17～20日 沖縄県立博物館所蔵の瀬戸内町採集資料の資料調査を実施。

2016（平成28）年度

- 5月～3月 埋蔵文化財および近代遺跡に関する諸資料の整理および報告書の作成。
- 8月8～10日 諸鈍・野見山・勢里の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 11月10・11日 芝・実久・薩川・瀬武・知之浦の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 11月29・30日 阿多地・俵・瀬相・花富・伊子茂・於斎・勢里・押角・勝能・諸数・本生間・渡連・安脚場・徳浜の各集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 12月11日 与路集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 12月18日 池地集落にて、埋蔵文化財の分布調査を実施。
- 3月7日 久慈地区（久慈）・西古見地区にて、近代遺跡の現状確認を実施。
- 3月14～15日 古仁屋地区（古仁屋・手安・須手）・久慈地区（久慈）・西古見地区・瀬相地区（三浦・瀬相・呑之浦）・安脚場地区（安脚場）にて、近代遺跡の現状確認調査を実施。

第2章 瀬戸内町の概況

第1節 地理的環境

琉球列島は日本列島の南西に位置し、北は九州島から南は台湾島までの間を弧状に連なる大小200の島々からなる。琉球列島は北から大隅諸島、トカラ列島、奄美群島、沖縄諸島、先島諸島に分けられる。奄美群島は琉球列島のほぼ中央に位置しており、奄美大島は奄美群島の北側にある。

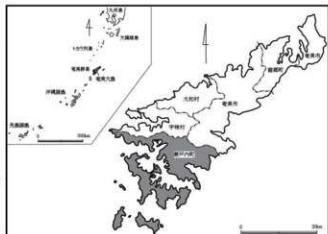
奄美大島の地形は全体的に山地が発達し、湯湾岳(694m)を最高峰として、小川岳(528m)、金川岳(528m)、タカバチ山(485m)、油井岳(483m)、滝ノ鼻山(482m)、烏ヶ峰(467m)など、急峻な山々が奄美大島南部を中心に形成されている。山尾根は海岸まで伸び、奄美大島南部の海岸の多くはリアス式海岸となる。このように奄美大島では海岸近くまで山地が発達している為に平坦地は少なく、島内の約85%は森林に占められる。島内には多数河川が流れているが、その多くは短い急流河川となる。このような地形は、奄美大島のすぐ南にある加計呂麻島や請島、与路島にも共通して見られる。なお奄美大島北部の笠利半島だけはこれらの地形とは異なり、山地の発達が乏しく、笠利半島西部には台地が広がる。

奄美大島の地質は、笠利半島に一部石灰岩がある以外は、ほとんどが古生層である。古生層は主に粘板岩・頁岩・砂岩・チャートで構成される。またこの古生層には花崗岩の貫入が見られ、奄美大島の一部では花崗岩の露頭が認められる。

奄美大島の気候は亜熱帯海洋性で温暖多雨となる。年平均気温は21.6℃で、年間降水量は2837.7mmである。特に年間降水量の内、梅雨時期の5～6月の降水量は全体の24%、台風が多数接近する8～9月の降水量は全体の20%を占める。また冬から春にかけては低気圧や前線、寒気の影響を受け雨や曇りの日が多くなる。

前述した奄美大島に広がる深い森林と亜熱帯海洋性の温暖な気候は、島内に多様な生態系を形成する大きな要因となっている。奄美大島には多数の貴重な動植物が生息しており、国指定天然記念物に9種が指定されている。また、近年では世界自然遺産の候補地として注目されている。

奄美大島は、奄美市、竜郷町、大和村、宇検村、瀬戸内町の五つの行政区に分かれており、瀬戸内町は奄美大島の南部に位置している。瀬戸内町域には奄美大島以外に加計呂麻島・請島・与路島などの島々が含まれており、奄美大島と加計呂麻島の間には大島海峡が広がる。瀬戸内町の地形は、発達した山地とリアス海岸が特徴で、水深の深い良好な港が多く見られる。特に大島海峡は波がおだやかであり、古仁屋港は現在避難港として利用されている。



第1図 瀬戸内町の位置

第2節 歴史的環境

1. 先史時代～近世

奄美群島の先史時代は九州島の影響を色濃く受ける一方、弥生時代に九州以北で始まった稲作農耕を取り入れ無い等、他地域からの影響を選択的に採り入れつつ、独自の文化を醸成してきた。

なお、近代以前の詳細は別冊に記載してあるので、ここでは省略したい。

2. 近代以降（1868年～）

（1）Ⅰ期：奄美大島要塞開庁以前（明治期）

明治維新以降、日本政府は西欧列強の植民地支配を避ける為に、西洋諸国から最新の築城技術や建築資材を導入し国土防衛の為に沿岸砲台を整備した。近代的な法治国家と認められ欧米諸国と対等な地位を得た日本は、朝鮮に対する主導権をめぐり清と対立する。日清間が緊張状態に陥ると日本は軍備増強を図り、大島海峡にも軍事施設が構築される様になる。1891（明治24）年、久慈に「佐世保海軍軍需部大島支庫（石炭庫）」が建設され、日清戦争が終了する1895（明治28）年には、戦利品を用いた「水溜」が増築されている。また、日清戦争後に日本領となった台湾への航路整備の為に、奄美大島初の灯台である「曾津高崎灯台」が1896（明治29）年に運用を開始している。

満州（中国東北部）への利権をめぐり、三国干渉等でロシアとの関係が悪化した日本は、国内の要衝に要塞建設および整備を行っていく。大島海峡では海峡東口に「海通崎望楼」を、海峡西口の曾津高崎灯台内に「曾津高崎望楼」を設置するが、これは日本海海戦の直前である事からロシア艦隊への備えと想定される。

日露戦争終結後、大島海峡では海軍による演習や視察が行われ、1911（明治44）年には大島海峡の集落を中心に水源調査が実施されている。海軍が大島海峡を艦隊泊地として重要視していた事が理解出来るが、この時点では海軍防備隊の設置には至っていない。

その後、日本は第一次世界大戦において連合国側として参戦し、ドイツに対して勝利を取め、中国大陸や南洋諸島において支配地域を広げた。

（2）Ⅱ期：奄美大島要塞開庁後から太平洋戦争直前（大正期）

第一次世界大戦が終結すると世界情勢は安定するようになり、1920（大正9）年には国際連盟が発足し日本も加盟国となる。

こうした中、1919（大正8）年5月に「要塞整理要領」、同年12月に「防備要領」が裁可され、奄美大島は小笠原諸島の父島や台湾の澎湖島とともに太平洋上の第一線要塞として策定される。1920（大正9）年8月「陸軍築城部奄美大島支部」が新設され、翌年7月に「奄美大島要塞」の建設が着工された。奄美大島要塞の建設については海軍が軍港防衛の為に要塞建設を要望した、と言われている。しかし、1922（大正11）年に成立したワシントン海軍軍縮条約の防備制限によって「奄美大島要塞」の工事は中止され、要塞に付帯する施設も建設が中止された。1923（大正12）年「要塞再整理要領」が裁可されると、未完成部分はあるながらも古仁屋に「奄美大島要塞司令部」が開庁した。これにより、「奄美大島要塞」は軍事上重要な基地の一つとなり、要塞地帯法や軍機保護法等の軍事法規の制限を受けるようになった。

その後、軍縮や国際協調の時代がしばらく続いたが、世界恐慌や不況により各国は排他的な経済圏を作り相互に対立するようになる。こうした中、日本は満州事変により満州国建国を宣言するも、国際連盟がその宣言を拒否すると日本は国際連盟を脱退する。1936(昭和11)年には軍縮条約も期限切れとなり、日本は国際的な孤立を深めていく。

(3) III期：太平洋戦争前半(昭和16～18年)

満州を支配下に置いた日本はさらに中国北部に侵攻する。1937(昭和12)年7月、盧溝橋事件が発端となり日中戦争が勃発すると、「奄美大島要塞」の一部に砲が配備され、軍備増強が行われた。また、イギリスやフランスがドイツとの戦争で劣勢になると、日本は「大東亜共栄圏」の建設を唱え、これらの国々の植民地であった東南アジアへと進出する。こうした東アジアでの日本の動きを非難していたアメリカとの関係は悪化し、1941(昭和16)年7月にアメリカは日本への石油輸出禁止を実施する。同年9月には「奄美大島要塞司令部」に動員下令が布かれ、「奄美大島重砲兵連隊(2740部隊)」や「2719部隊(奄美大島要塞歩兵第28中隊)」、「要塞通信隊」、「憲兵古仁屋分遣隊」、「陸軍病院」等が配備された。また、海軍も加計呂麻島・瀬相に「大島防備隊本部」を置き、三浦に「海軍施設部」、須手に「海軍航空隊古仁屋基地」を設置する等、大島海峡の各所に施設を構築した。同年12月8日、日本軍はマレー半島に上陸する一方でハワイの真珠湾へ奇襲攻撃を行う。アメリカ・イギリスへ宣戦布告し、第二次世界大戦(大東亜戦争)が勃発すると、奄美大島は艦船の出入が激しい重要な南進基地となる。

(4) IV期：太平洋戦争後半(昭和19～20年)

日本は短期間で東南アジアから南太平洋にかけての広大な地域を占領したが、1942(昭和17)年のミッドウェー海戦の敗北後に戦況が次第に悪化すると、1943(昭和18)年頃から奄美近海でも敵潜水艦などが出没し始める。

1944(昭和19)年4月、喜界島・徳之島の陸軍航空基地が概ね完成し、同年5月「奄美大島要塞司令部」は沖縄第32軍の指揮下に編入され閉庁する。同年9月には徳之島陸軍航空基地防備強化の為、大島海峡にある砲台の一部が撤収・移築された。そして同年11月、特攻艇である「海軍第17・18震洋隊」が配備された。この頃から奄美大島周辺でも米軍の攻撃が激化し、「富山丸」や「対馬丸」など船舶への攻撃や市街地への空襲も増加した。

1945(昭和20)年には、須手の「海軍航空隊古仁屋基地」からも沖縄特攻攻撃が行われる様になり、「海軍第44震洋隊」及び沖縄へ航行不能となった「陸軍海上挺進第29戦隊」が配備された。終戦間際、海軍震洋隊と陸軍海上挺身戦隊は共同作戦を取ったが、出撃する事は無かった。

(5) V期：終戦後(終戦～現在)

1945(昭和20)年8月15日、日本は連合国が発表した「ポツダム宣言」を正式に受諾し、終戦を迎えた。敗戦後の日本は、全ての植民地を失っただけでなく、沖縄と奄美群島、小笠原諸島はアメリカ軍の直接統治下に置かれる事となり、北方領土はソビエト連邦に占拠された。日本本土は、連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)による間接統治が行われ、非軍事化及び民主化等の戦後改革が行われた。

奄美群島の武装解除は、1945(昭和20)年9月22日に徳之島において、E・H・エドワード大佐と高田利貞陸軍少将との会見後に決定された。翌23日に徳之島から武装解除が順次開始され、大島海峡の武装解除は9月25日から各施設で行われた。武器、弾薬、機材

等搬出できるものは海中投棄され、搬出困難な砲台等は砲身に爆薬を詰めて爆破された。重火器類については海中投棄されたが、軍事施設の破壊は行われず「海軍航空隊跡」等、施設の一部は米軍により接収され利用された。米軍に利用されなかった施設についても、木造兵舎は学校校舎や集落集会所に利用する為に移築され、鉄筋コンクリート施設の一部は金属を抜き取る為に破壊された。この時に「手安弾薬本庫」も内部の銅板や鉄屑などが持ち去られている。また、奄美群島が日本に復帰すると、海中投棄された弾薬等は民間業者により引き揚げが行われた。

3. 近代の時期区分設定

近代遺跡が構築された当時の社会情勢については、1933（昭和8）年に編纂が開始された稿本『現代本邦築城史』において、要塞が建設された時期を「要塞建設期」「要塞整理期」「臨時要塞建設期」に大別している。「要塞建設期」は西洋築城技術に基づき日本の主要軍港や帝都防衛を目的に要塞が建設された明治年間、「要塞整理期」は日露戦争以降の兵器・軍事技術・築城資材の進歩、航空機の軍事利用等に対応する為、明治期に構築した要塞の統合と新設が行われた1920（大正9）年～1942（昭和17）年間、「臨時要塞建設期」は日中戦争開戦より終戦までの期間としている。

瀬戸内町における近代遺跡についても、今回の調査成果から前述の3期相当期間に各施設が構築された事を確認している。そこで、『現代本邦築城史』の分類を参考にしながら、瀬戸内町の近代遺跡に適した時期区分設定を行いたい。

瀬戸内町の近代遺跡で最も特徴的な施設は、大正期に陸軍が構築した「奄美大島要塞」である。大正期の「要塞整理期」に建設が始まった要塞で、瀬戸内町の近代遺跡が本格的に構築される契機となった軍事施設である。その為、奄美大島要塞が構築される以前を「Ⅰ期：奄美大島要塞開庁以前」とし、開庁後を「Ⅱ期：奄美大島要塞開庁後から太平洋戦争直前」とした。なお、奄美大島要塞開庁後は戦況や配備状況により近代遺跡の内容が変化している。そこで「大島防備隊」が設置され、太平洋戦争が始まる昭和16年以降を「Ⅲ期：太平洋戦争前半」とし、特攻部隊が配備され緊急的な軍事施設が著しく増加する昭和19年から終戦までを「Ⅳ期：太平洋戦争後半」に分けた。また、終戦後の近代遺跡の状況を把握する為に「Ⅴ期：終戦後」とし、大きく5期に時期区分を行った。

現代本邦築城史	元号	時期区分	瀬戸内町 (関連事項)
要塞建設期	明治10年代	西南戦争	
	明治20年代	日清戦争	佐世保海軍軍需部 大島司庫（石炭庫）
	明治30年代	日露戦争	
	明治40年代	第一次世界大戦	
大正8年 大正9年 大正10年 大正11年 大正12年	軍需期	要塞整理要領 最可 陸軍築城部奄美大島支部 ワシントン海軍軍縮会議 奄美大島要塞司令部設置	
要塞整理期	昭和12年 昭和13年 昭和14年 昭和15年 昭和16年 昭和17年 昭和18年 昭和19年 昭和20年	臨時軍事費特別会計法 臨時要塞建設期	大島防備隊設置
	昭和21年	終戦後	大島防備隊 瀬戸内町 瀬戸内町 瀬戸内町 独立混成第64旅団

第2図 時期区分の設定

表1 瀬戸内町の軍事施設関連・歴史年表

区分	西暦	元号	月日	事 項
I 奄美大島要塞開庁以前	1863	文久3	8/15	薩英戦争
	1866	慶応2年		白糖工場 建設(久慈) ※操業終了1871年(明治4年)
	1877	明治10		西南戦争
	1891	明治24		佐世保海軍軍需部大島支庫(石炭庫) 建設(久慈)
	1894	明治27	7/25	日清戦争
	1895	明治28	3月	船舶燃料補給の水源地施設 設置(久慈)
			4/17	下関講和条約 調印 (→ 日清戦争の終結)
	1896	明治29	11/25	曾津高塔に灯台 設置・点灯(西古見)
	1897	明治30	9月	電信本局 設置(久慈)
	1904	明治37	2/6	日露戦争
			2/27	曾津崎望楼 運用開始
	1905	明治38	5/27	日本海海戦
			9/5	日露講和条約(ポーツマス条約) 調印 (→ 日露戦争の終結)
	1908	明治41		大島海峡で日本海軍大演習 東郷平八郎上陸
	1910	明治43	8/22	日韓併合条約 調印
	1911	明治44	9月	日米の軍艦数目停泊(久慈・名瀬)
	1914	大正3	6/28	第一次世界大戦
			10/31	青島の戦い(独×日・英)
		11/7	ドイツ軍降伏/青島開城規約書 調印(青島要塞の陥落)	
1915	大正4	1/18	対華二十一条要求 (→5月9日要求受諾)	
1917	大正6	11/7	ロシア革命	
1918	大正7		連合国によるロシア革命に対する干渉戦争 ~1922年	
II 奄美大島要塞開庁後、太平洋戦争直前	1919	大正8	5月	要塞整理要領 裁可
			12月	奄美大島要塞、父島要塞の防備要領 裁可
			6/28	ヴェルサイユ条約 調印
	1920	大正9	1月	国際連盟 発足(日本国際連盟に加入)
				陸軍築城部奄美大島支部 設置(東方村)
				薩川湾軍港指定
	1921	大正10	11/11	ワシントン海軍軍縮会議 (~翌2月6日)
	1923	大正12	2月	要塞再整理要領 裁可
			4/1	奄美大島要塞司令部 設置(古仁屋)
			4/30	築城部奄美大島支部 廃止
			9/1	関東大震災
	1927	昭和2	8/6	天皇陛下御召艦(山城)にて行幸(名瀬、古仁屋) (~8月) 古仁屋小学校奉安殿 設置 (昭和2~3年)
1929	昭和4	10/24	世界恐慌	
1931	昭和6	9/18	満州事変	
1934	昭和9	12月	ワシントン海軍軍縮条約 破棄	
1937	昭和12	7/7	盧溝橋事件 (日中戦争 ~1945年9月9日)	
1939	昭和14	9/3	第二次世界大戦	
III 太平洋戦争前半	1941	昭和16	9月	陸軍奄美大島重砲兵連隊 配備(古仁屋) 海軍大島防備隊 設置(瀬相)
			12/8	真珠湾攻撃(日本参戦)
	1942	昭和17	6/5	ミッドウェー海戦
1943	昭和18	9/8	イタリア降伏	
IV 太平洋戦争後半	1944	昭和19	5/10	奄美大島要塞司令部 閉庁
			11/21	海軍第17震洋隊 配備(三浦) / 第18震洋隊 配備(吞之浦)
	1945	昭和20	3/8	海軍第44震洋隊 配備(久慈)
			3/15	陸軍海上挺進第29戦隊 配備(阿鉄)
			5/9	ドイツ降伏
			7/26	ポツダム宣言 発表
			8/6	広島原爆投下
			8/9	長崎原爆投下 / ソ連軍による満州進攻(ソ連中立条約の侵犯)
		8/14	ポツダム宣言 受諾	
		8/15	終戦	
V 終戦後			9/2	降伏文書 調印
			9/23	徳之島 武装解除
			9/25	奄美大島 武装解除
	1946	昭和21	2/2	奄美群島が日本から行政分離となる (米軍による直接統治開始)
			10/3	臨時北部南西諸島政庁 成立
	1950	昭和25	6/25	朝鮮戦争
		11/25	奄美群島政府へ改称	
1951	昭和26	9/8	サンフランシスコ平和条約(1952.4.28効力発生)	
1953	昭和28	12/25	奄美群島 日本復帰	

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

瀬戸内町内の近代遺跡分布調査は、2014（平成26）年度から2016（平成28）年度にかけて実施し、現在も調査を継続している。調査対象となる近代遺跡は、瀬戸内町全域に分布している為、2005（平成17）年に刊行した『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』第4章第6節既刊文献より作成した軍事施設・配備部隊一覧」を基に調査対象地域を設定し、調査準備が整った地域より順次分布調査を開始した。

調査地域の多くは、丘陵と谷が続く山間部が主体であった。現在では人為的な関与が殆ど無い地域である為、雑木や雑草が繁茂し踏査に困難をきたした。伐採を実施後に踏査を行うのが安全面及び調査精度の観点でも望ましいが、対象面積が広域である点に加え、希少野生動植物の生息域である可能性も高く、地権者や関係機関との調整等の面からも現実的では無かった。そこで、伐採を行わずに歩行・目視による踏査を実施した。

現地調査は、基本的に近代遺跡の位置情報及び現状確認、写真撮影を行い、町内の近代遺跡の分布状況を把握する事を第一の目的とした。また、安全面に配慮し素掘りの壕内部等、危険性が高いと判断した箇所での調査は実施しなかった。位置情報の取得は、分布調査対象地域が広域である事からGPS（GARMIN e trex 30）を使用し、近代遺跡の地点情報をGPSデータで記録した。記録されたGPSデータは、整理を行い分布図等に使用している。なお、一部の調査対象地域では、地元住民の協力を得て共同で調査を実施する事が出来た。その為、伐採や簡易測量を実施する事ができた箇所もある。遺物は、調査実施範囲において表面採集出来た資料のみ採集した。

資料調査は、インターネットを中心に実施した。アジア歴史資料センターにて「奄美」及び「大島防備隊」のキーワードで検索を行い、把握できた資料を整理してリストを作成した。また、既刊文献の整理についても実施した。

第2節 遺跡名称の整理

瀬戸内町内の近代遺跡は、これまでに学術的な調査が実施されておらず、周知の遺跡にも認定されていない為、明確な名称が決定していない。また、近代遺跡が運用されていた時期の記録や既刊文献での記述についても相違するものが少なくない。そこで、本書では下記の順番を基本とし、近代遺跡の名称を決定し使用する。ただし、今後の調査により近代遺跡の名称が判明・確定した際には、遺跡名称を変更する。

- ①近代遺跡（軍事施設）が運用されていた期間に作成された文献史料上の名称。
- ②既刊文献において、共通の記載がある名称。
- ③瀬戸内町立郷土館にて保管している郷土資料に記載されている名称。
- ④開掘り調査により得られた名称。
- ⑤「集落名」＋「近代遺跡の構造や運用方法」により名称を決定。
- ⑥名称や用途が不明な施設については、「不明施設」とする。

第3節 調査概要

今回の調査により瀬戸内町内で把握された近代の軍事施設跡は、現地調査で196箇所(残存137箇所、半壊及び一部残存36箇所、消滅23箇所)と、文献資料で新たに確認した10箇所の合計206箇所である。また、文献資料は648点確認出来た。今後も分布調査を継続する為、軍事施設跡の総数は増加が見込まれる。

確認された軍事施設跡は、大島海峡を中心に陸・海軍共に様々な構築物を建造しており、その種類は砲台跡、銃座、弾薬庫跡、観測所、防備衛所、兵舎跡、給水槽、軍道、防空壕、望楼等が挙げられる。

また、天然の良港である大島海峡は、明治期から終戦間際という長期間、陸・海軍に使用されていた事から、時代背景に沿った配備状況や軍備を確認することが出来る。なお、第3章において時期区分を設定している。

遺物は、ガラス瓶や統制陶器を採集した。

第2節 調査成果

今回確認出来た軍事施設跡は、表2～8「瀬戸内町の軍事施設一覧」及び第3図「瀬戸内町の軍事施設跡分布図および地区設定図」で示した通りである。なお、運用期間が判明している軍事施設は、一覧表の時期区分欄に記号によりその運用期間を表記した。Ⅰ～Ⅳ期は「●：運用」とし、Ⅴ期については軍事施設の破壊が起こり、施設数や状態に変化が生じる為、その保存状態から「○：残存」、「△：半壊もしくは一部残存」、「×：消滅」、「?：文献資料のみで確認し現地未確認」とした。

また、軍事施設跡の分布域を10地区に分け、地区ごとに報告を行う事とした。本来ならば、軍事施設跡の関係性を考慮して地区設定を行うのが理想であるが、各軍事施設跡の性格が明らかになっていない現段階では関連性による地区設定は困難である為、軍事施設跡が密集している範囲を抽出し地区設定を行った。地区設定については、第3図「瀬戸内町の軍事施設跡分布図および地区設定図」を参照して頂きたい。

文献資料については、アジア歴史資料センターにて「奄美」及び「大島防備隊」で検索を行い、1071件の資料を把握出来た。また、瀬戸内町の軍事施設跡に関連する内容の資料を抽出し、648件まで整理を行った。今回の資料調査により収集した資料は表9～25「アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料」にまとめ、レファレンスコード、標題、資料名のみを報告する。

表2 瀬戸内町内の軍事施設跡一覧①

番号	地区	地点	部隊	構築物	時期区分					掲載頁
					I	II	III	IV	V	
1	皆津崎	皆津崎灯台	海軍	望楼	●	●	●	●	?	20
2	皆津崎	皆津崎	砲兵聯隊	弾薬庫①		●	●	●	○	21
3	皆津崎	皆津崎	砲兵聯隊	弾薬庫②		●	●	●	○	-
4	皆津崎	皆津崎	砲兵聯隊	砲台①		●	●	●	○	21
5	皆津崎	皆津崎	砲兵聯隊	砲台②		●	●	●	○	-
6	皆津崎	皆津崎	砲兵聯隊	兵舎		●	●	●	△	-
7	皆津崎	皆津崎	砲兵聯隊	軍道、橋		●	●	●	○	-
8	皆津崎	ホノホシ	陸軍	砲台				●	×	22
9	皆津崎	ホノホシ	陸軍	軍道		●	●	●	○	23
10	古仁屋	瀬久井	2719部隊	兵舎		●	●	●	×	25
11	古仁屋	春日	憲兵分遣隊	庁舎・官舎			●	●	×	26
12	古仁屋	古仁屋	奄美大島要塞司令部	陸軍棧橋、軍道		●	●	●	△	27
13	古仁屋	古仁屋	陸軍病院	陸軍病院			●	●	×	28
14	古仁屋	高丘	奄美大島要塞司令部	要塞司令部		●	●	●	△	29
15	古仁屋	高知山	2740部隊	本部壕、幕舎				●	?	-
16	古仁屋	須手	海軍航空隊	壕①			●	●	○	-
17	古仁屋	須手	海軍航空隊	壕②			●	●	○	-
18	古仁屋	須手	海軍航空隊	壕③			●	●	○	-
19	古仁屋	須手	海軍航空隊	駐機場			●	●	△	-
20	古仁屋	手安	陸軍	監守衛舎		●	●	●	○	33
21	古仁屋	手安	陸軍	弾薬庫①		●	●	●	○	33
22	古仁屋	手安	陸軍	弾薬庫②		●	●	●	○	-
23	古仁屋	久根津	海軍航空隊	駐機箇所				●	×	-
24	古仁屋	阿鉄	陸軍海上挺進第29戦隊	艇秘匿箇所				●	×	-
25	古仁屋	阿丹花崎	海軍	見張所			●	●	?	-
26	久慈	古志・部連	海軍	砲台			●	●	△	35
27	久慈	古志・部連	海軍	探照灯			●	●	△	35
28	久慈	古志・部連	海軍	コンクリート施設			●	●	△	35
29	久慈	久慈	佐世保海軍	水溜	●	●	●	●	○	36, 37
30	久慈	久慈	佐世保海軍	濾水池	●	●	●	●	△	36
31	久慈	久慈	佐世保海軍	取水口	●	●	●	●	○	36
32	久慈	プラタ	第44震洋隊	防空壕				●	△	-
33	久慈	プラタ	第44震洋隊	壕①				●	×	39
34	久慈	プラタ	第44震洋隊	壕②				●	×	39
35	久慈	プラタ	第44震洋隊	壕③				●	△	39
36	久慈	プラタ	第44震洋隊	壕④				●	○	39
37	久慈	プラタ	第44震洋隊	壕⑤				●	△	39
38	久慈	プラタ	第44震洋隊	壕⑥(石罫箇所)				●	×	39
39	久慈	大浜	海軍第11中隊	重砲弾筒等				●	?	-
40	西古見	西古見	砲兵聯隊	橋			●	●	○	84
41	西古見	池堂	砲兵聯隊	軍棧橋		●	●	●	○	42
42	西古見	池堂	砲兵聯隊	監守衛舎		●	●	●	○	-
43	西古見	池堂	砲兵聯隊	兵舎①			●	●	○	42
44	西古見	池堂	砲兵聯隊	兵舎②			●	●	○	42
45	西古見	池堂	砲兵聯隊	不明施設(弾薬庫?)		●	●	●	○	44
46	西古見	池堂	砲兵聯隊	弾薬庫①		●	●	●	○	44
47	西古見	池堂	砲兵聯隊	砲台①		●	●	●	○	44
48	西古見	池堂	砲兵聯隊	弾薬庫②		●	●	●	○	44
49	西古見	池堂	砲兵聯隊	砲台②		●	●	●	○	-
50	西古見	池堂	砲兵聯隊	沈殿池		●	●	●	○	44

表3 瀬戸内町内の軍事施設跡一覧②

番号	地区	地点	部隊	構築物	時期区分					掲載頁
					I	II	III	IV	V	
51	西古見	池堂	砲兵聯隊	観測所①		●	●	●	○	45
52	西古見	池堂	砲兵聯隊	軍道		●	●	●	○	-
53	西古見	池堂	砲兵聯隊	観測所②		●	●	●	?	-
54	西古見	曾津高崎	海軍	不明施設				●	○	47
55	西古見	曾津高崎	海軍	不明壕				●	○	47
56	西古見	曾津高崎	海軍	望楼	●	●	●	●	○	47
57	西古見	曾津高崎	海軍	貯水槽	●	●	●	●	○	47
58	実久	江仁屋離島	陸・海軍	軍棧橋		●	●	●	△	50
59	実久	江仁屋離島	陸・海軍	軍道		●	●	●	○	-
60	実久	江仁屋離島	陸・海軍	井戸①		●	●	●	○	-
61	実久	江仁屋離島	陸・海軍	兵舎①		●	●	●	○	50
62	実久	江仁屋離島	陸・海軍	機銃?			●	●	△	-
63	実久	江仁屋離島	陸・海軍	水源等		●	●	●	○	-
64	実久	江仁屋離島	陸・海軍	見張り所			●	●	△	-
65	実久	江仁屋離島	陸・海軍	井戸②		●	●	●	○	-
66	実久	江仁屋離島	陸・海軍	円形砲台①			●	●	○	50
67	実久	江仁屋離島	陸・海軍	円形砲台②			●	●	○	-
68	実久	江仁屋離島	陸・海軍	馬蹄形砲台①			●	●	○	50
69	実久	江仁屋離島	陸・海軍	馬蹄形砲台②			●	●	○	-
70	実久	江仁屋離島	陸・海軍	馬蹄形砲台③			●	●	○	-
71	実久	江仁屋離島	陸・海軍	馬蹄形砲台④			●	●	○	-
72	実久	江仁屋離島	陸・海軍	不明構造物			●	●	○	-
73	実久	江仁屋離島	陸・海軍	指揮所?			●	●	×	-
74	実久	江仁屋離島	陸・海軍	兵舎②			●	●	○	50
75	実久	江仁屋離島	陸・海軍	円形コンクリ施設			●	●	○	50
76	実久	江仁屋離島	海軍	防備衛所			●	●	○	50
77	実久	江仁屋離島	海軍	サンゴ施設			●	●	○	-
78	実久	江仁屋離島	海軍	貯水施設			●	●	○	-
79	実久	実久	陸・海軍	監守衛舎		●	●	●	○	51
80	実久	実久	陸・海軍	貯水槽①		●	●	●	○	53
81	実久	実久	陸・海軍	貯水槽②		●	●	●	○	-
82	実久	実久	陸・海軍	トーチカ			●	●	○	53
83	実久	実久	陸・海軍	防空壕①			●	●	○	53
84	実久	実久	陸・海軍	機銃跡			●	●	△	-
85	実久	実久	陸・海軍	迫撃砲(擲弾筒)			●	●	△	53
86	実久	実久	陸・海軍	切通し			●	●	○	-
87	実久	実久	陸・海軍	防空壕②			●	●	○	-
88	実久	実久	陸・海軍	兵舎①		●	●	●	○	53
89	実久	実久	陸・海軍	兵舎②		●	●	●	×	-
90	実久	実久	陸・海軍	蛸壺群			●	●	○	-
91	実久	実久	陸・海軍	観測所①			●	●	×	54
92	実久	実久	陸・海軍	山中防空壕壕			●	●	○	53
93	実久	実久	陸・海軍	貯水槽(沈殿槽)		●	●	●	○	53
94	実久	実久	陸・海軍	弾薬庫①		●	●	●	○	54
95	実久	実久	陸・海軍	砲台①		●	●	●	○	54
96	実久	実久	陸・海軍	貯水池		●	●	●	○	53
97	実久	実久	陸・海軍	弾薬庫②		●	●	●	○	54
98	実久	実久	陸・海軍	砲台②		●	●	●	○	54
99	実久	実久	陸・海軍	砲台③		●	●	●	○	54
100	実久	実久	陸・海軍	観測所②			●	●	○	54

表4 瀬戸内町内の軍事施設跡一覧③

番号	地区	地点	部隊	構築物	時期区分					掲載頁
					I	II	III	IV	V	
101	実久	実久	陸・海軍	警戒陣地(対空陣地)			●	●	○	54
102	実久	実久	陸・海軍	見張り所			●	●	○	-
103	実久	実久	陸・海軍	軍道		●	●	●	○	-
104	須子茂	モン崎	海軍	第一水平砲				●	△	57
105	須子茂	モン崎	海軍	指揮所(弾薬庫)				●	△	57
106	須子茂	モン崎	海軍	第二水平砲				●	△	57
107	芝	深浦	海軍	砲台				●	?	84
108	嘉入	嘉入	海軍	砲台				●	×	84
109	西阿室	西阿室	海軍	壕				●	○	84
110	瀬相	平松山	海軍	機銃				●	?	-
111	瀬相	サキバル	海軍	蛟竜隊壕				●	○	-
112	瀬相	サキバル	海軍	軍栈橋			●	●	○	62
113	瀬相	サキバル	海軍	軍道			●	●	○	-
114	瀬相	サキバル	海軍	不明施設①			●	●	△	-
115	瀬相	サキバル	海軍	不明施設②			●	●	△	-
116	瀬相	サキバル	海軍	不明施設(壕?)			●	●	○	-
117	瀬相	三浦	海軍	不明施設(壕)			●	●	○	61
118	瀬相	三浦	海軍	防空壕			●	●	○	61
119	瀬相	三浦	海軍施設部	海軍施設部			●	●	○	61
120	瀬相	三浦	第17震洋隊	震洋艇壕 三浦①				●	○	63
121	瀬相	三浦	第17震洋隊	震洋艇壕 三浦②				●	○	63
122	瀬相	三浦	第17震洋隊	震洋艇壕 三浦③				●	○	63
123	瀬相	三浦	第17震洋隊	震洋艇壕 三浦④				●	○	63
124	瀬相	仲田浦	第17震洋隊	震洋艇壕 仲田浦①				●	○	64
125	瀬相	仲田浦	第17震洋隊	震洋艇壕 仲田浦②				●	○	64
126	瀬相	仲田浦	第17震洋隊	震洋艇壕 仲田浦③				●	○	64
127	瀬相	仲田浦	第17震洋隊	震洋艇壕 仲田浦④				●	○	64
128	瀬相	仲田浦	第17震洋隊	震洋艇壕 仲田浦⑤				●	○	64
129	瀬相	仲田浦	第17震洋隊	震洋艇壕 仲田浦⑥				●	○	64
130	瀬相	三浦	海軍	海軍艦船給水ダム			●	●	○	59、60
131	瀬相	瀬相	大島防備隊	隊門			●	●	○	66
132	瀬相	瀬相	大島防備隊	軍栈橋			●	●	○	66
133	瀬相	瀬相	大島防備隊	戦斗指揮所			●	●	○	66
134	瀬相	瀬相	大島防備隊	不明施設			●	●	○	66
135	瀬相	瀬相	大島防備隊	壕			●	●	△	-
136	瀬相	呑ノ浦	第18震洋隊	兵舎				●	×	-
137	瀬相	呑ノ浦	第18震洋隊	震洋艇壕①				●	○	68
138	瀬相	呑ノ浦	第18震洋隊	震洋艇壕②				●	○	68
139	瀬相	呑ノ浦	第18震洋隊	震洋艇壕③				●	○	68
140	瀬相	呑ノ浦	第18震洋隊	震洋艇壕④				●	○	68
141	瀬相	呑ノ浦	第18震洋隊	震洋艇壕⑤				●	○	68
142	瀬相	呑ノ浦	第18震洋隊	震洋艇壕⑥				●	○	68
143	瀬相	乙埜	海軍	-				●	?	-
144	秋徳	先鼻	海軍	探照灯				●	△	72
145	秋徳	先鼻	海軍	機銃陣地				●	△	72
146	秋徳	先鼻	海軍	発電所				●	×	72
147	秋徳	先鼻	海軍	第一水平砲				●	○	71
148	秋徳	先鼻	海軍	第二水平砲				●	○	71
149	秋徳	先鼻	海軍	指揮所				●	○	72
150	秋徳	先鼻	海軍	弾薬庫				●	○	72

表5 瀬戸内町内の軍事施設跡一覧④

番号	地区	地点	部隊	構築物	時期区分					掲載頁	
					I	II	III	IV	V		
151	秋徳	先鼻	海軍	防空壕				●	○	72	
152	勝能	ユバマ	海軍	鎮西送信所				●	?	84	
153	安脚場	待網崎	海軍	高角砲①				●	○	74	
154	安脚場	待網崎	海軍	高角砲②				●	○	-	
155	安脚場	待網崎	海軍	弾薬庫③				●	○	74	
156	安脚場	待網崎	海軍	高角砲③				●	○	-	
157	安脚場	待網崎	海軍	不明施設				●	○	-	
158	安脚場	安脚場	陸軍	監守衛舎		●	●	●	○	75	
159	安脚場	安脚場	海軍	烹炊所		●	●	●	○	75	
160	安脚場	安脚場	陸・海軍	軍道		●	●	●	○	-	
161	安脚場	安脚場	陸・海軍	貯水槽①		●	●	●	○	77	
162	安脚場	安脚場	陸・海軍	貯水槽②		●	●	●	○	-	
163	安脚場	金子手崎	陸・海軍	探照灯①		●	●	●	○	77	
164	安脚場	金子手崎	陸・海軍	防備衛所		●	●	●	○	77	
165	安脚場	金子手崎	海軍	連絡壕				●	○	77	
166	安脚場	金子手崎	海軍	機銃跡①				●	△	-	
167	安脚場	金子手崎	海軍	不明施設				●	○	77	
168	安脚場	金子手崎	陸・海軍	弾薬庫①		●	●	●	○	76	
169	安脚場	金子手崎	陸・海軍	砲台①		●	●	●	○	76	
170	安脚場	金子手崎	陸・海軍	砲台②		●	●	●	○	-	
171	安脚場	金子手崎	陸・海軍	機銃②陣地				●	×	-	
172	安脚場	金子手崎	陸・海軍	貯水池		●	●	●	○	76	
173	安脚場	金子手崎	陸・海軍	貯水槽(沈殿槽)		●	●	●	○	76	
174	安脚場	金子手崎	陸・海軍	砲台③		●	●	●	○	-	
175	安脚場	金子手崎	陸・海軍	弾薬庫②		●	●	●	○	77	
176	安脚場	金子手崎	陸・海軍	砲台④		●	●	●	○	-	
177	安脚場	金子手崎	海軍	発電所跡				●	●	?	76
178	安脚場	金子手崎	海軍	砲台			●	●	×	79	
179	安脚場	金子手崎	海軍	探照灯②			●	●	○	79	
180	安脚場	金子手崎	海軍	探照灯③			●	●	○	79	
181	安脚場	金子手崎	住民	防空壕(住民)				●	○	79	
182	安脚場	金子手崎	海軍	防空壕				●	△	79	
183	安脚場	金子手崎	海軍	暫壕				●	△	78	
184	安脚場	金子手崎	海軍	蛸壺群				●	△	78	
185	安脚場	金子手崎	海軍	機銃跡③				●	△	-	
186	安脚場	徳浜	住民	防空壕				●	×	80	
187	安脚場	徳浜	海軍	橋①				●	△	-	
188	安脚場	徳浜	海軍	水路①				●	○	-	
189	安脚場	徳浜	海軍	橋②				●	△	-	
190	安脚場	徳浜	海軍	水路②				●	○	-	
191	安脚場	徳浜	海軍	軍道				●	○	-	
192	安脚場	徳浜	海軍	沈殿池				●	△	80	
193	安脚場	徳浜	海軍	兵舎				●	×	-	
194	安脚場	徳浜	海軍	砲台				●	×	80	
195	安脚場	徳浜	海軍	砲台(素掘り)①				●	×	80	
196	安脚場	徳浜	海軍	砲台(素掘り)②				●	×	-	
197	安脚場	徳浜	海軍	機銃跡①				●	△	-	
198	安脚場	徳浜	海軍	暫壕				●	△	-	
199	安脚場	徳浜	海軍	機銃跡②				●	△	-	
200	安脚場	徳浜	海軍	蛸壺群				●	○	-	

表6 瀬戸内町内の軍事施設跡一覧⑤

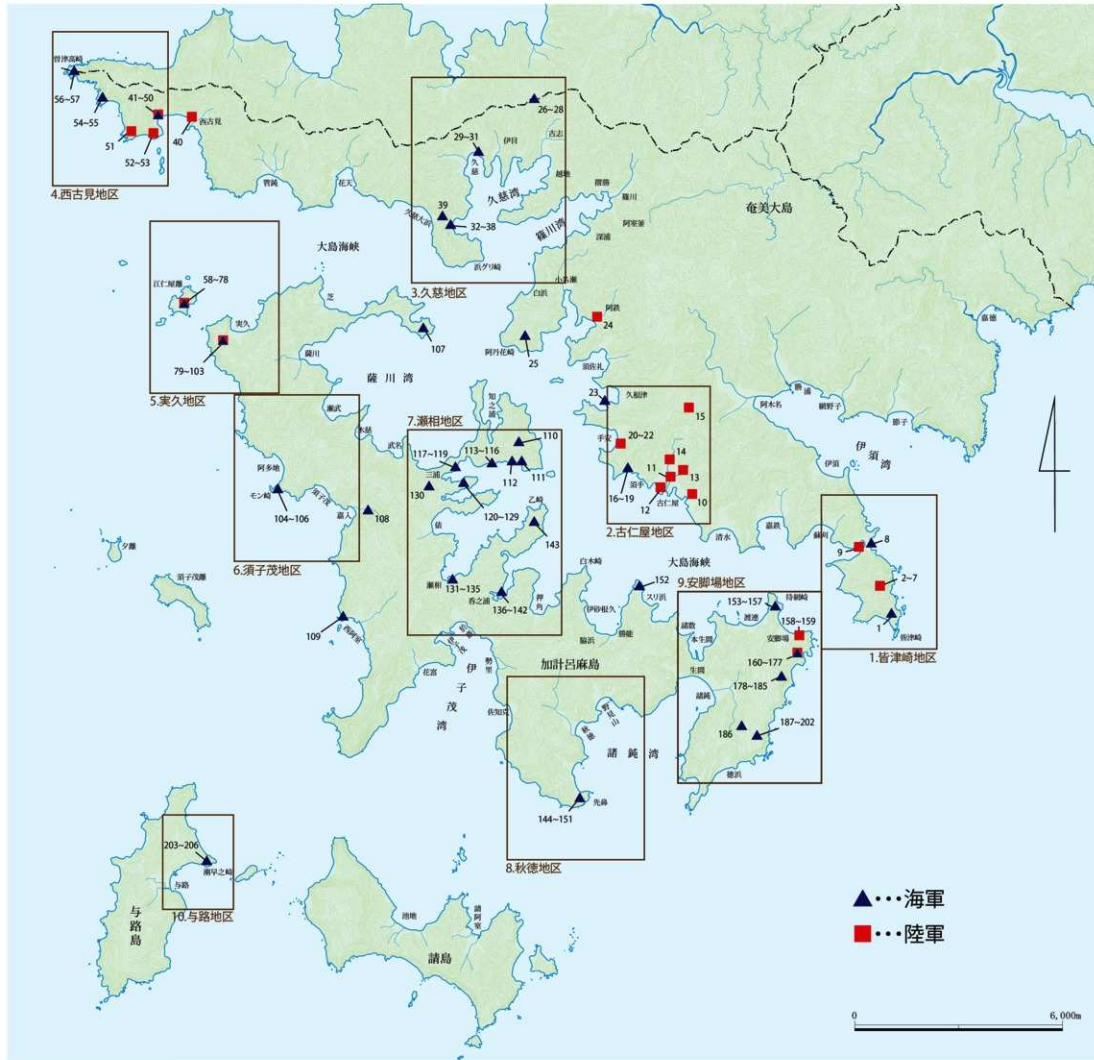
番号	地区	地点	部隊	構築物	時期区分					掲載頁
					I	II	III	IV	V	
201	安脚場	徳浜	海軍	砲台跡				●	○	-
202	安脚場	徳浜	海軍	防空壕				●	○	80
203	与路	潮早之鼻	海軍	探照灯				●	△	83
204	与路	潮早之鼻	海軍	砲台①				●	○	83
205	与路	潮早之鼻	海軍	砲台②、弾薬庫				●	○	83
206	与路	潮早之鼻	海軍	兵舎跡				●	×	-
時期区分ごとに運用(残存)されていた軍事施設跡 合計					5	63	122	206	137	

表7 V期の残存状況別集計表

V期 残存度	集計	備考
○…残存している軍事施設跡	137	現地で現存を確認した数
△…半壊している軍事施設跡	36	現地で半壊、一部残存を確認した数
×…消滅している軍事施設跡	23	現地で消滅を確認した数
?…現地未調査の軍事施設跡	10	文献のみで確認し、現地未調査地の数
合計	206	現地、文献等で確認した総数

表8 瀬戸内町内の軍事関連施設跡一覧

番号	地区施設	地点	部隊	構築物	時期区分					掲載頁	
					I	II	III	IV	V		
1	海上	車崎	不明	柱				?	●	○	85
2	海上	夕離島	不明	柱				?	●	○	85
3	海上	金子手崎	不明	柱				?	●	○	85
4	山間部	油井岳	不明	貯水槽				?	●	○	-
5	山間部	曾津高崎	不明	石垣		?		?	●	○	-
6	古仁屋	瀬久井	2719部隊	地帯標			●	●	●	×	-
7	古仁屋	高丘	奄美大島要塞司令部	地帯標		●	●	●	●	○	29
8	山間部	古仁屋	陸軍	境界標柱(コンクリート)		?		?	●	○	-
9	海上	江仁屋離島	陸軍	標柱(地帯標)		●	●	●	●	○	85
10	奉安殿	節子	節子尋常小学校	奉安殿			●	●	●	○	86
11	奉安殿	古仁屋	古仁屋尋常小学校	奉安殿		●	●	●	●	○	86
12	奉安殿	須子茂	須子茂尋常小学校	奉安殿			●	●	●	○	86
13	奉安殿	木慈	木慈尋常小学校	奉安殿			●	●	●	○	86
14	奉安殿	薩川	薩川尋常小学校	奉安殿			●	●	●	○	86
15	奉安殿	池地	池地尋常小学校	奉安殿			●	●	●	○	86
16	碑	鳥瀬	第六師団長福田彦助	聖上天皇臨御之地		●	●	●	●	○	86
17	碑	安脚場	陸軍	東郷元帥御上陸の跡			●	●	●	○	86
18	碑	久慈プラタ	厚生省	震洋艇遭難者の碑					●	○	39
19	碑	町内29箇所	各集落民等	忠魂・慰霊・招魂碑等					●	○	-



第3図 瀬戸内町の軍事施設分布図および地区設定図

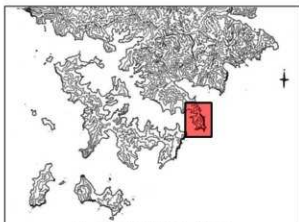
1. 皆津崎地区

皆津崎地区

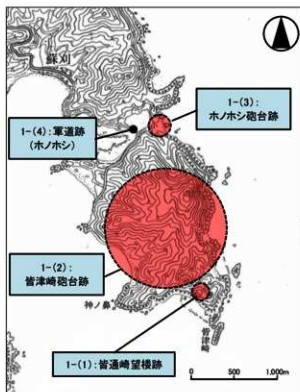
皆津崎地区は大島海峡東口（奄美大島側）という立地から、軍に重要視されており、明治期より軍事関連施設が設置されている。

●配備部隊（施設）名

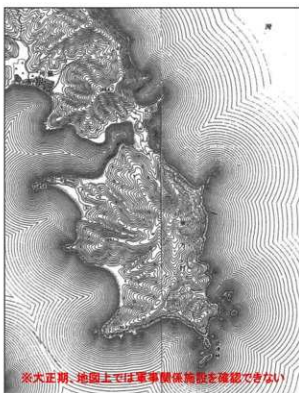
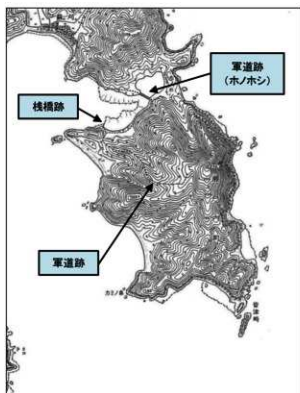
- 1- (1) : 皆通崎望楼跡
- 1- (2) : 皆津崎砲台跡
- 1- (3) : ホノホシ砲台跡
- 1- (4) : 軍道跡（ホノホシ）



第4図 皆津崎地区 位置図



第5図 皆津崎地区 部隊配置図

第6図 皆津崎地区（大正8年）
（国土地理院地図を一部改変）第7図 皆津崎地区（昭和31年）
（国土地理院地図を一部改変）

1-(1) : 皆通崎望楼跡 (推定位置 : 北緯28° 6' 44" : 東経129° 22' 40" 付近)



第8図 皆通崎望楼跡 位置図

皆通崎望楼跡

文献資料によると、明治31年7月には「海軍望楼 皆通崎」の記載があり、明治36年の資料では、皆通崎望楼が建設済である事が記載されている。

踏査結果では、望楼の基礎など構築物は確認できなかった。しかし、現在の灯台へ続く急峻な坂道には赤煉瓦が多数散布している為、現在の皆津崎灯台より西側にある小山 (104.9m) の山頂付近に、皆通崎望楼が建設されていたと推測できる。また、明治期の構築物でのみ使用される赤煉瓦が大量に散布する事から、当該地点において明治期の施設が存在していた事は間違いない。

望楼の詳細な位置および性格を明らかにする為、今後追加調査が必要である。



第9図 皆通崎望楼跡 遠景



第10図 遺物散布地

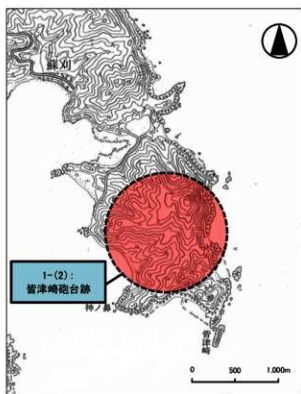


第11図 遺物散布状況



第12図 調査風景

1- (2) : 皆津崎砲台跡 (推定位置: 皆津崎海岸から尾根筋にかけての位置)



第13図 皆津崎砲台跡 位置図

皆津崎砲台跡

当該地区に設置された「砲台」は、海峡の東側を防備する要の施設であった。

大正10年、奄美大島要塞の軍事施設が次々と建設された。皆津崎砲台もこの時に構築された砲台である。同時期に周辺の軍事施設も整備され、現在の蘇刈線はこの時に整備された軍道が基礎となっている。しかし、大正10年のワシントン海軍軍縮会議において、太平洋上の要塞整備が禁止された為、砲台建設は未完成のまま中止された。その後、昭和15年頃になると皆津崎砲台にも備砲が成され、戦備が整えられるようになった。この時期、ホノホシにある軍道から皆津崎一帯への一般人の立ち入りは禁止されるようになる。要塞地帯を示す立札も建てられ、薪を取ることも許されなかった。

今回は、砲台の調査を行う事ができなかったが、これまでの調査成果から、軍道跡、弾薬庫跡、兵舎跡、砲台跡、貯水庫跡等が確認されている。また、終戦頃には観測所もあったようだが、現在は破壊されており存在しない。

当該地区は奄美大島要塞の中核を成す重要な地点である。砲台跡の位置および内容を知る為、今後も調査が必要である。



第14図 皆津崎砲台跡 遠景



第15図 榴弾砲台跡と思われる施設



第16図 弾薬庫跡 (調査風景)



第17図 弾薬庫跡 (内部)

1-(3) : ホノホシ砲台跡 (北緯28° 7' 50" : 東経129° 22' 16" 付近)



第18図 ホノホシ砲台跡 位置図

ホノホシ砲台跡

ホノホシ海岸は幅が狭く標高も低いため、人々が移動する際に岬を周らずに船を担いで移動した船越し(フナコシ)の場所である。こうした地形から、上陸するのに適した地形であることが想定できる。

当該地点には、ホノホシ海岸や伊須湾に侵入上陸する敵を射撃制圧するために、昭和19年頃に10種加農砲が2門設置された。

現在は公園整備されており、詳細な位置は不明である。



第19図 ホノホシ砲台跡 遠景



第20図 ホノホシ砲台跡 遠景 (推定位置)



第21図 ホノホシ砲台跡 近景 (推定位置)



第22図 ホノホシ砲台跡 周辺地形



第23図 ホノホシ砲台跡設置箇所 (推定位置)

1-(4) : 軍道跡 (ホノホシ) (北緯28° 7' 49" : 東経129° 22' 4")



第24図 軍道跡 (ホノホシ) 位置図

軍道跡 (ホノホシ)

当該地区に設置された「軍道」は、大正期に皆津崎に設置された砲台への連絡路として機能したようであり、車で移動できるように浅瀬を埋め立てて造られている。この道路から皆津崎一帯は要塞地帯であり、一般の人々の通行は禁止されていた。

軍道跡は、現在でも道路として使用されており、当時の石積みを確認することが出来る。



第25図 軍道跡 (ホノホシ) 昭和50年頃 遠景



第26図 軍道跡 (ホノホシ) 遠景 (大島海峡側)



第27図 軍道跡 (ホノホシ) 近景



第28図 軍道跡 (ホノホシ) 石積①



第29図 軍道跡 (ホノホシ) 石積②

2. 古仁屋地区

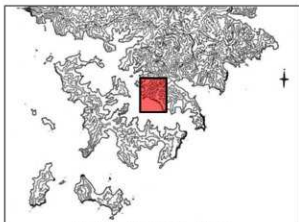
2. 古仁屋地区

古仁屋地区

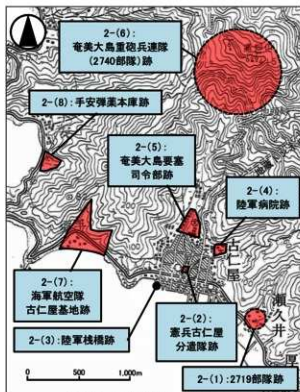
古仁屋地区は、大島海峡の中央よりやや東側（奄美大島側）に位置している。陸路の要衝であり、行政の中心地である。

●配備部隊（施設）名

- 2- (1) : 2719部隊跡
- 2- (2) : 憲兵古仁屋分遣隊跡
- 2- (3) : 陸軍棧橋跡
- 2- (4) : 陸軍病院跡
- 2- (5) : 奄美大島要塞司令部跡
- 2- (6) : 奄美大島重砲兵連隊 (2740部隊) 跡
- 2- (7) : 海軍航空隊古仁屋基地跡
- 2- (8) : 手安弾薬本庫跡



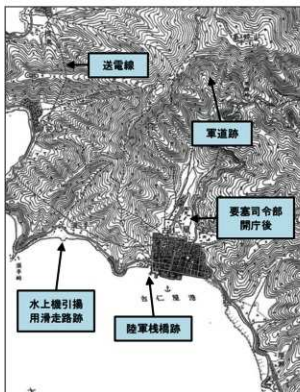
第30図 古仁屋地区 位置図



第31図 古仁屋地区 部隊配置図



第32図 古仁屋地区（大正8年）
（国土地理院地図を一部改変）



第33図 古仁屋地区（昭和31年）
（国土地理院地図を一部改変）

2- (1) : 2719部隊 (奄美大島要塞歩兵第28中隊) 跡

(北緯28° 8' 38" : 東経129° 19' 7" 付近)



第34図 2719部隊跡 位置図

2719部隊 (奄美大島要塞歩兵第28中隊) 跡

瀬久井地区は古仁屋の南東に位置する小規模な平地である。

昭和16年9月、太平洋方面の陸軍全要塞と主要沿岸要塞に動員が行われ、「準戦闘準備令」が下令された。

当該地区には「2719部隊」が配備され、昭和19年の奄美大島要塞閉庁までに約120名の衛兵が駐屯した。

現在は住宅などが建設されており、軍事施設など関連施設は残っていない。



第35図 2719部隊跡 遠景



第36図 瀬久井に駐屯した通称19(仔科)部隊関係要図 (徳永茂二氏資料を基に作成)

2-(2) : 憲兵古仁屋分遣隊跡 (北緯129° 8' 54" : 東経129° 18' 43")



第37図 憲兵古仁屋分遣隊跡 位置図

憲兵古仁屋分遣隊跡

「憲兵古仁屋分遣隊」は昭和16年頃に古仁屋のほぼ中央に設置された。昭和20年3月の古仁屋空襲により庁舎を消失してからは、阿木名の山田地区に移り、防諜、軍人および反戦的民間人の取り締まりなどを行っていた。

現在は、銀行などが建っており、軍事施設など関連施設は残っていない。



第38図 憲兵古仁屋分遣隊跡 遠景



第40図 憲兵古仁屋分遣隊の概況 (徳永茂二氏資料を基に作成)



第39図 憲兵古仁屋分遣隊跡 近景



第41図 昭和37年の古仁屋『加計呂馬島』より

2-(3) : 陸軍棧橋跡 (北緯28° 8' 50" : 東経129° 18' 33" 付近)



第42図 陸軍棧橋跡 位置図

陸軍棧橋跡

「陸軍棧橋」は、大正10年に工事が開始された奄美大島要塞司令部と同時期に建設されたと考えられる。昭和2年の昭和天皇行幸の際、天皇はこの棧橋から軍道を通り、奄美大島要塞司令部へと移動した場所でもある。

現在は埋め立てられており、詳細な地点は不明である。



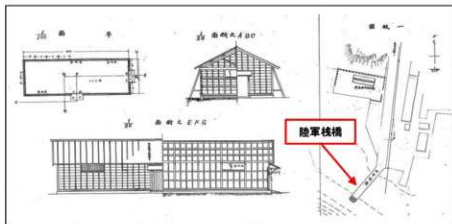
第43図 陸軍棧橋跡 遠景



第44図 陸軍棧橋跡 (昭和37年) 『加計呂麻島』より



第45図 軍道 『御行幸記念写真帖』より



第46図 奄美大島要塞古仁屋繫船場附属倉庫竣工図 (JACAR: C01006356000)

2-(4) : 陸軍病院跡 (北緯28° 9' 0" : 東経129° 18' 57" 付近)



第47図 陸軍病院跡 位置図

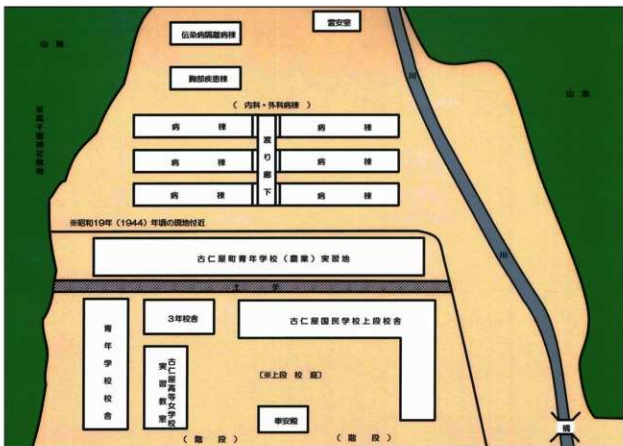
陸軍病院跡

「奄美大島陸軍病院」は南方からの傷病兵を一時入院させ、後に小倉の陸軍病院に護送する事を目的に、昭和16年に建設を開始、突貫工事で昭和17年の初めには完成した。昭和19年の富山丸の遭難兵士や近海で撃沈された船の乗員乗客も収容し治療を行った。昭和20年3月頃の空襲により建物が焼失した為、その後は高知山と油井岳の間に移転した。

現在、敷地は古仁屋中学校として利用されている。



第48図 陸軍病院跡 近景



第49図 奄美大島陸軍病院 (球2784部隊) 配置図 (徳永茂二氏資料を基に作成)

2- (5) : 奄美大島要塞司令部跡 (北緯28° 9' 7" : 東経129° 18' 44" 付近)



第50図 奄美大島要塞司令部跡 位置図

奄美大島要塞司令部跡

「奄美大島要塞司令部」は奄美大島の陸軍部隊の中心施設である。

大正9年陸軍築城部奄美大島支部が開設され、大正10年に奄美大島要塞の構築工事が開始された。しかし大正10～11年に開催されたワシントン海軍軍縮会議において太平洋上の軍事施設について、現在ある以上の要塞化が禁止されたため構築工事は中止された。そして大正12年、奄美大島要塞は未完ながらも、奄美大島要塞司令部が開庁した。昭和2年には昭和天皇が奄美大島要塞司令部を視察するなど、陸軍の中心施設として機能していた奄美大島要塞司令部であったが、戦況が悪化するにつれて徳之島と喜界島の飛行場防衛が重視されるようになると、昭和19年5月、21年間存続した奄美大島要塞司令部は閉鎖された。その後、司令部跡には「奄美大島重砲兵連隊(2740部隊)」の本部が置かれたが、昭和19年8月に重砲兵連隊が高知山に連隊本部を設置している。昭和20年3月の空襲により建物が焼失すると基地機能の中心は高知山へ移ることとなる。

現在、奄美大島要塞司令部跡地は古仁屋高等学校などに利用されている。軍事関連構造物は、司令部を囲っていた壁が一部残るのみである。



第51図 奄美大島要塞司令部跡 遠景



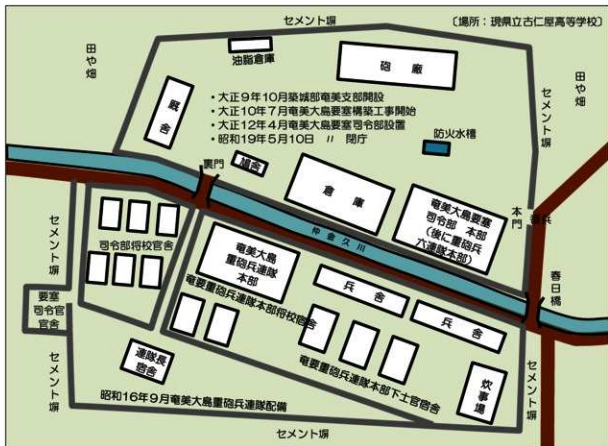
第52図 奄美大島要塞司令部(表門)跡 近景



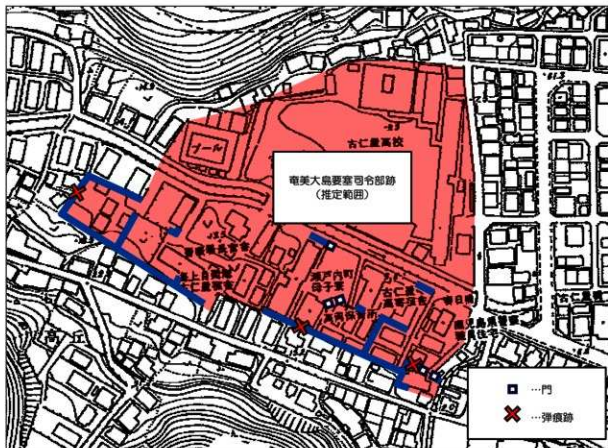
第53図 壁に残る弾痕



第54図 奄美大島要塞司令部『御行幸写真帖』より



第55図 陸軍奄美大島要塞司令部〔奄美大島重砲兵連隊〕配置図（徳永茂二氏資料を基に作成）



第56図 陸軍奄美大島要塞司令部 跡の残存箇所

2-(6) : 奄美大島重砲兵連隊 (2740部隊) 跡 (北緯28° 10' 0" : 東経129° 19' 5" 付近)



第57図 奄美大島重砲兵連隊 位置図

奄美大島重砲兵連隊 (2740部隊) 跡

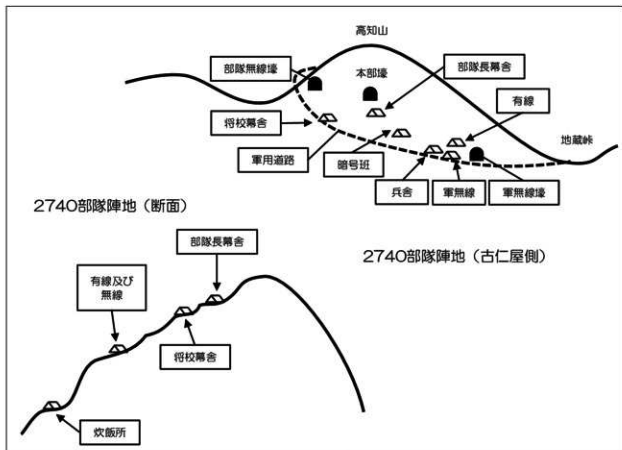
高知山は古仁屋の北方に位置する標高411mの山である。大島海峡のほぼ全域を遠望できるため、陸軍に重要視された地点である。

昭和19年「奄美大島重砲兵連隊 (通称40部隊)」の本部が古仁屋から高知山に移動すると、本格的に陣地として利用されることになる。しかし、徳之島や喜界島の飛行場防衛の為に砲兵隊を派遣していたので、終戦間際にはわずかな兵力と火炮しかなく、敵機への応戦は行わなかった。

終戦間際の奄美大島防衛における陸軍の拠点であるため、今後調査が必要な地点である。



第58図 高知山 (重砲兵連隊本部) 遠景



第59図 奄美大島重砲兵連隊 (2740部隊) 高知山陣地の図 (徳永茂二氏資料を基に作成)

2-(7) : 海軍航空隊古仁屋基地跡 (北緯28° 9' 2" : 東経129° 18' 5" 付近)



第60図 海軍航空隊古仁屋基地跡 位置図

海軍航空隊古仁屋基地跡

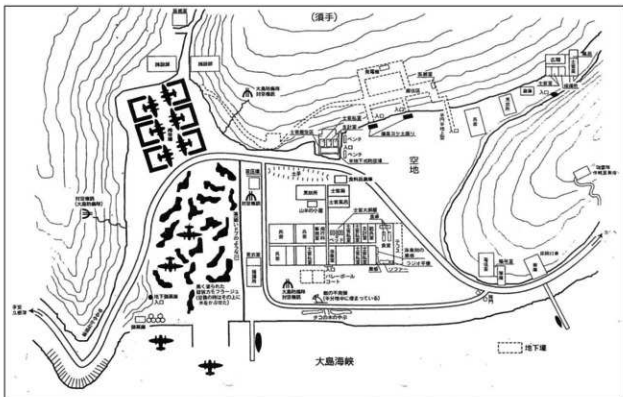
須手地区は古仁屋の西部に位置する小規模な平地である。

昭和16年、須手の住民は軍の立ち退き命令により移住させられ、三浦の海軍施設部が本部や兵舎等を設置した。佐世保鎮守府管轄の水上機が潜水艦等の哨戒の任についていたが、戦況が悪化したため、古仁屋基地は日本最南端の水上飛行機の基地となり、昭和20年3月から終戦まで沖繩特攻出撃が行われるようになった。

現在は住宅などが建設されており、軍施設構造物は一部を除きほとんど残っていない。



第61図 海軍航空隊古仁屋基地跡 遠景



第62図 海軍航空隊古仁屋基地配置図 (荒木一郎氏提供資料)

2-(8) : 手安弾薬本庫跡 (北緯28° 9' 27" : 東経129° 17' 57" 付近)



第63図 手安弾薬本庫跡 位置図

手安弾薬本庫跡

「手安弾薬本庫」は大正10年奄美大島要塞の弾薬本庫として建設が始められ、昭和7年に完成した。工事が中断している時期がある為、本格的な工事は昭和6年頃に行われたと考えられる。約6万トンの弾薬が保管されていたが、米軍の武装解除により全ての弾薬が大島海峡へ投棄された。その後、海中投棄された弾薬は、民間業者が引き揚げ工事を行い回収している。

現在は自動車学校の敷地及び民家として利用されている。



第64図 手安弾薬本庫跡 遠景



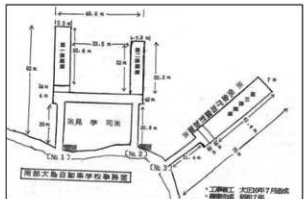
第65図 手安弾薬本庫跡 入口



第66図 手安弾薬本庫跡 弾薬庫と通路



第67図 手安弾薬本庫 監視舎跡

第68図 手安弾薬本庫跡 見取図
(徳永茂二氏資料)

3. 久慈地区

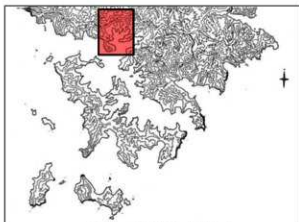
3. 久慈地区

久慈地区

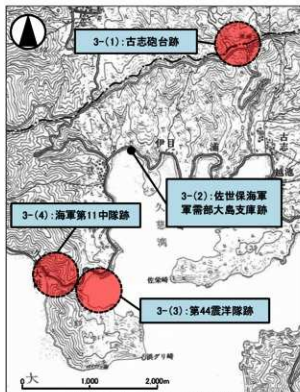
久慈地区は大島海峡のほぼ中央（奄美大島側）に位置している。複雑なリアス海岸を成した久慈湾は、大島海峡の中でも特に良港として知られている。その為、明治24年に海軍の施設が建設され、明治30年には要港に内定するなど、早くから海軍に注目されていた地域である。

● 配備部隊（施設）名

- 3- (1) : 古志砲台跡
- 3- (2) : 佐世保海軍軍需部大島支庫跡
- 3- (3) : 第44震洋隊跡
- 3- (4) : 海軍第11中隊跡



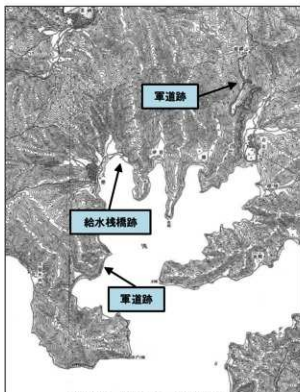
第69図 久慈地区 位置図



第70図 久慈地区 部隊配置図



第71図 久慈地区（大正8、9年）
（国土地理院地図を一部改変）



第72図 久慈地区（昭和31年）
（国土地理院地図を一部改変）

3-(1) : 古志砲台跡 (北緯28° 14' 50" : 東経129° 16' 26" 付近)



第73図 古志砲台跡 位置図

古志砲台跡

「古志砲台」は瀬戸内町古志と宇検村部連の間に位置する、標高313mの南郷山に存在する。既刊文献でその存在が確認できない為、内容の詳細は不明であるが、古志集落民に砲台の存在を知っている人がいることから、構築後すぐに撤去された可能性が高い。今回の調査で砲台跡等を確認できたが、その多くは構築途中の状態であった。

現在は一部の軍道だけが道路として利用されているが、砲台跡は未管理の状態である。



第74図 探照灯跡



第75図 古志砲台砲座跡



第76図 古志砲台弾薬庫跡



第77図 古志砲台砲座弾薬置場跡



第78図 不明コンクリート施設跡

3-(2) : 佐世保海軍軍需部大島支庫跡 (北緯28° 14' 0" : 東経129° 15' 20" 付近)



第79図 佐世保海軍軍需部大島支庫跡 位置図

佐世保海軍軍需部大島支庫跡

当該地点は明治24年に奄美群島初の軍事施設(石炭庫)が置かれた場所である。明治28年には、現存する赤煉瓦構造の水溜が建設された。同年、台湾が日本領となり、明治30年には久慈湾が要港に内定し、電信本局が久慈に設置されている。こうした事から、久慈湾は台湾航路を維持する上で重要な地域であったことがわかる。現在は漁港の一部に水溜跡がほぼ完全な状態で残っている。また、取水口と濾水池でも赤煉瓦構造物を確認する事が出来る。



第80図 佐世保海軍軍需部大島支庫跡 遠景



第81図 赤煉瓦構造物(取水口)跡



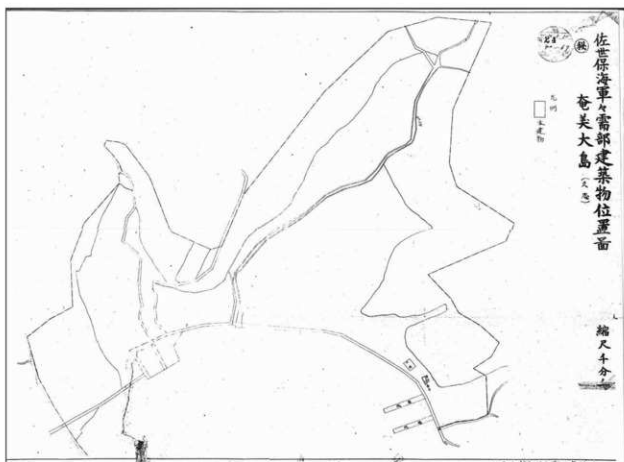
第82図 赤煉瓦構造物(濾水池)跡



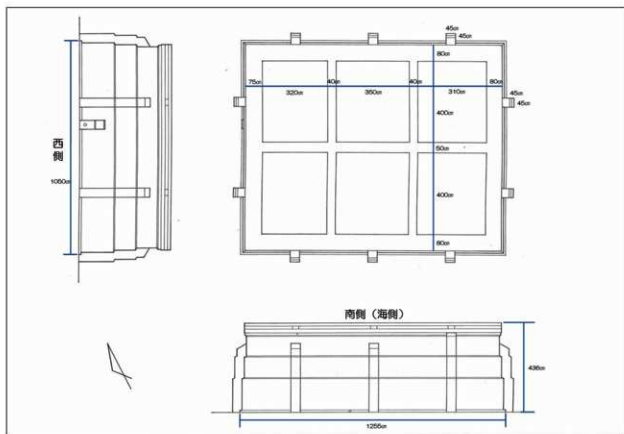
第83図 佐世保海軍軍需部大島支庫跡(水溜)近景



第84図 佐世保海軍軍需部大島支庫跡 復元図

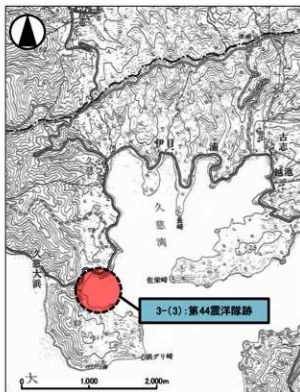


第85圖 佐世保海軍軍需部建築物位置圖 (JACAR: C08010933000)



第86圖 佐世保海軍軍需部大島支庫 (水溜) 跡 簡易測量図

3-(3) : 第44震洋隊跡跡 (北緯28° 12' 59" : 東経129° 14' 56" 付近)



第87図 第44震洋隊跡 位置図

第44震洋隊跡

「第44震洋隊」は大島海峡に配備された震洋隊の一つである。昭和20年1月に部隊が編制され、総員は178名であった。震洋艇は1型55隻が配備され、艇隊ごとに山嶺の防空壕に格納していた。昭和20年6月、震洋艇の点検中に爆発があり、駆け付けた隊長以下13名が戦死する事故が起こっている。

当該地点は久慈湾の入口に位置する為、大島海峡の西口から侵入した敵艦に対する配備であると考えられる。



第88図 第44震洋隊跡 遠景



第89図 第44震洋隊の配置図 (徳永茂二氏資料を基に作成)



北緯28° 12' 57" : 東経129° 14' 56"
第90図 第44震洋隊跡(久慈プラタ) 遠景



北緯28° 12' 54" : 東経129° 14' 54"
第91図 第44震洋艇塚跡①



北緯28° 12' 53" : 東経129° 14' 53"
第92図 第44震洋艇塚跡②



北緯28° 12' 49" : 東経129° 14' 54"
第93図 第44震洋艇塚跡③



北緯28° 12' 47" : 東経129° 14' 56"
第94図 第44震洋艇塚跡④



北緯28° 12' 43" : 東経129° 15' 2"
第95図 第44震洋艇塚跡⑤



第96図 震洋艇搬出用のコンクリート基礎跡



北緯28° 12' 43" : 東経129° 14' 59"
第97図 震洋隊遭難者の碑

3-(4) : 海軍第11中隊跡 (北緯28° 12' 58" : 東経129° 14' 42" 付近)



第98図 海軍第11中隊跡 位置図

海軍第11中隊跡

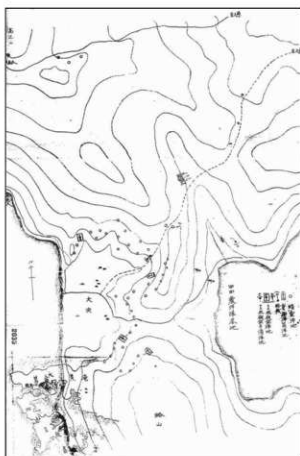
当該地点は久慈湾の西側に位置し、大島海峡の西口から直進すると突き当たる地点である。

配備要図を確認すると、重擲弾筒陣地や13耗機銃陣地等が構築されていることから、大島海峡西口から直進してくる敵に対する備えであったと考えられる。

軍事施設の一部は道路建設等で破壊を受けていると考えられるが、詳細は不明である。



第99図 海軍第11中隊跡 遠景



第101図 十一中隊陣地要図 (JACAR: C08030736200)



第100図 海軍第11中隊跡 遠景



第102図 大島海峡西口

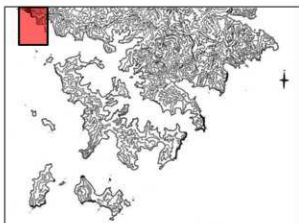
4. 西古見地区

西古見地区

西古見地区は大島海峡西口（奄美大島側）という立地から軍に重要視されており、明治期より軍事関連施設が設置されている。

● 配備部隊（施設）名

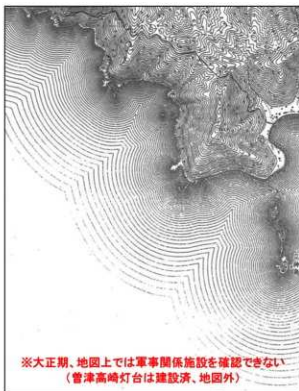
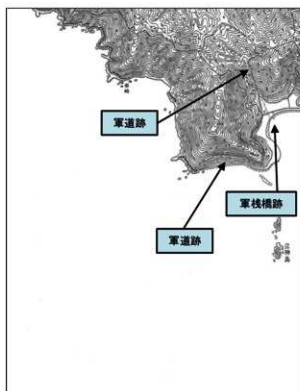
- 4- (1) : 兵舎・軍棧橋跡
- 4- (2) : 西古見砲台跡
- 4- (3) : 掩蓋式観測所跡
- 4- (4) : 曾津高崎望楼跡



第103図 西古見地区 位置図



第104図 西古見地区 部隊配置図

第105図 西古見地区（大正8年）
（国土地理院地図を一部改変）第106図 西古見地区（昭和31年）
（国土地理院地図を一部改変）

4-(1) : 兵舎・軍棧橋跡 (北緯28° 14' 35" : 東経129° 9' 40" 付近)



第107図 兵舎・軍棧橋跡 位置図

兵舎・軍棧橋跡

西古見・池堂に構築された「兵舎」及び「軍棧橋」は、西古見砲台に附属する施設である。大正10年に工事が開始されるが、ワシントン海軍軍縮会議により工事が中断。本格的に軍が駐留したのは、太平洋戦争前の昭和16年9月頃と考えられる。

現在、一部を集落民が利用しているが、大半が未管理の状態である。奄美大島要塞の中核を成す地点であるため、今後も追加調査が必要である。



第108図 軍棧橋跡 遠景



第109図 軍棧橋跡



第110図 軍棧橋跡 近景(海側)

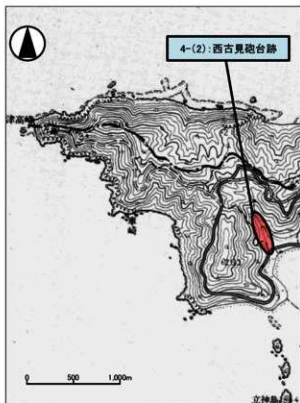


第111図 兵舎跡① 近景



第112図 兵舎跡② 近景

4-(2) : 西古見砲台跡 (北緯28° 14' 43" : 東経129° 9' 36" 付近)



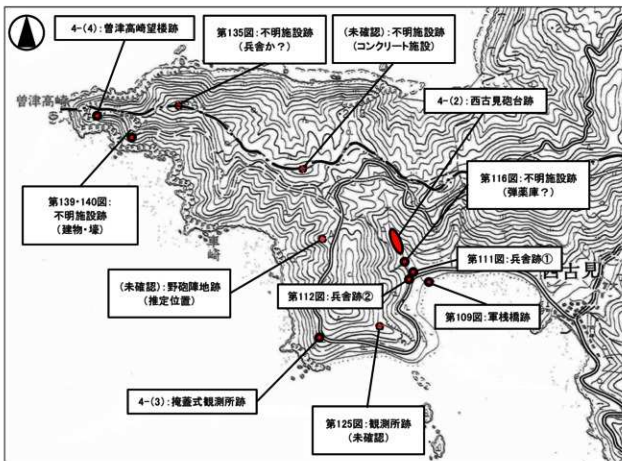
第113図 西古見砲台跡 位置図

西古見砲台跡

「西古見砲台」は大島海峡西口（奄美大島側）に位置し、奄美大島要塞の砲台の一つで28種榴弾砲が設置されていた。榴弾砲の性質を活かして谷合の地に砲座が構築されている。艦砲射撃を防ぐことが出来るが、目視による敵艦の確認が出来ない為、高台に観測所を設けて距離と方向を確認する方法をとっていた。現在、砲台は未管理の状態である。奄美大島要塞の中核を成す地点であるため、今後も追加調査が必要である。



第114図 西古見砲台跡 遠景



第115図 西古見地区 配備図 (調査資料より作成)



第116図 不明施設跡 (弾薬庫の可能性有)



第117図 不明施設跡 内部



第118図 弾薬庫跡①



第119図 弾薬庫跡① (入口)



第120図 弾薬庫跡① (内部)



第121図 弾薬庫跡②

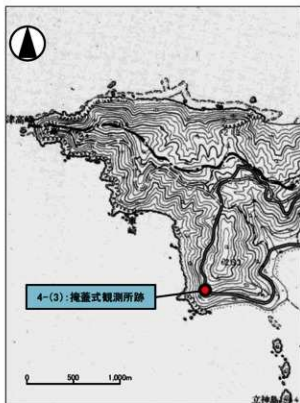


第122図 榴弾砲台 (砲座) 跡



第123図 沈殿池跡

4-(3) : 掩蓋式観測所跡 (北緯28° 14' 21" : 東経129° 9' 13")



第124図 掩蓋式観測所跡 位置図

掩蓋式観測所跡

「掩蓋式観測所」は西古見砲台の付帯施設である。円形の鉄筋コンクリート造りで、一部が二階建ての構造になっている。戦時中は大型の望遠鏡が中央の台に設置されていた。観測用スリットより加計呂麻島や徳之島、東シナ海が一望出来る。西古見砲台は当該施設で敵艦の位置を確認し、電話で谷合の砲台に連絡をして攻撃を行う仕組みになっていた。

現在は公園となっているが、詳細な調査は行われておらず、追加調査が必要な地点である。



第125図 掩蓋式観測所跡 遠景



第126図 掩蓋式観測所跡 近景



第127図 掩蓋式観測所跡 (入口)



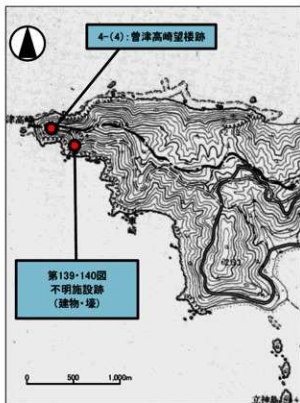
第128図 掩蓋式観測所跡 (内部)



※窓枠に鳥影・方位が描かれている

第129図 掩蓋式観測所からの眺望

4-(4) : 曾津高崎望楼跡 (北緯28° 15' 17" : 東経129° 8' 13")



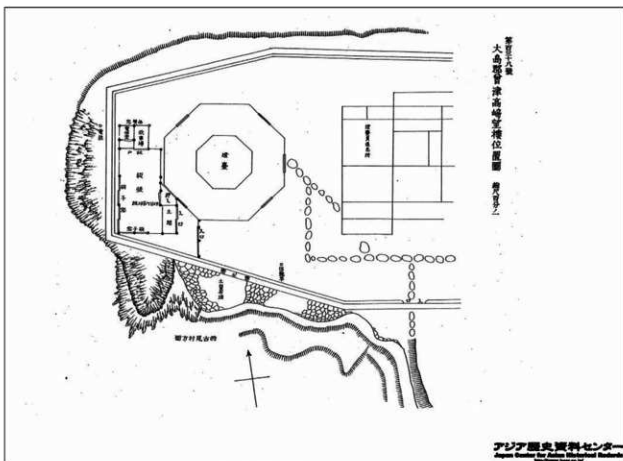
第130回 曾津高崎望楼跡 位置図

曾津高崎望楼跡

明治36年の文献資料によると、皆通崎望楼が建設費であり、「曾津高崎望楼」が“仮設望楼”として記載されている。その後、明治37年の資料では曾津高崎望楼のみが記載されている事から、防衛の意識が東から西へと移った可能性が窺える。また、同地点にある曾津高崎灯標（灯台）は、明治29年に建設されている。当該地点は現在も灯台として使用されている。明治期の遺構も残存している為、追加調査が必要な地点である。



第131回 曾津高崎望楼跡 遠景



第132回 大島郡曾津高崎望楼位置図 (JACAR: C05110180100)



第133図 曾津高崎望楼跡 近景



第134図 曾津高崎望楼跡(弾痕)



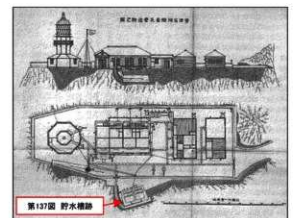
第135図 曾津高崎灯台及び不明施設跡(推定位置)



第136図 兵舎跡(昭和50年代写真)



第137図 貯水槽跡(明治29年灯台施設)



第138図 曾津高崎灯台『燈光』第59巻第10号より



第139図 不明施設跡(鉄筋コンクリート建造物)



第140図 不明施設跡(素掘りの塚)

5. 実久地区

5. 実久地区

実久地区

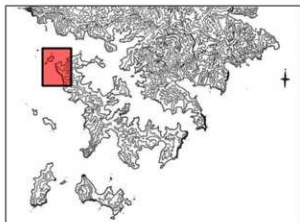
実久地区は大島海峡西口（加計呂麻島側）という立地から、旧日本陸・海軍共に重要視していた地区であり、大正期から様々な軍事関連施設が設置されている。

軍事施設跡は、武装解除後からほとんど手が加えられていない。その為、非常に良い状態で保存されている。

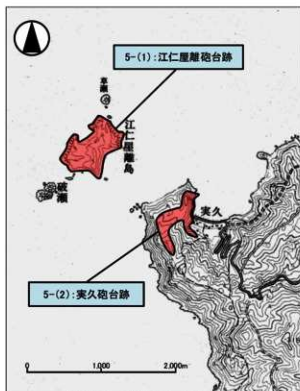
●配備部隊（施設）名

5-（1）：江仁屋離砲台跡

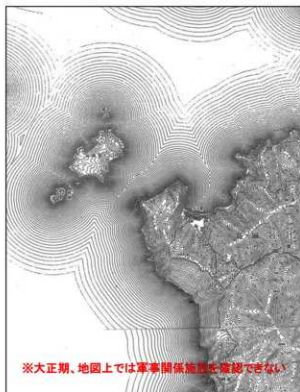
5-（2）：実久砲台跡



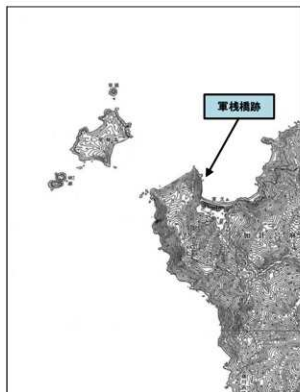
第141図 実久地区 位置図



第142図 実久地区 部隊配置図

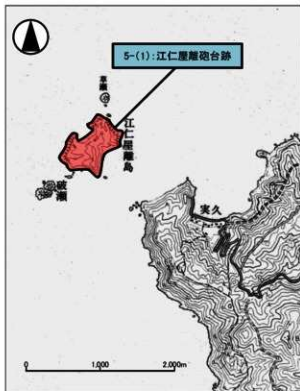


第143図 実久地区（大正8年）
（国土地理院地図を一部改変）



第144図 実久地区（昭和31年）
（国土地理院地図を一部改変）

5-(1) : 江仁屋離砲台跡 (北緯28° 11' 41" : 東経129° 10' 8" 付近)



第145図 江仁屋離砲台跡 位置図

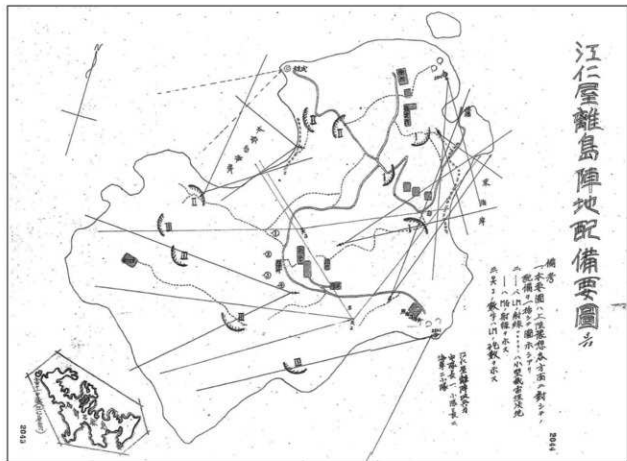
江仁屋離砲台跡

「江仁屋離砲台」は大島海峡西口(加計呂麻島側)に存在する。奄美大島要塞の砲台の一つで、陸軍の7種加農砲が設置されていた。昭和16年頃に海軍が防備衛所等を建設し、防衛を強化する一方、陸軍(重砲兵連隊)は規模を縮小している。

現在、砲台は未管理の状態である。陸・海軍の様々な施設が残存する為、今後も追加調査が必要な地点である。



第146図 江仁屋離砲台跡 遠景



第147図 江仁屋離島陸地配備要図 (JACAR:C08030736300)



第148圖 軍棧橋跡



第149圖 兵舎跡 (海岸付近)



第150圖 防備衛所跡



第151圖 防備衛所跡 (内部)



第152圖 円形施設 (砲台) 跡



第153圖 馬蹄形施設 (砲台) 跡



第154圖 兵舎跡 (江仁屋離島中央部)



第155圖 不明施設跡 (コンクリート製)

5- (2) : 実久砲台跡 (北緯28° 11' 9" : 東経129° 10' 42" 付近)



第156図 実久砲台跡 位置図

実久砲台跡

「実久砲台」は大島海峡西口(加計呂麻島側)に位置する。奄美大島要塞の砲台の一つであり、陸軍の15種加農砲等が設置されていた。海軍も陣地を構築しており、砲台の他に、弾薬庫、兵舎、警戒陣地、タコツボ等、様々な軍事施設が構築されていた。

軍事施設は武装解除後からほとんど手を加えられていない為、良好な状態で保存されている。陣地構築の全容を窺える地点であり、今後とも追加調査が必要である。



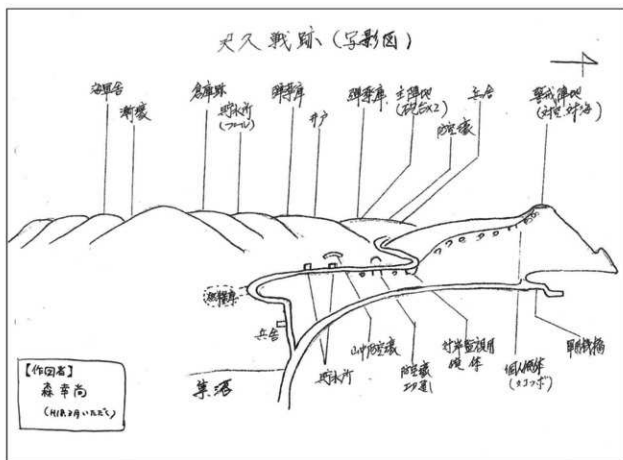
第157図 実久砲台跡・江仁離砲台跡 遠景

第159図 西地区陣地配備要図
(JACAR:C08030736300)

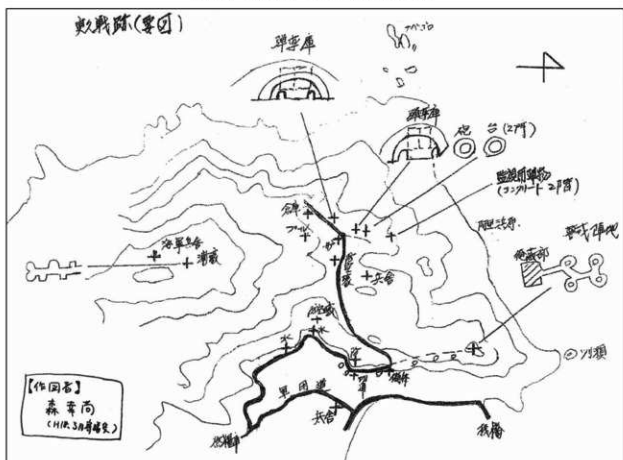
第158図 監守衛舎跡 近景



第160図 昭和37年の実久集落『加計呂麻島』より



第161図 実久戦跡 写影図 (森幸尚氏資料)



第162図 実久戦跡 要図 (森幸尚氏資料)



北緯28° 11' 6" : 東経129° 10' 55"
第163図 貯水槽跡



北緯28° 11' 7" : 東経129° 10' 54"
第164図 散兵壕跡 (入口二箇所所有)



北緯28° 11' 8" : 東経129° 10' 54"
第165図 車道・トーチカ跡



北緯28° 11' 12" : 東経129° 10' 53"
第166図 迫撃砲陣地跡



北緯28° 11' 14" : 東経129° 10' 50"
第167図 兵舎跡



北緯28° 11' 11" : 東経129° 10' 48"
第168図 防空壕跡



北緯28° 11' 9" : 東経129° 10' 43"
第169図 貯水槽 (沈殿槽)跡



北緯28° 11' 7" : 東経129° 10' 43"
第170図 貯水池跡



第171図 弾薬庫跡①



第172図 砲台跡①



第173図 弾薬庫跡②



第174図 砲台跡②



第175図 砲台跡③



第176図 観測所跡①



第177図 観測所跡② (警戒障地跡)



第178図 警戒障地跡

6. 須子茂地区

須子茂地区

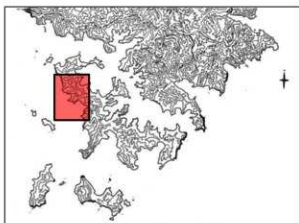
須子茂地区は加計呂麻島の南西部（徳之島側）に位置する。

昭和19年頃、海軍が加計呂麻島の西方から侵入する敵に対し、砲台を構築したと考えられる。

現在、砲台と移動用通路が残存しているが、施設の一部は崩壊している。

●配備部隊（施設）名

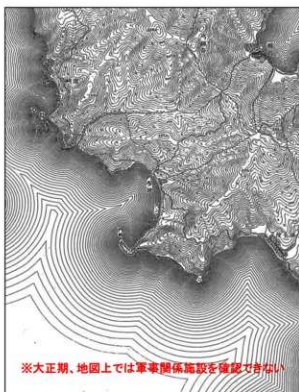
6- (1) : 須子茂砲台跡



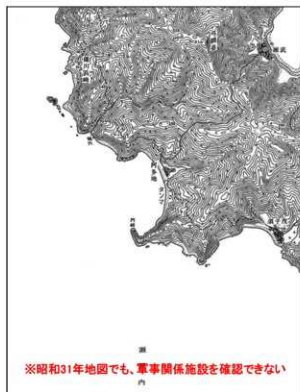
第179図 須子茂地区 位置図



第180図 須子茂地区 部隊配置図



第181図 須子茂地区（大正8年）
（国土地理院地図を一部改変）



第182図 須子茂地区（昭和31年）
（国土地理院地図を一部改変）

6- (1) : 須子茂砲台跡 (北緯28° 8' 49" : 東経129° 11' 54" 付近)



第183図 須子茂砲台跡 位置図

須子茂砲台跡

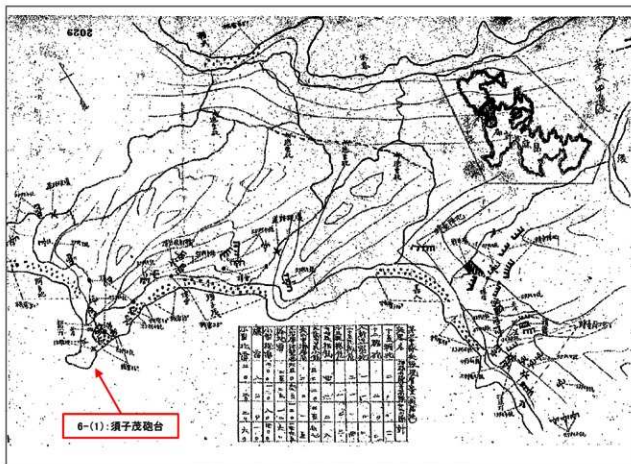
「須子茂砲台」は昭和19年頃、海軍が加計呂麻島西方の備えとして構築した砲台と考えられる。15種砲 (水平砲二門) や機銃が設置され、兵舎や探照灯も構築された。

現在、第二水平砲と砲台への移動用通路が残存しているが、砲台の一部は崩落し、通路にも土砂が堆積しており、崩壊の危険性が高い。

現在は未管理の状態である。



第184図 須子茂砲台跡 遠景



第185図 第三中隊 配備要図 (JACAR: C08030736200)



第186圖 須子茂砲台（第一水平砲入口）跡



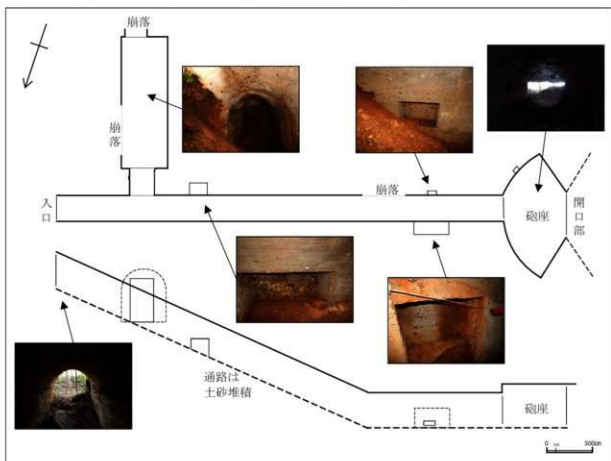
第187圖 須子茂砲台（第一水平砲通路）跡



第188圖 須子茂砲台（第一水平砲開口部）跡



第189圖 須子茂砲台（第二水平砲開口部）跡



7. 瀬相地区

7. 瀬相地区

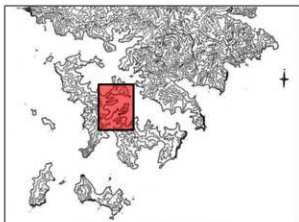
瀬相地区

瀬相地区は大島海峡の中央部（加計呂麻島側）に位置する。

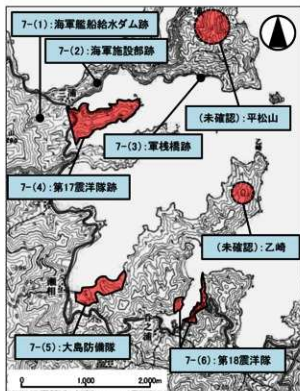
昭和16年、瀬相に海軍が防備隊本部を設置した事から、瀬相地区には海軍の様々な部隊が配備された。

●配備部隊（施設）名

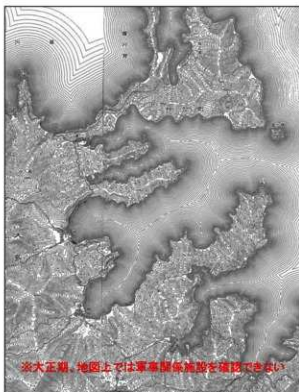
- 7- (1) : 海軍艦船給水ダム跡
- 7- (2) : 海軍施設部跡
- 7- (3) : 軍棧橋跡
- 7- (4) : 第17震洋隊跡
- 7- (5) : 大島防備隊跡
- 7- (6) : 第18震洋隊跡



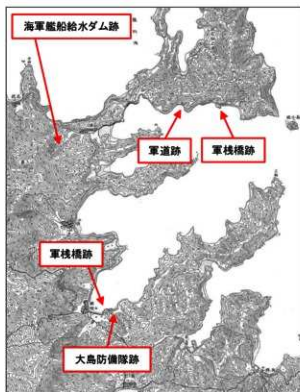
第191図 瀬相地区 位置図



第192図 瀬相地区 部隊配置図



第193図 瀬相地区（大正9年）
（国土地理院地図を一部改変）



第194図 瀬相地区（昭和31年）
（国土地理院地図を一部改変）

7-(1) : 海軍艦船給水ダム跡 (北緯28° 8' 50" : 東経129° 14' 24" 付近)



第195図 海軍艦船給水ダム跡 位置図

海軍艦船給水ダム跡

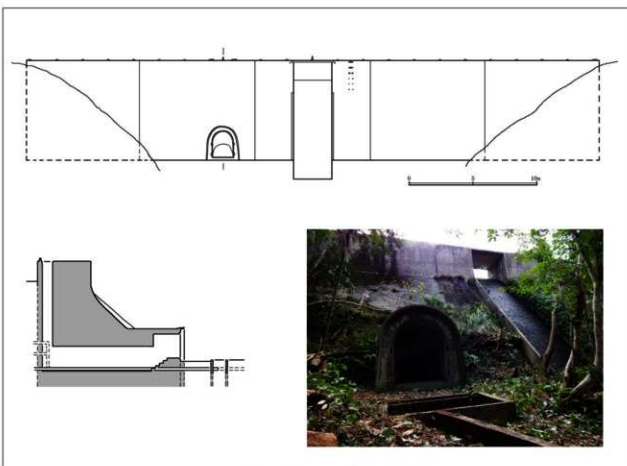
「海軍給水ダム」は昭和13年頃に海軍により建設された。嘉入山から三浦側へ流れる小川をせき止め貯水し、通称サキバルの「軍棧橋」まで送水し、艦船への給水を行った。

戦時中は擬装の為に、止水壁等コンクリート部分に迷彩を施し、水面に木の枝を浮かべ上空から確認出来ない様にしていた。

終戦後は、集落によって管理されていたが、現在は、未管理の状態である。



第196図 海軍艦船給水ダム跡 遠景



第197図 海軍艦船給水ダム跡 略測図



第198図 海軍艦船給水ダム跡 (堤体)



第199図 海軍艦船給水ダム跡 (昇降口)



第200図 海軍艦船給水ダム跡 (排水・取水施設)



第201図 海軍艦船給水ダム跡 (昭和14年製)



第202図 海軍艦船給水ダム跡 (施設内部)



第203図 海軍艦船給水ダム跡 (排水・送水バルブ)

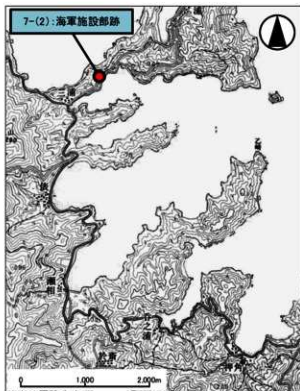


第204図 海軍艦船給水ダム跡 (排水路)



第205図 送水バルブ跡 (消滅) 平成18年撮影

7-(2) : 海軍施設部跡 (北緯28° 9' 10" : 東経129° 14' 59" 付近)



第206図 海軍施設部跡 位置図

海軍施設部跡

「海軍施設部」は昭和16年頃に加計呂麻島の三浦に配備された。

徴用工は全国各地から集められたが、奄美群島では各町村長を通じて役場の兵事係より、集落ごとに人数を割り当てて二ヶ月交代で任務についた。

終戦間際に防空壕前に爆撃を受け、多くの徴用工が犠牲になっている。

現在は未管理の状態である。



第207図 海軍施設部跡 遠景



第208図 海軍施設部跡 位置図



第209図 三浦集落 防空壕跡

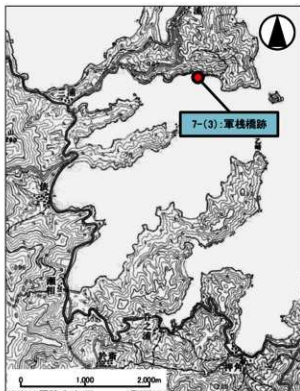


第210図 海軍施設部跡 不明施設



第211図 海軍施設部跡 不明施設 (内部)

7-(2) : 軍棧橋跡 (北緯28° 9' 9" : 東経129° 15' 56" 付近)



第212図 軍棧橋跡 位置図

軍棧橋跡

「軍棧橋」は通称サキバルに位置する。「海軍給水ダム」が建設され始めた昭和13年頃に建設されたと考えられる。

「海軍給水ダム」で貯水された水は約5kmの配管を通り、この「軍棧橋」まで送水され艦船に給水された。「軍棧橋」は、現在でも水深が10m以上ある為、大型船舶への給水が可能であったと推測される。

現在は未管理の状態であり、施設の一部が破損している。



第213図 軍棧橋跡 透景



第214図 軍棧橋跡 近景 (東側)



第215図 軍棧橋跡 近景 (北側)



第216図 軍棧橋跡 (階段)



第217図 軍棧橋跡 (上部)

7-(4) : 第17震洋隊跡 (北緯28° 8' 49" : 東経129° 15' 2" 付近)



第218図 第17震洋隊跡 位置図

第17震洋隊跡

「第17震洋隊」は大島海峡に配備された震洋隊の一つである。昭和19年11月に部隊が編制され総員は185名であった。震洋艇は1型53隻が配備され、艇隊ごとに山裾の防空壕に格納されていた。編成航行、突撃の訓練を夜間に実施したが出撃することはなかった。

当該地点は瀬相港の入口に位置する為、瀬相に侵入を試みる敵艦に対する配備であったと考えられる。



第219図 第17震洋隊跡 遠景



第220図 第17震洋艇壕 三浦①、②



第221図 第17震洋艇壕 三浦②



第222図 第17震洋艇壕 三浦③



第223図 第17震洋艇壕 三浦④



第224図 第17震洋艇壕跡 仲田浦① (平成20年度)



第225図 第17震洋艇壕跡 仲田浦② (平成20年度)



第226図 第17震洋艇壕跡 仲田浦③ (平成20年度)



第227図 第17震洋艇壕跡 仲田浦④ (平成20年度)



第228図 第17震洋艇壕跡 仲田浦⑤ (平成20年度)



第229図 第17震洋艇壕跡 仲田浦⑤入口 (平成20年度)



第230図 第17震洋艇壕跡 仲田浦⑤内部 (平成20年度)



第231図 第17震洋艇壕跡 仲田浦⑥ (平成20年度)

7 - (5) : 大島防備隊跡 (北緯28° 7' 23" : 東経129° 14' 59" 付近)



第232図 大島防備隊跡 位置図

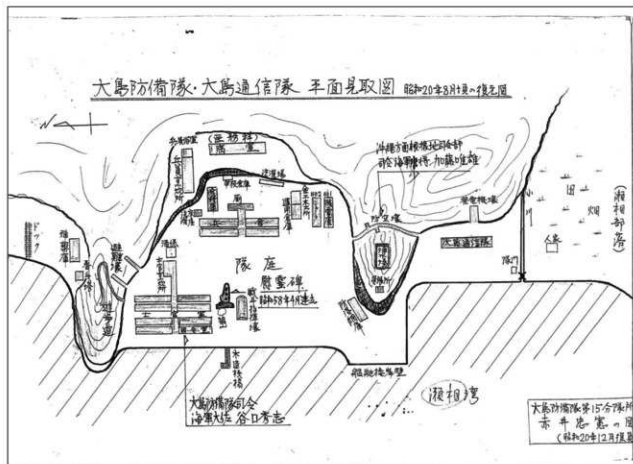
大島防備隊跡

昭和16年9月、瀬相に「大島根拠地隊」が編制され「防備隊」と「通信隊」が設置された。その後、根拠地隊は廃止され、昭和17年1月に「大島防備隊」となる。奄美群島における海軍の中心部隊である。

現在は「戦斗指揮所跡」の近くに慰霊碑が建立され一部公園化されているが、軍事施設跡の多くは未管理の状態である。



第233図 大島防備隊跡 遠景



第234図 大島防備隊・大島通信隊 平面見取図 昭和20年8月頃の復元図 (赤井忠憲氏資料より)



第235図 大島防備隊跡 遠景 『加計呂麻島』より



北緯28° 7' 18"・東経129° 14' 47"
第236図 軍棧橋跡・隊門跡



北緯28° 7' 22"・東経129° 14' 50"
第237図 軍棧橋跡



北緯28° 7' 22"・東経129° 14' 56"
第238図 大島防備隊護岸跡



北緯28° 7' 23"・東経129° 14' 58"
第239図 戦斗指揮所跡 (海側)



第240図 戦斗指揮所跡 (山側入口)

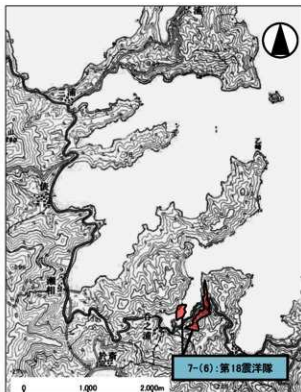


第241図 戦斗指揮所跡 (内部)



北緯28° 7' 23"・東経129° 14' 59"
第242図 大島防備隊跡 (不明施設)

7-(6) : 第18震洋隊跡 (北緯28° 7' 13" : 東経129° 16' 1" 付近)



第243図 第18震洋隊跡 位置図

第18震洋隊跡

「第18震洋隊」は大島海峡に配備された震洋隊の一つである。昭和19年11月に部隊が編制され、総員は186名であった。震洋艇は1型52隻が配備され、艇隊ごとに山裾の防空壕に格納されていた。震洋艇壕は12本掘削された(奥行20～30m)。

当該地点は瀬相港の東側の入り江に位置する為、瀬相に侵入を試みる敵艦に対する配備であったと考えられる。



第244図 第18震洋隊跡 遠景



第245図 第18震洋艇配置図 『まんてい』より



第246圖 第18震洋艇塚①



第247圖 第18震洋艇塚②



第248圖 第18震洋艇塚③



第249圖 第18震洋艇塚④



第250圖 第18震洋艇塚⑤



第251圖 第18震洋艇塚⑥



第252圖 第2艇隊 遠景



第253圖 震洋艇塚② (内部)

8. 秋徳地区

秋徳地区

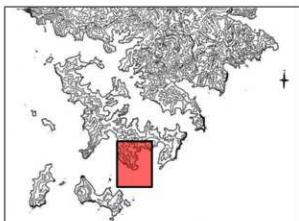
秋徳地区は加計呂麻島の南東部(請島側)に位置する。

昭和19年頃、海軍が加計呂麻島の南東方向から侵入する敵に対し、砲台を構築したと考えられる。

砲台跡は二門残存しており、保存状態は良好である。砲台跡の他に探照灯跡、弾薬庫跡、機銃跡等が残っている。

●配備部隊(施設)名

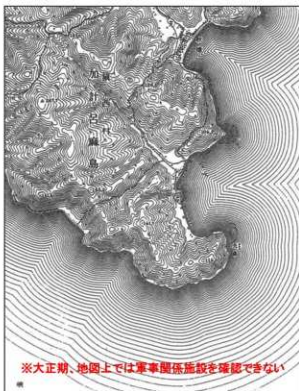
8-(1) : 先鼻砲台跡



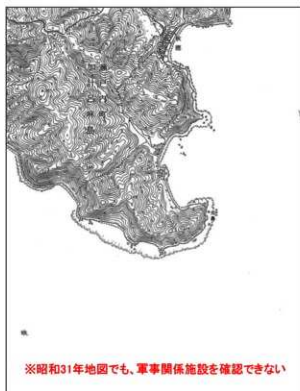
第254図 秋徳地区 位置図



第255図 秋徳地区 部隊配置図



第256図 秋徳地区(大正9年)
(国土地理院地図を一部改変)



第257図 秋徳地区(昭和31年)
(国土地理院地図を一部改変)

8-(1) : 先鼻砲台跡 (北緯28° 3' 54" : 東経129° 17' 11" 付近)



第258図 先鼻砲台跡 位置図

先鼻砲台跡

「先鼻砲台」は昭和19年頃、海軍が加計呂麻島の南西方から侵入する敵に対し、構築した砲台と考えられる。

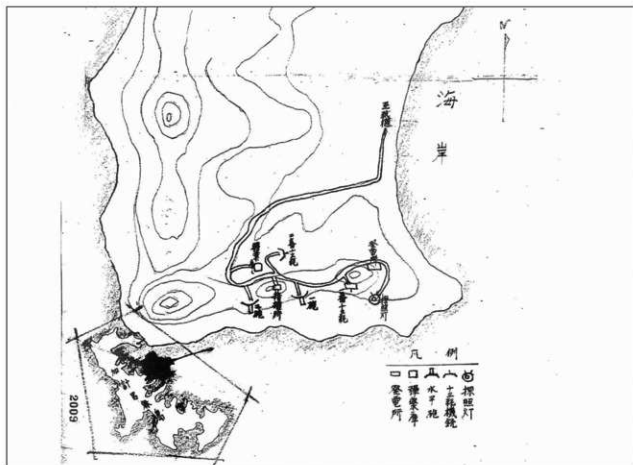
15糎砲（水平砲二門）や機銃が配備され、指揮所や探照灯も構築された。

第一、第二水平砲跡は良好に残存している。機銃跡や探照灯跡等も確認出来、部隊の配備状況を確認出来る。

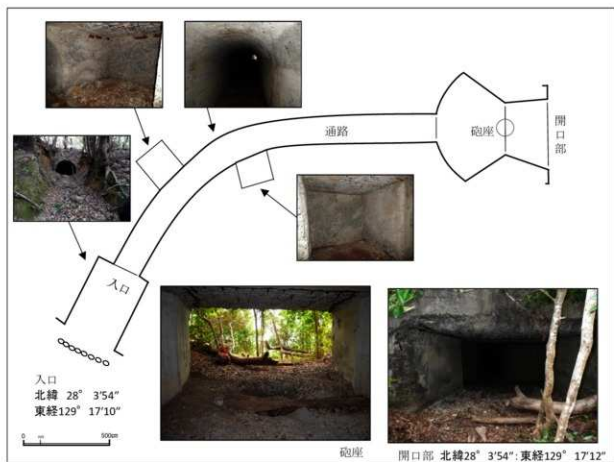
現在は未管理の状態である。



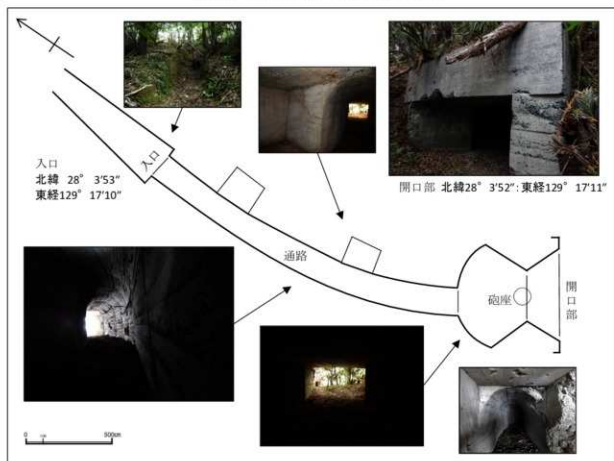
第259図 先鼻砲台跡 遠景



第260図 先鼻独立砲隊配備要図 (JACAR:C08030736200)



第261圖 先鼻砲台 (第一水平砲) 跡 略測圖



第262圖 先鼻砲台 (第二水平砲) 跡 略測圖



第263圖 指揮所跡



第264圖 発電所跡



第265圖 探照灯跡



第266圖 二番13耗機銃陣地跡



第267圖 弾薬庫跡 (入口)



第268圖 弾薬庫跡 (内部)



第269圖 防空壕跡 (入口)



第270圖 防空壕跡 (内部)

9. 安脚場地区

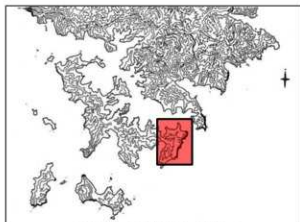
安脚場地区

安脚場地区は大島海峡東口（加計呂麻島側）という立地から、陸・海軍共に重要視していた地区であり、大正期から様々な軍事施設が構築されている。

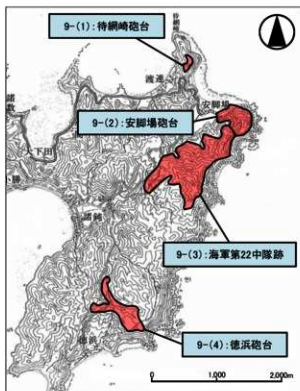
一部の軍事施設跡は良好な状態で現存し公園化されているが、多くの軍事施設跡は未管理状態である。

●配備部隊（施設）名

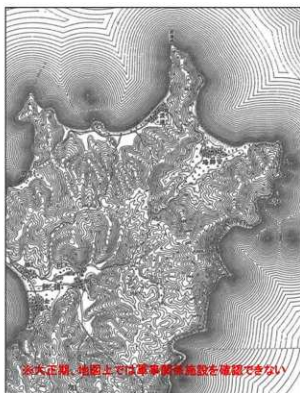
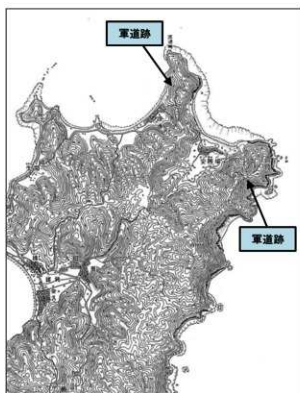
- 9- (1) : 待網崎砲台跡
- 9- (2) : 安脚場砲台跡
- 9- (3) : 海軍第22中隊跡
- 9- (4) : 徳浜砲台跡



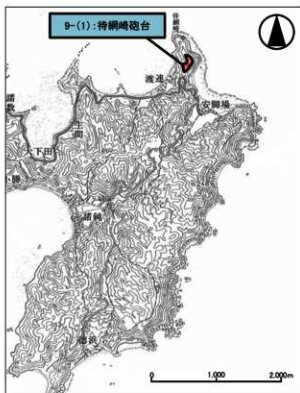
第271図 安脚場地区 位置図



第272図 安脚場地区 部隊配置図

第273図 安脚場地区（大正9年）
（国土地理院地図を一部改変）第274図 安脚場地区（昭和31年）
（国土地理院地図を一部改変）

9-(1) : 待網崎砲台跡 (北緯28° 6′ 53″ : 東経129° 20′ 36″ 付近)



第275図 待網崎砲台跡 位置図

待網崎砲台跡

「待網崎砲台」は大島海峡東口（加計呂麻島側）に存在する。昭和19年に海軍の高角砲台が構築された。大島海峡の軍事施設の中でも一番の激戦地であり、米軍機を18機撃墜したが隊員が5名戦死し18名が負傷している。

砲台の他に、弾薬庫、兵舎、発電所等の軍事施設が構築されていた。

一部の施設は公園化されているが、今後も追加調査を行い全容解明が必要な地点である。



第276図 待網崎砲台跡 遠景



第277図 第21中隊陣地配備要図 (JACAR: C08030736200)



第278図 高角砲台跡 近景 (平成17年度撮影)



第279図 弾薬庫跡 近景 (平成17年度撮影)



第280図 不明施設跡 近景 (平成17年度撮影)

9- (2) : 安脚場砲台跡 (北緯28° 6' 20" : 東経129° 21' 8" 付近)



第281図 安脚場砲台跡 位置図

安脚場砲台跡

「安脚場砲台」は大島海峡東口(加計呂麻島側)に存在する。奄美大島要塞の砲台の一つであり、陸軍の15種加農砲が設置されていた。

昭和16年には海軍も陣地を構築しており、砲台の他に、防備衛所、弾薬庫、兵舎、探照灯等、様々な軍事施設が構築されていた。

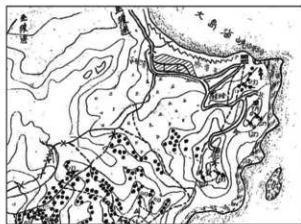
軍事施設は良好な状態で保存されている施設が多く、公園化されている。陸・海軍の陣地構築の全容を窺える地点であり、今後も追加調査が必要である。



第282図 安脚場砲台跡 遠景

第283図
陸軍安脚場砲台
海軍防備衛所見取図
(赤井忠憲氏資料)

第284図 監視衛舎跡 近景



第285図 第22中隊陣地配備図 (JACAR: C08030736300)



第286図 炊炊所跡 近景



第287圖 発電所跡



第288圖 15種加農砲台跡①



第289圖 彈薬庫跡①



第290圖 15種加農砲台跡②



第291圖 15種加農砲台跡2)下退避壕跡 入口



第292圖 15種加農砲台跡2)下退避壕跡 内部



第293圖 貯水池跡



第294圖 貯水槽(沈殿槽)跡



第295図 弾薬庫跡②



第296図 弾薬庫跡② (内部)



第297図 不明施設跡



第298図 弾薬格納庫跡・石積跡



第299図 金子手崎防備所跡



第300図 探照灯跡



第301図 連絡壕跡 (平成18年度)



第302図 貯水槽跡 (軍道途中)

9-(3) : 海軍第22中隊跡 (北緯28° 5' 50" : 東経129° 20' 39" 付近)



第303図 海軍第22中隊跡 位置図

海軍第22中隊跡

「海軍第22中隊」は大島海峡東口(加計呂麻島側)に配備された。当該地域は陸軍の安脚場砲台が撤収された昭和19年頃より、海軍が中心となって防備を担っていた。15種平射砲台の他に、防備衛所、弾薬庫、探照灯等、様々な軍事施設が構築されていた。軍事施設の一部は良好に保存され公園化されているが、大半の施設は未管理の状態である。陸・海軍の陣地構築の全容を窺える地点である事から、今後も追加調査が必要である。



第304図 海軍第22中隊跡 遠景



第305図 第22中隊陣地配備図 (JACAR: C08030736300)



第306図 車道跡・頭壺 (個人掩体) 跡



第307図 退避壕跡



第308図 散兵壕跡



北緯28° 5' 50" : 東經129° 20' 37"

第309圖 防空壕跡 (兵士用)



北緯28° 5' 50" : 東經129° 20' 37"

第310圖 防空壕跡 (住民用)



北緯28° 6' 0" : 東經129° 20' 47"

第311圖 探照灯跡①



北緯28° 6' 0" : 東經129° 20' 46"

第312圖 探照灯跡①付帯施設跡



北緯28° 6' 7" : 東經129° 20' 56"

第313圖 探照灯跡②



北緯28° 6' 6" : 東經129° 20' 56"

第314圖 探照灯跡②付帯施設跡



北緯28° 6' 15" : 東經129° 20' 58"

第315圖 軍道跡・石積跡



北緯28° 6' 14" : 東經129° 20' 58" 付近

第316圖 砲台跡

9-(4) : 徳浜砲台跡 (北緯28° 4' 37" : 東経129° 20' 7" 付近)



第317図 徳浜砲台跡 位置図

徳浜砲台跡

「徳浜砲台跡」は、加計呂麻島の南東側に陸軍の部隊が配備された。
昭和19年、陸軍の軍備移転に伴い部隊は撤収した。その後、一部地域を海軍が利用し、砲台を構築していると考えられる。
砲台の他に、兵舎、防空壕、沈殿池等が構築されていた。

軍事施設は、未管理の状態である。



第318図 徳浜砲台跡 遠景



第319図 沈殿池跡



第320図 砲台跡 (素掘り)



第321図 砲台跡 (コンクリート製)



第322図 防空壕跡 (入口二箇所有)

10. 与路地区

与路地区

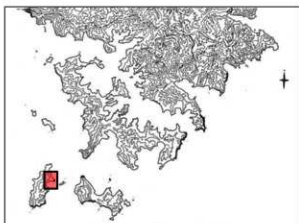
与路地区は加計呂麻島と徳之島の間位置する島である。

昭和19年頃、海軍が与路島の南及び請島水道に侵入する敵を想定し、砲台を構築したと考えられる。

砲台跡は二門残存しており、保存状態は良好である。砲台跡の他に探照灯跡、弾薬庫跡等が残っている。

●配備部隊（施設）名

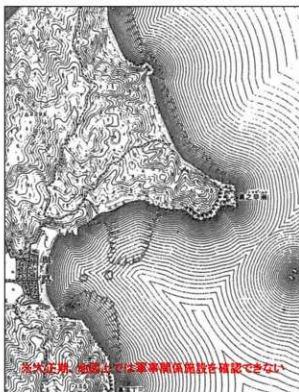
10- (1) : 与路砲台跡



第323図 与路地区 位置図



第324図 与路地区 部隊配置図



第325図 秋徳地区（大正8年）
（国土地理院地図を一部改変）



第326図 秋徳地区（昭和31年）
（国土地理院地図を一部改変）

10- (1) : 与路砲台跡 (北緯28° 3' 1" : 東経129° 10' 25" 付近)



第327図 与路砲台跡 位置図

与路砲台跡

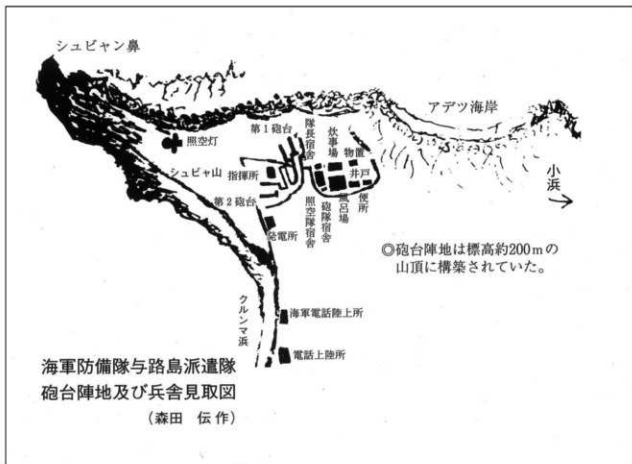
「与路砲台」は昭和19年頃、海軍が与路島の南及び請島水道に侵入する敵を想定し、砲台を構築したと考えられる。

15糎砲（水平砲二門）や機銃が配備され、指揮所や探照灯も構築された。

第一、第二水平砲跡及び弾薬庫、散兵壕等は良好に残存し、部隊の配備状況を確認出来る。現在は未管理の状態である。



第328図 与路砲台跡 遠景



第329図 海軍防備隊与路島派遣隊砲台及び兵舎見取図 『与路島誌』より



第330図 探照灯跡 (平成22年度撮影)



第331図 第一砲台跡 (平成22年度撮影)



第332図 第一砲台跡 内部 (平成22年度撮影)



第333図 第二砲台跡 (平成22年度撮影)



第334図 第二砲台跡 内部 (平成22年度撮影)



第335図 散兵壕跡 (平成22年度撮影)



第336図 弾薬庫跡 (平成22年度撮影)



第337図 弾薬庫跡 内部 (平成22年度撮影)



第338図 海軍航空隊駐機箇所跡（久根津）遠景



第339図 陸軍海上挺身第29戦隊跡（阿岐）遠景



第340図 アダング崎見張所 遠景



第341図 西古見橋



第342図 深浦砲台跡 遠景



第343図 喜入砲台跡 遠景



第344図 海軍第4中隊跡 遠景



第345図 鎮西送信所跡（スリ浜）遠景



第346図 不明施設 (曾津高崎：車崎)



第347図 地帯標① (江仁屋離島)



第348図 地帯標② (江仁屋離島)



第349図 地帯標③ (江仁屋離島)



第350図 不明施設跡 (江仁屋離島)



第351図 不明施設跡 (夕離島)



第352図 不明施設跡 (安脚場～徳浜間：ヒヨコ瀬)



第353図 標的跡 (奄美市住用町：市崎)



第354図 節子小学校旧奉安殿



第355図 古仁屋小学校旧奉安殿



第356図 蘆川小学校旧奉安殿



第357図 木慈小学校旧奉安殿



第358図 須子茂小学校旧奉安殿



第359図 池地小学校旧奉安殿



第360図 記念碑（聖上陛下臨御之地）



第361図 記念碑（東郷元帥御上陸の跡）



第362図 統制陶器 陸軍用 (徳浜砲台跡)



第363図 統制陶器 岐671 (呑之浦集落山中)



第364図 防衛食容器 (清水集落)



第365図 杯 (左：勢里集落、中央・右：芝集落)



第366図 ガラス瓶 (徳浜砲台跡、右端のみ先鼻砲台跡)



第367図 陶製土管 (安部塚砲台跡)



第368図 コンクリート製土管 (三浦サキバル)



第369図 煉瓦

(左：佐世保海軍大島司庫跡、中央：曾津高崎灯台、右：江仁屋離島)



第370図 双眼鏡 (与路小学校保管資料)



第371図 陶製手福弾(左:瀬相集落、右:呑之浦チタン)



第372図 藁莢 (西古見集落)



第373図 不明鉄製品① (三浦サキバル)



第374図 不明鉄製品②外側 (三浦サキバル)



第375図 不明鉄製品②内側 (三浦サキバル)



第376図 不明鉄製品③外側 (三浦サキバル)



第377図 不明鉄製品③内側 (三浦サキバル)

表9 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(1)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
1	A07062099700	第一編 総叙 測量	記録材料・海軍省明治二十一年年報
2	A07062273300	第三編 灯台事務 視察船	記録材料・逓信省第一年報
3	A07062273500	第三編 灯台事務 雑件	記録材料・逓信省第一年報
4	A10112946900	陸軍中将松井庫之助勲章加授ノ件	叙勲戒可書・大正十一年・叙勲巻二・内国人二
5	A06031093800	写真週報 344号	写真週報
6	B13080555900	5. 第五号 (1)	本省謄写物関係雑件/日露事件要報 第二巻
7	B13080556100	6. 第六号 (1)	本省謄写物関係雑件/日露事件要報 第二巻
8	B13080808000	5. 外交志略 四 戦争篇第四 南海諸国	外交誌稿編纂一件/外交誌略 第一巻
9	B13080808500	10. 外交志略 九 戦争篇第四 南海諸国	外交誌稿編纂一件/外交誌略 第一巻
10	B13080809200	4. 外交志略 拾四 版図沿革篇第四 南島	外交誌稿編纂一件/外交誌略 第二巻
11	B13080810600	7. 外交志略 貳拾六 贈酬篇第四 西南海諸国	外交誌稿編纂一件/外交誌略 第三巻
12	B02031413100	8. 第六十六議会用答弁資料 (陸軍省)	帝国議会関係雑件/質問答弁関係 第二巻
13	B04122567400	分割3	華盛頓会議関係一件/太平洋四国条約関係 第一巻
14	B04012532600	本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件/奄美大島ニ於ケル加特利教匠泊問題	0目
15	B04012532700	本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件/奄美大島ニ於ケル加特利教匠泊問題 分割1	本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件/奄美大島ニ於ケル加特利教匠泊問題
16	B04012532800	本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件/奄美大島ニ於ケル加特利教匠泊問題 分割2	本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件/奄美大島ニ於ケル加特利教匠泊問題
17	B10070161200	日露事件要報 五/1905年	日露事件要報 五/1905年
18	B10070161400	日露事件要報 六/1905年	日露事件要報 六/1905年
19	B02130516600	第四十報/二、大東亜各地	世界情勢ノ動向/第2巻第18報～第51報
20	C0203007500	目次	大正09年 「軍事機密大日記 4/5」
21	C02030075600	奄美大島防備隊設備に関する件	大正09年 「軍事機密大日記 4/5」
22	C02030092300	陸軍軍需工業動員に関する件	大正10年 「軍事機密大日記 2/5」
23	C02030096500	大正9年度作戦準備材料調査の件	大正10年 「軍事機密大日記 3/5」
24	C02030097100	目次	大正10年 「軍事機密大日記 3/5」
25	C02030097600	奄美大島要塞西古見第1砲台及実久砲台建築実施の件	大正10年 「軍事機密大日記 3/5」
26	C02030097800	奄美大島要塞江仁屋離砲台建築実施の件	大正10年 「軍事機密大日記 3/5」
27	C02030151200	大正9年度日本帝国陸軍作戦要領其他に関する件	大正12年 「軍事機密大日記 3/6」
28	C02030152400	目次	大正12年 「軍事機密大日記 3/6」
29	C02030152700	大正12年度要塞防禦計画臨時訓令の伝宣並同年奄美大島父島要塞防禦計画に関する指示の件	大正12年 「軍事機密大日記 3/6」
30	C02030182600	父島要塞外3要塞備砲工事実施の件	大正13年 「軍事機密大日記 6/7」
31	C02030183500	大正10年度日本帝国要塞防禦計画其他の件	大正13年 「軍事機密大日記 6/7」
32	C02030184300	大正13年度国有財産増減の件	大正13年 「軍事機密大日記 6/7」
33	C02030193200	船舶輸送計画の件	大正13年 「軍事機密大日記 7/7」
34	C02030193800	動員計画に関する諸表の件	大正14年 「軍事機密大日記 1/5」
35	C02030211200	目次	大正14年 「軍事機密大日記 4/5」
36	C02030211300	防備官造物配置園其他調製に関する件	大正14年 「軍事機密大日記 4/5」
37	C02030212000	奄美大島要塞備砲諸費予算の件	大正14年 「軍事機密大日記 4/5」
38	C02030212100	大正14年度奄美大島要塞備砲計画等策定上採りたる訂正増補事項の件	大正14年 「軍事機密大日記 4/5」
39	C02030212200	奄美大島要塞現況の件	大正14年 「軍事機密大日記 4/5」
40	C02030212300	戒厳施行手続進捗の件	大正14年 「軍事機密大日記 4/5」
41	C01002552800	奄美大島要塞通信網派連三浦間新設工事実施の件	昭和3年 「軍事機密大日記 4/7」
42	C01002553300	昭和4年度国防用防禦官造物及要塞兵備等に関する件	昭和3年 「軍事機密大日記 4/7」
43	C01002579000	動員並要塞防禦計画船舶輸送準備に関する件	昭和4年 「軍事機密大日記 第2冊 4/4」
44	C01005335300	基隆、澎湖島、奄美大島要塞動員用兵器に関する件	昭和8年 「陸機密大日記 3/4」
45	C01005343000	兵器保管に関する件	昭和8年 「陸機密大日記 3/4」
46	C01005378700	戦時既設要塞配当電燈輸送所要経費の件	昭和9年 「陸機密大日記 第2冊 1/2」

表10 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(2)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
47	C01005379800	実久砲台火薬支庫改築工事実施の件	昭和9年「陸機密大日記 第2冊 1/2」
48	C01005380100	要塞備付兵器過不足表の件	昭和9年「陸機密大日記 第2冊 1/2」
49	C01005433700	手安砲臺本庫軍道新設工事実施の件	昭和10年「陸機密大日記 2/2」
50	C01005449600	昭和11年度要塞所要(増加配属)兵器整備計画に関する件	昭和11年「陸機密大日記 第1冊 2/2」
51	C01005452100	手安砲臺本庫浴場所新営工事実施の件	昭和11年「陸機密大日記 第3冊 2/2」
52	C01005484400	昭和13年度国防用防禦營造物及要塞戦備等に関する件	昭和12年「陸機密大日記 第4冊 2/2」
53	C01005484800	昭和12年度要塞所要(増加配属)兵器整備計画に関する件	昭和12年「陸機密大日記 第4冊 2/2」
54	C01005496000	軍事機密書類調整並進達に関する件	昭和15年「陸機密大日記 第1冊 1/2」
55	C01005503600	戦用諸品過不足表の件	昭和15年「陸機密大日記 第1冊 2/2」
56	C03023084200	海軍省より軍港設置に係る予算の件	密大日記 明治30年
57	C03022544600	補助建設物解除の件	密大日記 大正10年 6冊ノ内第3冊
58	C03022545200	要塞地帯法実施の件	密大日記 大正10年 6冊ノ内第3冊
59	C03022604700	要塞参謀召集の件	密大日記 大正12年 6冊ノ内第3冊
60	C03022657300	奄美大島要塞防禦營造物検査状況報告の件	密大日記 大正13年 5冊ノ内第2冊
61	C03022657400	表紙	密大日記 大正13年 5冊ノ内第2冊
62	C03022657500	奄美大島海峡附近気象観測に関する件	密大日記 大正13年 5冊ノ内第2冊
63	C03022661100	奄美大島陸軍用地營造物借用に関する件	密大日記 大正13年 5冊ノ内第3冊
64	C03022700400	表紙	密大日記 大正14年 6冊ノ内第3冊
65	C03022701200	奄美大島要塞防禦營造物検査報告提出の件	密大日記 大正14年 6冊ノ内第3冊
66	C03022705300	制式改正に伴ひ兵器調弁並整備の件	密大日記 大正14年 6冊ノ内第3冊
67	C03022713400	固有財産増減の件	密大日記 大正14年 6冊ノ内第4冊
68	C03022749900	防禦營造物検査に関する件	密大日記 大正15年 6冊ノ内第2冊
69	C03022751500	奄美大島要塞防禦營造物検査報告提出の件	密大日記 大正15年 6冊ノ内第2冊
70	C03022756100	動員所要器整備に関する件	密大日記 大正15年 6冊ノ内第3冊
71	C03022768800	台湾、九州間連絡飛行に関する着場視察報告提出の件	密大日記 大正15年 6冊ノ内第4冊
72	C03022774400	軍の秘密図を複写他人に譲渡せしめの風評に関する件	密大日記 大正15年 6冊ノ内第4冊
73	C01003726200	天皇陛下下海軍演習御覧の節小笠原及奄美大島へ行幸の件	昭和02年「密大日記」6冊ノ内第2冊
74	C01003733100	防禦營造物検査の件	昭和02年「密大日記」6冊ノ内第3冊
75	C01003743500	災害復旧工事援助の件	昭和02年「密大日記」6冊ノ内第3冊
76	C01003747000	大正15年度・昭和元年度奄美大島要塞修繕費支出の件	昭和02年「密大日記」6冊ノ内第4冊
77	C01003747900	固有財産増減の件	昭和02年「密大日記」6冊ノ内第4冊
78	C01003749600	昭和元年度奄美大島要塞災害復旧費支出実施の件	昭和02年「密大日記」6冊ノ内第4冊
79	C01003806700	昭和2年度奄美大島要塞災害復旧費支出実施の件	昭和03年「密大日記」第3冊
80	C01003806800	昭和2年度奄美大島要塞修繕費支出実施の件	昭和03年「密大日記」第3冊
81	C01003868600	防禦營造物新営工事の件	昭和04年「密大日記」第3冊
82	C01003871800	奄美大島要塞新営及修繕費支出実施の件	昭和04年「密大日記」第3冊
83	C01003901900	軍風思想研究に関する秘密會合	昭和05年「密大日記」第2冊・続
84	C01003910400	実久砲台監守衛舎改築工事実施の件	昭和05年「密大日記」第3冊・続
85	C01003910800	昭和6年度国防用防禦營造物及要塞兵備等に関する件	昭和05年「密大日記」第3冊・続
86	C01003911300	防禦營造物新営工事の件	昭和05年「密大日記」第3冊・続
87	C01003925700	奄美大島要塞新営及修繕費支出実施の件	昭和05年「密大日記」第3冊・続
88	C01003947800	奄美大島要塞新営後旧修繕費支出実施の件	昭和06年「密大日記」第1冊
89	C01003975200	防禦營造物新営工事に関する件	昭和08年「密大日記」第4冊
90	C01003975700	要塞地帯内禁止制限解除区域改正に関する件	昭和08年「密大日記」第4冊
91	C01003975800	皆津崎第1砲台観測所改築工事実施の件	昭和08年「密大日記」第4冊
92	C01003988400	奄美大島要塞新営及修繕費支出実施の件	昭和08年「密大日記」第4冊
93	C01004014000	奄美要塞に判任官増員の方件	昭和09年「密大日記」第1冊
94	C01004022100	新聞記事に關し大島の状況調査事項提出の件	昭和09年「密大日記」第1冊
95	C01007470100	皆津崎第1砲台砲座補修工事実施の件	昭和09年「密大日記」第2冊
96	C01007470300	奄美大島要塞倉庫上屋破綻補修工事実施の件	昭和09年「密大日記」第2冊
97	C01007487900	奄美大島要塞修繕費支出実施の件	昭和09年「密大日記」第2冊

表11 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(3)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
98	C01004048600	手榴弾薬本庫清涼火薬庫其他災害復旧並新営工事に關する件	昭和10年「密大日記」第1冊
99	C01004060600	防御營造物新営工事件	昭和10年「密大日記」第2冊
100	C01004080300	昭和9年度新営費及修繕費支出実施表の件	昭和10年「密大日記」第3冊
101	C01004164700	「カ」教徒転向状況の件	昭和11年「密大日記」第2冊
102	C01004180900	奄美大島要塞新営災害(補修)費支出実施の件	昭和11年「密大日記」第5冊
103	C01004187900	固有財産編入に關する件	昭和11年「密大日記」第5冊
104	C01004189300	防御營造物新営工事件	昭和11年「密大日記」第5冊
105	C01004315500	新営工事竣工の件(奄美大島)	昭和12年「密大日記」第6冊
106	C01004317100	奄美大島要塞新営災害(補修)費支出実施の件	昭和12年「密大日記」第6冊
107	C01004338000	留守部隊名称呼に關する件	昭和12年「密大日記」第6冊
108	C01004353300	移動式火薬庫乾燥装置交付の件	昭和12年「密大日記」第8冊
109	C01004404200	軍隊学校官衛准士官、下士官、判任文官定員区分表中改正の件	昭和13年「密大日記」第1冊
110	C01004432000	手安弾薬本庫貯水所新営工事実施の件	昭和13年「密大日記」第5冊
111	C01004453100	目次	昭和13年「密大日記」第6冊
112	C01004454300	奄美大島要塞新営工事竣功の件	昭和13年「密大日記」第6冊
113	C01004468900	鹿児島県大島郡に国立療養所支所設立に關する件	昭和13年「密大日記」第6冊
114	C01004501500	昭和13年度陸軍動員計画令、同細則返納方の件	昭和13年「密大日記」第11冊
115	C01004542100	45式(改造固定式及同	昭和13年「密大日記」第14冊
116	C01004605600	要塞電燈用予備反射鏡整理に關する件	昭和14年「密大日記」第2冊
117	C01004669000	陸軍制式火薬表の件	昭和14年「密大日記」第11冊
118	C01004671600	火薬検査用器具特別支給の件	昭和14年「密大日記」第11冊
119	C01004877500	化学戦教育用弾薬支給定数の件	昭和15年「密大日記」第15冊
120	C01004904100	克式35口径15種加農飯射表(九五式破甲榴彈)送付の件	昭和15年「密大日記」第15冊
121	C01007794500	増給給与部隊指定の件中改正の件達	來輪綴(支滿)第4部昭和15年
122	C02030918500	築城部准士官下士判任文官配属区分の件	大日記甲輯 大正09年
123	C02030918600	築城部支部仮事務所設置の件	大日記甲輯 大正09年
124	C02031000800	交通至難の場所に在勤する職員に手当給与に關する件	大日記甲輯 大正10年
125	C02031007300	沖縄・奄美大島及父島在勤の軍人軍属に在勤加俸給与の件	大日記甲輯 大正10年
126	C02031092200	築城部支部の位置及等級改正の件	大日記甲輯 大正12年
127	C02031093100	父島奄美大島要塞司令部准士官以下の配属に關する件	大日記甲輯 大正12年
128	C02031134600	運輸通信	大日記甲輯 大正12年
129	C02031135600	奄美大島小笠原父島と内地間交通船に關する件	大日記甲輯 大正12年
130	C02031250600	要塞司令部准士官下士判任文官定員区分の件	大日記甲輯 大正15年
131	C01001079000	憲兵服務規程改正の件	大日記甲輯 昭和04年
132	C01001164200	島嶼在勤手当支給規則中改正の件	大日記甲輯 昭和05年
133	C01001225700	宮古島在勤者の官舎貸渡料に關する件	大日記甲輯 昭和06年
134	C01001290200	島嶼在勤者の官舎貸渡料に關する件	大日記甲輯 昭和09年
135	C01001354400	四一式山砲弾薬中改正の件	大日記甲輯 昭和10年
136	C01001364100	外人観光旅行者用の小冊子に關する件	大日記甲輯 昭和10年
137	C01001391200	示数板中改正の件	大日記甲輯 昭和11年
138	C01001402000	既令達兵器名称変更の件	大日記甲輯 昭和11年
139	C01001498600	4号及5号帶狀薬中装薬量変更並使用禁止の件	大日記甲輯 昭和12年
140	C01001499400	5号帶狀薬中装薬量変更の件	大日記甲輯 昭和12年
141	C01001502000	九二式歩兵砲外6点操砲用弾薬筒函面配賦の件	大日記甲輯 昭和12年
142	C01001504300	九二式重機関銃中改正の件	大日記甲輯 昭和12年
143	C01001515100	4号帶狀薬中装薬量変更並使用禁止の件	大日記甲輯 昭和12年
144	C01001520100	四一式帶狀薬中装薬量変更並使用禁止の件	大日記甲輯 昭和12年
145	C01001587200	島嶼在勤者の官舎貸渡料に關する件中改正の件	大日記甲輯 昭和13年

表12 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(4)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
146	C01001737800	5号帯状葉中装薬量変更の件	大日記甲輯 昭和14年
147	C01001741000	黄銅炸薬の製造並使用停止の件	大日記甲輯 昭和14年
148	C01001744200	九二式2米測高機細部図送付の件	大日記甲輯 昭和14年
149	C01001744700	98式海岸偏差盤制式制定の件	大日記甲輯 昭和14年
150	C01001748900	九七式観測儀図面中修正の件	大日記甲輯 昭和14年
151	C01001749300	九四式拳銃細部図送付の件	大日記甲輯 昭和14年
152	C01001750800	九二式重機関銃制式制定の件	大日記甲輯 昭和14年
153	C01001820800	島嶼在動手当支給に関する件	大日記甲輯 昭和15年
154	C01001821400	島嶼在動手当支給規則中改正の件	大日記甲輯 昭和15年
155	C01001861000	九七式観測儀名称改正の件	大日記甲輯 昭和15年
156	C01001861100	九九式小銃弾薬空包及狭窄射撃実包仮制式制定の件	大日記甲輯 昭和15年
157	C01001861700	一〇〇式二衝信管「迫」仮制式制定の件	大日記甲輯 昭和15年
158	C01001861900	二十一年式速射山砲弾薬九七式鋼性銃榴弾制式制定の件	大日記甲輯 昭和15年
159	C01001862900	陸軍制式兵器本図制定の件	大日記甲輯 昭和15年
160	C03011286000	文島及奄美大島要塞司令部庁舎及官舎敷地測定の件	大日記乙輯 大正9年
161	C03011332000	奄美大島及父島在勤者官舎貸渡料に関する件	大日記乙輯 大正9年
162	C03011443100	土地買収の件	大日記乙輯 大正10年
163	C03011443300	土地買収の件	大日記乙輯 大正10年
164	C03011448800	国有原野管理換の件	大日記乙輯 大正10年
165	C03011460700	土地買収の件	大日記乙輯 大正10年
166	C03011460900	土地買収の件	大日記乙輯 大正10年
167	C03011463700	要塞整理に伴ふ大正9年度予定工事中敷地買収の件	大日記乙輯 大正10年
168	C03011465800	国有林野管理換の件	大日記乙輯 大正10年
169	C03011474600	築城部奄美大島支部事務室其他新築工事の件	大日記乙輯 大正10年
170	C03011509800	奄美大島要塞司令部庁舎其他新築工事の件	大日記乙輯 大正10年
171	C03011520700	奄美大島要塞司令部上水道工事の件	大日記乙輯 大正10年
172	C03011637600	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
173	C03011637800	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
174	C03011638100	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
175	C03011638200	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
176	C03011638900	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
177	C03011640500	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
178	C03011641300	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
179	C03011641400	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
180	C03011643800	官有地管理換の件	大日記乙輯 大正11年
181	C03011644200	奄美大島要塞司令部敷地買収の件	大日記乙輯 大正11年
182	C03011646000	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
183	C03011646100	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
184	C03011646200	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
185	C03011646300	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
186	C03011647500	土地買収の件	大日記乙輯 大正11年
187	C03011670900	奄美大島要塞司令部官舎使用の件	大日記乙輯 大正11年
188	C03011679600	奄美大島要塞司令部庁舎其他工事取止の件	大日記乙輯 大正11年
189	C03011697300	奄美大島要塞司令部宿舍上水道布設其他工事実施の件	大日記乙輯 大正11年
190	C03011753900	発動機保管転換の件	大日記乙輯 大正11年
191	C03011754300	汽船保管転換並使用の件	大日記乙輯 大正11年
192	C03011761900	せめんと保管転換の件	大日記乙輯 大正11年
193	C03011768800	特19号国道改良に関する件	大日記乙輯 大正11年
194	C03011790000	土地買収の件	大日記乙輯 大正12年
195	C03011805400	奄美大島要塞建築工事中止に伴ひ不用となりたる建築材料保管転換の件	大日記乙輯 大正12年
196	C03011810700	建築材料保管転換の件	大日記乙輯 大正12年
197	C03011821800	不用建築材料利用の件	大日記乙輯 大正12年
198	C03011836000	奄美大島要塞司令部官舎其他電灯新営工事の件	大日記乙輯 大正12年

表13 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(5)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
199	C03011891400	汽船使用の件	大日記乙輯 大正12年
200	C03011891600	築城部所属の船舶管理換の件	大日記乙輯 大正12年
201	C03011941600	奄美大島要塞司令部塙舎新築工事の件	大日記乙輯 大正13年
202	C03012007900	軍用塙舎の件	大日記乙輯 大正13年
203	C03012022400	兵器細目名称表等配布の件	大日記乙輯 大正13年
204	C03012072000	台岐要塞建築工事残材使用の件	大日記乙輯 大正14年
205	C03012148900	軍事上必要なる道路改修の件	大日記乙輯 大正14年
206	C01006129400	奄美大島要塞司令部特設電話架設工事の件	大日記乙輯 昭和03年
207	C01006253400	安脚塙砲台監守衛舎改築工事実施の件	大日記乙輯 昭和04年
208	C01006305800	要塞地帯第2区及第3区内の場所に於ける飲食出願に対し所轄官庁の許可に関する件	大日記乙輯 昭和04年
209	C01006306200	要塞地帯内の農業調査に関する件	大日記乙輯 昭和04年
210	C01006337300	国防用地無償使用の件	大日記乙輯 昭和05年
211	C01006349000	沖縄縣隊司令部庁舎増築並沖縄奄美大島災害復旧工事実施の件	大日記乙輯 昭和05年
212	C01006352400	監守衛舎周壁新設工事実施方の件	大日記乙輯 昭和05年
213	C01006356000	防衛官造物編入の件	
214	C01006400900	機密書類謄写の件	
215	C01006502600	管理汽船用途廃止処分の件	大日記乙輯 昭和6年
216	C01006542500	土地寄附の受納に関する件	大日記乙輯 昭和9年
217	C01006546700	国有財産編入の件	大日記乙輯 昭和9年
218	C01002059600	要塞地帯内道路工事に關する件	大日記乙輯 昭和9年
219	C01006587800	要塞地帯内道路新設工事施行に関する件	大日記乙輯 昭和9年
220	C01006625000	国有財産編入の件	大日記乙輯 昭和10年
221	C01006715500	要塞地帯内道路新設工事の件	大日記乙輯 昭和10年
222	C01006718700	要塞地帯内道路新設工事施行に関する件	大日記乙輯 昭和10年
223	C01002095500	国有財産管理換渡の件	大日記乙輯 昭和11年
224	C01002100200	国有財産管理換渡に関する件	大日記乙輯 昭和11年
225	C01002111600	国有財産管理換渡の件	大日記乙輯 昭和11年
226	C01006780200	兵器特別支給の件	大日記乙輯 昭和11年
227	C01002217500	手安弾薬本庫新営工事実施に関する件	大日記乙輯 昭和12年
228	C01006937900	特別支給兵器を物品として使用方の件	大日記乙輯 昭和12年
229	C01006974000	国有財産管理換に関する件	大日記乙輯 昭和13年
230	C01007117800	要塞地帯内道路新設に関する件	大日記乙輯 昭和13年
231	C01007225700	演習用砲兵弾薬中変更に関する件	昭和14年 「乙輯 第2類 第2冊 兵器 (其1)」
232	C01007340200	G無煙薬乙耐熱試験要領送付の件	昭和14年 「乙輯 第3類 第2冊 特種試験」
233	C01007408200	国勢調査の為要塞地帯等軍事秘密保護地区の略図作成に際し便宜供与方の件	昭和15年 「乙輯 第3類 第1冊 測量調査」
234	C01007435600	災害復旧工事の件 留守第6経	昭和15年 「乙輯 第4類 第5類 合冊 震災」
235	C07061055400	看護長配属の件	大正9年9月其2 西受大日記
236	C03020018200	海底電線警察に於て保護の件	明治37年 「陸支密大日記 明治37年 1月」
237	C04120453300	支那事変間廢兵器(航空兵器を除く)検定規則の適用緩和及廢兵器の利用再生等に関する件	昭和13年 「陸支密大日記 第37号」
238	C04122393100	鉄道軍事輸送に関する件	昭和15年 「陸支密大日記 第30号 1/4」
239	C04122403800	鉄道軍事輸送に関する件	昭和15年 「陸支密大日記 第30号 2/4」
240	C04123538100	被服交付に関する件	昭和16年 「陸支密大日記 第56号 3/3」
241	C04123597100	編制改正(編成)部隊編成完結の件	昭和16年 「陸支密大日記 第61号 3/3」
242	C04123716400	増給給与部隊指定の件中改正の件	昭和17年 「陸支密大日記 第8号」
243	C04123727600	衛生材料器械増加備附られ度件申請	昭和17年 「陸支密大日記 第10号」
244	C07090829600	奄美大島要塞司令官 詰切及屠残食料支給方の件	支受大日記(普)其06 2/2
245	C07092064900	飛行機事故に関する件報告	昭和16年 「陸支密大日記第27号」

表14 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(6)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
246	C01000142300	対瓦斯衛生材料交付の件	昭和17年 「陸軍密大日記 第9号 3/3」
247	C01000753700	臨時編成(編制改正)部隊編成関係諸表提出の件	昭和17年 「陸軍密大日記 第49号 1/3」
248	C01000754100	時局関係部隊に資材増加装備の件	昭和17年 「陸軍密大日記 第49号 1/3」
249	C06030172500	第5954号 17.10.2 戦備課 大洋丸遭難に関する費用立替の件	昭和17年「陸軍密大日記第21号」
250	C03031073100	要港位置内定の件	明治30年4月 「密大日記」
251	C06084387100	秘密海図返戻及借用の件	明治40年乾 「密大日記12月」
252	C06084868300	陸測海図目録送付の件	明治42年坤 「密大日記10月」
253	C06085073600	陸地測量部に於て汽船使用の件	明治43年坤 「密大日記3月」
254	C07072914800	克式35口径15種加農射表送付の件	昭和13年 「肆大日記1.2月」
255	C07072922500	留守第6師団予算増額の件申請 (14.1.21)	昭和14年 「肆大雑書」
256	C06040345900	4.28 軍令部次長須磨浦丸門司出帆基隆に至る通報	「明治38年3.4月 参通級 大本營陸軍参謀部」
257	C09120250900	12.25 参謀局長代理 水路寮より彫刻海図差廻の件	明治7年12月 諸省 9 18
258	C09122995800	海軍望楼及戦時特設する仮設望楼の処在を参考通牒	明治36年 軍事機密文書編冊 庶樞
259	C08051813200	第3回会議(8月10日)決議	華府会議準備書類 華府会議陸軍隨員極秘
260	C08051815300	大正10年8月15日 彼我交換的に撤廃する場合	華府会議準備書類 華府会議陸軍隨員極秘
261	C08051815500	太平洋諸島防備撤廃問題(1)	華府会議準備書類 華府会議陸軍隨員極秘
262	C08051816400	太平洋諸島防備問題に関する書類(3)	華府会議準備書類 華府会議陸軍隨員極秘
263	C08051849100	第3款 条約起草全権委員会	大正11年5月 華府会議報告 軍備制限問題調査(上巻) 極秘
264	C08051850900	第3項 条約第2章	大正11年5月 華府会議報告 軍備制限問題調査(上巻) 極秘
265	C10061982600	新設奄美大島皆通崎外3ヶ所海軍望楼用として物号暗号4組御請求に付送付の件	明治31年7月 物号暗号に関する書類
266	C13110482400	目次「日露事件要報 5 明治38年5月」	日露事件要報 5 明治38.5
267	C13071241600	第4篇 戦争第3期に於ける統帥 (自昭和18年9月至昭和19年6月)(2)	大本營統帥記録(第4編～第6編)
268	C13071268500	第4篇 戦争第3期に於ける統帥 (自昭和18年9月至昭和19年6月)(2)	大本營陸軍統帥記録 昭和16年初～20年8月
269	C13071269800	第4篇 戦争第3期に於ける統帥 (自昭和18年9月至昭和19年6月)(2)	大本營陸軍統帥記録 昭和17年3月～20年8月
270	C12120127700	1.敵情判断/米軍戦略判断	大本營本土決戦準備
271	C12120135400	第1 東進軍事情勢/其1 米英支の対日戦略/ (2) 帝国本土方面	昭和21年春頃を目途とする情勢判断 1/7
272	C12120148900	第6篇 絶対国防圏の作戦/ 第2章 絶対国防圏の戦備強化/ 5.台湾及南西諸島の戦備強化	絶対国防圏の作戦 昭和19年2月
273	C12120167800	第5 国土防空所要兵力量並びにその編制	国土防空方策に関する研究
274	C12120388800	敵の企図判断	最高戦争指導会議綴 昭和19年8月～20年6月
275	C14060906400	命 巻8 3部の内1号(1)	大陸命綴 巻08 自.昭和16.09.15 第0541号至.昭和17.02.16第0600号
276	C14060906700	命 巻8 3部の内1号(4)	大陸命綴 巻08 自.昭和16.09.15 第0541号至.昭和17.02.16第0600号
277	C13071081500	上奏関係綴 其の1 自昭和16年10月至昭和16年12月 大本營(4)	上奏関係綴 其1 昭和16年10月～昭和16年12月
278	C12121116100	重砲兵連隊	復員時における主要なる 陸軍部隊調査 一覽表草案 昭和28年5月
279	C14010643700	要塞	昭和18年度 動員計画人馬調査表 1/2(防衛.留守.航空部隊)

表15 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(7)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
280	C14010646300	第2章 軍動員の変遷/ 第3節 軍動員実施の概要 (4)	支那事変、大東亜戦争間 動員概史 (草稿)1/3 昭12～20年
281	C14010657200	要案	昭和18年度動員計画 人馬調査表 4/4 (防衛、留守、航空)部隊 昭18.3.10調
282	C14010820500	昭和17年度動員計画 整備人馬調査表/防衛 部隊	昭和17年度動員計画 整備人馬調査表 昭和17.7
283	C12121660700	陸軍軍備整理と陸軍予算の概要 大正11年 12月 陸軍省印刷/5. 要案再整理の概要 6. 新式兵器の整備	陸軍予算綱要 大正9年～昭和16年
284	C14010439500	8 要塞地帯附近居住外国人	防護 第8号 昭和16.4
285	C12122464400	第一六野戦郵便隊	比島方面部隊略歴
286	C15010009300	14. 「フィリピン」上陸 (水陸両用) 作戦 に就て (作戦統帥関係情報要求の件回答 別冊第12)/附録第3 作戦準備及作戦経過 日時一覧表	連合軍司令部の質問に対する回答文書綴 1/26 昭20. 10. 29～20. 11. 3
287	C15010018000	5. 「フィリピン」上陸 (水陸両用) 作戦 に就て (作戦統帥関係情報要求の件回答 別冊第12)/附録第3 作戦準備及作戦経過 日時一覧表	連合軍司令部の質問に対する回答文書綴 5/26 昭20. 12. 13
288	C15010092800	終連報内第20号 昭和21年2月8日 渉外課 琉球への送還の件	「昭和21. 1. 30-21. 4. 30 終連報内綴 1/4 第1復員局史実調査部第1班」
289	C15010101000	終連報内第103号 昭和21年4月2日 渉外課 引揚艦船行動予定表 (第15号)	「昭和21. 1. 30-21. 4. 30 終連報内綴 1/4 第1復員局史実調査部第1班」
290	C15010104700	終連報内第146号 昭和21年4月22日 渉外課 G HQとの連絡 4月17日	「昭和21. 1. 30-21. 4. 30 終連報内綴 1/4 第1復員局史実調査部第1班」
291	C15010107000	終連報内第164号 昭和21年5月1日 渉外課 引揚艦船行動予定表 (第23号)	「昭和21. 5. 1-21. 8. 31 終連報内綴 2/4 第1復員局史実調査部第1班」
292	C15010109600	終連報内第195号 昭和21年5月18日 総務課 G HQとの連絡 5月16日	「昭和21. 5. 1-21. 8. 31 終連報内綴 2/4 第1復員局史実調査部第1班」
293	C15010113000	終連報内第229号 昭和21年6月7日 渉外課 G HQとの連絡 6月6日附	「昭和21. 5. 1-21. 8. 31 終連報内綴 2/4 第1復員局史実調査部第1班」
294	C15010114600	終連報内第245号 昭和21年6月 総務課 G HQとの連絡 6月15日	「昭和21. 5. 1-21. 8. 31 終連報内綴 2/4 第1復員局史実調査部第1班」
295	C15010116200	終連報内第264号 昭和21年7月8日 総務課 引揚に関する連合軍司令部 との連絡 7月6日	「昭和21. 5. 1-21. 8. 31 終連報内綴 2/4 第1復員局史実調査部第1班」
296	C15010121500	終連報内第307号 昭和21年8月26日 総務課 引揚関係各省連絡事項 8月26日	「昭和21. 5. 1-21. 8. 31 終連報内綴 2/4 第1復員局史実調査部第1班」
297	C15010122400	終連報内第311号 昭和21年9月3日 総務課 引揚関係各省連絡事項	「昭和21. 9. 3-22. 3. 28 終連報内綴 3/4 第1復員局史実調査部」
298	C15010123900	終連報内第326号 昭和21年9月19日 総務課 引揚関係 G. H. Q連絡報告 9月17日	「昭和21. 9. 3-22. 3. 28 終連報内綴 3/4 第1復員局史実調査部」
299	C15010128800	終連報内第381号 昭和21年10月31日 総務課 引揚関係 G HQ連絡事項	「昭和21. 9. 3-22. 3. 28 終連報内綴 3/4 第1復員局史実調査部」
300	C15010129200	終連報内第385号 昭和21年11月4日 総務課 引揚関係 G HQ連絡事項 11月4日	「昭和21. 9. 3-22. 3. 28 終連報内綴 3/4 第1復員局史実調査部」
301	C15010131800	終連報内第417号 昭和21年12月3日 総務課 第2復員局関係特別輸送艦船帰還輸 送状況一覧表 (昭和21年11月30日現在)	「昭和21. 9. 3-22. 3. 28 終連報内綴 3/4 第1復員局史実調査部」
302	C15010140000	終連報内第520号 昭和22年5月27日 連絡課 引揚関係各省連絡事項 死亡した琉球人の遺骨及遺留品に関する件	「昭和22. 4. 5-23. 2. 10 終連報内綴 4/4 第1復員局史料調査部」
303	C15010270400	其の2 復員の状況	「九州地区出張報告 (軍需品処理、 復員、連合軍進駐状況等)」
304	C15010516900	昭和20年11月13日 西部軍管区司令官 陸普電第149号に依る復員人員等を11月6日 より11月12日迄に報告の件	「昭和20. 11 復員状況調査報告 西部軍 管区司令官」
305	C15010517600	昭和20年11月28日 鎮西司令官 復員及残置 人員報告の件	「昭和20. 11 復員状況調査報告 西部軍 管区司令官」
306	C15010518100	昭和20年12月3日 西部復員監部 12月1日西 復復第4号復員日報訂正の件	「昭和20. 11 復員状況調査報告 西部軍 管区司令官」

表16 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(8)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
307	C15010518200	昭和20年12月9日 西部復員連絡局受信 陸普電第578号に係る復員週報の件	「昭和20.11 復員状況調査報告 西部軍 管区司令官」
308	C15010562500	9. 山家 復員の進捗状況並に見通の概要に 付報告の件	「昭和20.8-12 西部軍復員に関する綴」
309	C15010565000	43. 昭和20年11月3日 福岡 復員人員等10月 23日より10月29日迄報告の件	「昭和20.8-12 西部軍復員に関する綴」
310	C15010565200	45. 昭和20年11月5日 福岡 復員人員等10月 30日より11月5日迄報告の件	「昭和20.8-12 西部軍復員に関する綴」
311	C15010645100	陸軍調査部質問書 (其13) 回答 台湾九州及 南西諸島 1945年3月15日~1945年8月15日 (沖繩戦)/9. 沖繩作戦に於て使用する特攻 機数等就て 10. 陸軍は練習機の特攻隊を 使用する	「昭和20.11 「日本陸軍航空作戦関係情 報要求の件」に関する陸軍調査部質問書 (其の16) 回答」
312	C15010730400	鹿児島上陸地支局週報 自昭和20年12月24日至昭和20年12月30日	「昭和21.2 鹿児島上陸地支局週報」
313	C15010818700	第2. 業務処理の概況/4. 経理給与業務 (2)	広島上陸地支局史 昭和22.10
314	C15010896700	10. 陸軍は練習機の特攻隊を使用する 自2月4日至2月10日週報 (第17号)	軍事調査団質問事項 昭和20年 復員状況日報 (第61~95号) 昭和20.12~21.3
315	C15010901900	昭和21年2月11日 関東上陸地支局	
316	C15010963100	福上支総第47号 外征部隊帰還に伴ふ上陸 地支局週報の件報告	「外征部隊復員週報綴 昭和20.10以降」
317	C15010963600	鹿上支総発第49号 週報に関する件報告	「外征部隊復員週報綴 昭和20.10以降」
318	C15010969100	略号至急電報 等 (14)	「復来電報 (在外部隊上陸地支局等 よりの来電) 昭和20.11~21.12」
319	C15010969800	略号至急電報 等 (21)	「復来電報 (在外部隊上陸地支局等 よりの来電) 昭和20.11~21.12」
320	C15011006400	終戦事務連絡委員会連絡事項第89号	「終戦事務連絡委員会連絡事項綴 自昭和20.10~21.8」
321	C15011007800	終戦事務連絡委員会連絡事項第108号	「終戦事務連絡委員会連絡事項綴 自昭和20.10~21.8」
322	C15011011200	終戦事務連絡委員会連絡事項第143号	「終戦事務連絡委員会連絡事項綴 自昭和20.10~21.8」
323	C15011014500	終戦事務連絡委員会連絡事項第178号	「終戦事務連絡委員会連絡事項綴 自昭和20.10~21.8」
324	C11110006600	第3章 南西諸島に対する兵力の増強	沖繩作戦記録 昭和21年8月
325	C11110013200	奄美大島陸軍病院	沖繩部隊史実資料 昭和21年1月9日
326	C11110013400	船舶工兵第26連隊第3中隊	沖繩部隊史実資料 昭和21年1月9日
327	C11110013700	独立混成第21連隊	沖繩部隊史実資料 昭和21年1月9日
328	C11110030800	別紙第4 戦開始時に於ける沖繩本島外第 32軍諸部隊の展開一覧表	沖繩作戦に於ける第32軍史実資料 (1)
329	C11110131500	表紙「沖繩作戦に於ける独立混成第44旅団 史実資料」 昭和22年3月	沖繩作戦に於ける独立混成第44旅団 史実資料 昭和22年3月
330	C11110132300	独立混成第44旅団第2歩兵隊本部	沖繩作戦に於ける独立混成第44旅団 史実資料 昭和22年3月
331	C11110155900	別紙第4 戦開始時に於ける沖繩本島外第 32軍諸部隊の展開一覧表	第32軍 軍直部隊史実資料 (1)
332	C11110186300	勝利丸指命第12号 勝利丸輸送指揮官命令 10月10日1050勝利丸	作戦命令録 (独立迫撃第6中隊) 昭和19年9月~19年12月
333	C11110196200	球作命甲第94号 第32軍命令 1月4日	作命綴 (要塞建築勤務第6中隊)
334	C11110218300	目次「第32軍南西空襲戦闘詳報 昭和20年1月25日」	第32軍南西空襲戦闘詳報 昭和20年1月25日
335	C11110218500	2 天候気象等の概況	第32軍南西空襲戦闘詳報 昭和20年1月25日
336	C11110218800	5 敵潜水艦の状況	第32軍南西空襲戦闘詳報 昭和20年1月25日
337	C11110233100	警戒月報 (1月分)	第32軍電波警戒隊 警戒月報 昭和19年10月~昭和20年1月
338	C11110235500	14 瓦斯修業兵検閲	歩兵第36連隊第2大隊陣中日誌 昭和20年1月1日~昭和20年1月31日
339	C11110240100	俘虜捕獲状況及俘虜尋問書等送付の件報告 球2740情第6号 昭和20年7月10日	独立混成第64旅団 俘虜に関する書類綴 昭和20年

表17 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(9)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
340	C11110252500	大陸軍第973号 命令 昭和19年3月22日 他47件 (1)	第32軍関係大陸命綴 昭和19年3月22日～昭和20年6月20日
341	C11110270600	「独立混成第64旅団空襲戦闘詳報 昭和20年1月22日」(1)	独立混成第64旅団空襲戦闘詳報 昭和20年1月22日
342	C11110270700	「独立混成第64旅団空襲戦闘詳報 昭和20年1月22日」(2)	独立混成第64旅団空襲戦闘詳報 昭和20年1月22日
343	C11110272500	3月1日南西諸島対空戦闘詳報 第32軍電波警戒隊	第32軍電波警戒隊 対空戦闘詳報 昭和20年1月4日～昭和20年3月1日
344	C11110278500	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
345	C11110278600	表紙「奄美守備隊空襲詳報」 昭和20年3月1日	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
346	C11110278700	3月1日空襲詳報 昭和20年3月 奄美守備隊	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
347	C11110278800	3月1日空襲詳報	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
348	C11110278900	3 天候気象の概要	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
349	C11110279000	4 敵機の機種と攻撃法	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
350	C11110279100	5 戦況並に将来参考となるべき事項	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
351	C11110279200	6 我方の損害	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
352	C11110279300	附表	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
353	C11110279400	3月1日空襲戦闘詳報 昭和20年3月2日 独立混成第21連隊	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
354	C11110279500	3月1日空襲戦闘詳報 昭和20年3月2日 独立混成第21連隊	奄美守備隊空襲詳報 昭和20年3月1日
355	C11110288400	1月22日 南西空襲第3中隊戦闘詳報 船舶工兵第26連隊第3中隊	船舶工兵第26連隊第3中隊 戦闘詳報 昭和20年1月22日
356	C11110288900	奄美守備隊命令	船舶工兵第26連隊第3中隊 戦闘詳報 昭和20年1月22日
357	C11110289600	戦闘詳報 第1号 球7165経路第7号 砲第6168部隊平賀部隊大敵隊	第1船舶輸送司令部 平賀部隊大敵隊 戦闘詳報 昭和20年1月22日
358	C11110289900	中表紙/大島本島守備隊空襲戦闘詳報	第1船舶輸送司令部 平賀部隊大敵隊 戦闘詳報 昭和20年1月22日
359	C11110299300	目次「第32軍南西諸島空襲詳報 昭和20年1月4日」	第32軍南西諸島空襲詳報 昭和20年1月4日
360	C11110299500	2 天候気象等の概要	第32軍南西諸島空襲詳報 昭和20年1月4日
361	C11110300400	附表第2 敵機来襲時刻及機数一覧表	第32軍南西諸島空襲詳報 昭和20年1月4日
362	C11110301800	目次「第32軍南西諸島空襲詳報 昭和20年1月22日～昭和20年1月22日」	第32軍南西諸島空襲詳報 昭和20年1月22日～昭和20年1月22日
363	C11110302000	2 天候気象等の概況	第32軍南西諸島空襲詳報 昭和20年1月22日～昭和20年1月22日
364	C11110302800	附表第2 敵機来襲時刻及機数一覧表	第32軍南西諸島空襲詳報 昭和20年1月22日～昭和20年1月22日
365	C11110324100	第1編・第3章・第4節/第2款 海上挺進戦隊攻撃の状況	沖縄作戦記録(改訂版)
366	C11110335700	附表第5 各島嶼別略号配当表	武第1573部隊連絡規定 昭和19年9月
367	C11110337500	1 奄美群島の防衛強化と独立混成第21連隊 の派遣	独立混成第64旅団の概況
368	C11110337600	2 独立混成第64旅団の編成および奄美群島 派遣	独立混成第64旅団の概況
369	C11110337700	3 終戦に至るまでの間における独立混成 第64旅団の概況	独立混成第64旅団の概況
370	C11110337800	4 終戦時および終戦後における独立混成 第64旅団の状況	独立混成第64旅団の概況
371	C11110337900	附表第1 独立混成第64旅団部隊行動概見表	独立混成第64旅団の概況
372	C11110338000	附表第2 独立混成第64旅団長指揮下部隊一覧	独立混成第64旅団の概況
373	C11110338100	附録1	独立混成第64旅団の概況
374	C11110338200	附録2 沖縄における降伏文書 (現地仮訳)1945年9月7日	独立混成第64旅団の概況
375	C11110338300	附録3 1945年9月21日米第10軍司令官発 電報(訳文)	独立混成第64旅団の概況
376	C11110338400	附録4 1945年11月2日沖縄基地司令官発 紹介状(訳文)	独立混成第64旅団の概況

表18 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(10)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
377	C11110338500	目次「独立混成第64旅団の概況」	独立混成第64旅団の概況
378	C11110338600	1 奄美群島の防衛強化と独立混成第21連隊の派遣	独立混成第64旅団の概況
379	C11110338700	2 独立混成第64旅団の編成および奄美群島派遣	独立混成第64旅団の概況
380	C11110338800	3 終戦に至るまでの間における独立混成第64旅団の概況	独立混成第64旅団の概況
381	C11110338900	4 終戦時および終戦後における独立混成第64旅団の概況	独立混成第64旅団の概況
382	C11110339000	附表	独立混成第64旅団の概況
383	C11110339100	第2 独立混成第64旅団長指揮下部隊一覧表(終戦時における)	独立混成第64旅団の概況
384	C11110352400	書簡	海上挺進第29戦隊長訓示 昭和20年10月26日
385	C11110364600	3 航空状況 別表第五 南西諸島敵機来襲状況(五月下旬)	台湾軍司令部情報記録 昭和20年5月21日～20年5月31日
386	C11110367300	附表第5 各島嶼別略号配当表	武第1573部隊(第9師団)連絡規定 昭和19年9月20日
387	C14020002800	2. 当初日本軍の攻撃に用ひられた師団及旅団数 3. 同上部隊の原駐地及途中の駐留地一覽表	日本陸軍兵力 昭5～19年
388	C14020088600	目次「御真影勅諭に関する綴」 大正12～15年	御真影勅諭に関する綴 大正12～15年
389	C14020089600	新設・廃止部隊御真影勅諭に関する件	御真影勅諭に関する綴 大正12～15年
390	C14020089800	御真影下の件	御真影勅諭に関する綴 大正12～15年
391	C14060032200	大陸令第563号 命令 昭和16年11月8日	南方作戦 開戦初期に於ける重要書類綴 昭16.9.18～17.2.16
392	C14020510000	師団通信隊戦闘詳報 (自12月8日至12月23日間の状況)	第16師団通信隊「マニラ攻略戦闘詳報 昭16.12.8～17.1.3
393	C14061004000	第1 一般方針	要塞再整理及東京湾要塞施設復旧修正計画要領 昭7本
394	C14061004500	附表	要塞再整理及東京湾要塞施設復旧修正計画要領 昭7本
395	C14061004800	附録第2 要塞通信網要図	要塞再整理及東京湾要塞施設復旧修正計画要領 昭7本
396	C14061006000	第1篇 要塞防衛	帝國陸軍国土防衛計画 昭14
397	C14061007100	昭和14年度帝國陸軍国土防衛計画訓令別冊/第2章 要塞防衛	国土防衛計画訓令 昭14年度 帝國陸軍 昭13.9.21
398	C14061007400	昭和14年度帝國陸軍国土防衛計画訓令別冊/第5章 計画	国土防衛計画訓令 昭14年度 帝國陸軍 昭13.9.21
399	C14061032900	第1回 8月15日	陸軍作戦に關するべき海軍作戦に就ての研究 明44.8
400	C09112218200	往入867 奄美大島全圖差出の件水路局上申	公文類纂 明治9年 卷23 本省公文 図書部
401	C09113719200	往入3892 嶺内湾略則圖差出の件水路局上申	明治12年 公文類纂 後編 卷27 本省公文
402	C09090973200	往入867 水路局奄美大島全圖差出方上申	公文原書 卷26 本省公文 明治9年12月6日～明治9年12月8日
403	C09101825200	往入1360 朝鮮国海図其外刊行落成水路局上申	公文原書 卷36 本省公文 明治12年5月4日～明治12年5月7日
404	C09102330500	往入3892 嶺内湾圖差出水路局上申	公文原書 卷96 本省公文 明治12年12月5日～明治12年12月9日
405	C04015051800	要塞地帯秘密地圖描写に關する件	公文備考 帝國議會 軍港要塞 卷13の4
406	C04015432200	測量の件(1)	公文備考 地理及び水路1 卷116
407	C04015433000	奄美大島古志海面測量並漁業の件	公文備考 地理及び水路1 卷116
408	C06090257300	水路局 奄美大島全圖差出候上申	明治9年 公文備考 件入 卷23自810至965
409	C06090676600	水路局 英國公使へ海國贈方の義に付上申	明治10年 公文備考 外人 卷28
410	C06092181900	外国艦船不開港場其他出入(2)	明治42年 公文備考 卷31 艦船16
411	C07090176700	奄美大島海峡及松洋港における於ける水源水量及汲水方法等調査報告書	「公文備考 艦船39 卷55」
412	C04015509200	表紙「公文備考 儀制」卷14	公文備考 儀制」卷14
413	C04015509700	行幸御内定の件	公文備考 儀制」卷14

表19 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(11)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
414	C04015510400	長官御説明に関する件	公文備考 儀制1 巻14
415	C04015510700	軍艦長良行動予定の件 (3)	公文備考 儀制1 巻14
416	C04015511100	軍艦山城鑑位図の件	公文備考 儀制1 巻14
417	C04015511400	新聞記者等軍艦便乗の件	公文備考 儀制1 巻14
418	C04015511700	供奉近衛将校変更の件	公文備考 儀制1 巻14
419	C04015512800	軍艦長良8月上旬奄美大島方面行動中便乗の件	公文備考 儀制1 巻14
420	C04015513100	軍艦便乗方に関する件	公文備考 儀制1 巻14
421	C04015513200	佐鎮第55号の32長良便乗の件	公文備考 儀制1 巻14
422	C04015513500	行幸に関する件	公文備考 儀制1 巻14
423	C04015531000	大喪儀参列に関する歩兵第1旅団命令に関する件 (2)	公文備考 儀制6 巻19
424	C04015543100	祭菜科送付の件 (軍艦比叡殉職者)	公文備考 儀制8 巻21
425	C04015622300	軍艦便乗の件 特務艦隠戸 (2)	公文備考 艦船5 巻34
426	C04015677600	軍艦常磐機雷爆発事件 (8)	公文備考 艦船24 巻53
427	C04015733900	5月18日雷軍艦常磐へ兵器貸与の件	公文備考 兵器3 巻63
428	C04015739300	呉軍需兵第3号の393特務艦間宮へ兵器貸与の件	公文備考 兵器3 巻63
429	C04015743700	呉軍需兵第3号の469特務艦間宮へ兵器貸与の件	公文備考 兵器3 巻63
430	C04015746500	佐軍需兵第2249号佐世保防備隊へ兵器貸与の件	公文備考 兵器4 巻64
431	C04015746800	佐軍需兵第2351号佐世保防備隊兵器貸与の件	公文備考 兵器4 巻64
432	C04015805200	第1艦隊戦闘運転報告講評及意見の件 (1)	公文備考 演習11 巻77
433	C04015806100	第1水雷戦隊戦闘運転運転実施経過の概要並意見の件 (1)	公文備考 演習11 巻77
434	C04015808100	第5戦隊戦闘運転研究に対する所見の件 (1)	公文備考 演習12 巻78
435	C04015808200	第5戦隊戦闘運転研究に対する所見の件 (2)	公文備考 演習12 巻78
436	C04015808300	第5戦隊戦闘運転研究に対する所見の件 (3)	公文備考 演習12 巻78
437	C04015808900	連合艦隊に関する件	公文備考 演習12 巻78
438	C04015811400	伊号第53潜水艦基本教練運転意見の件	公文備考 演習13 巻79
439	C04015812300	昭和2年軍艦常磐応用教練運転成績表の件	公文備考 演習13 巻79
440	C04015812400	昭和2年軍艦常磐応用教練運転成績表の件	公文備考 演習13 巻79
441	C04015827200	増俸の件	公文備考 兵員2止 巻83
442	C04015827300	状況調査報告の件	公文備考 兵員2止 巻83
443	C04015875900	佐防機密第72号掃除服貸与の件	公文備考 物件2 巻92
444	C04015970100	高層気象観測並に通報の件	公文備考 水路気象 巻129
445	C08020436000	商船学校練習船大成丸第9次航海報告 (1)	大正3年 公文備考 巻39 艦船25止
446	C08020468700	亡失消耗	大正3年 公文備考 巻65 物件6
447	C08020743500	諸刷物 (2)	大正5年 公文備考 巻14 儀制12
448	C08020960600	目次 「公文備考 艦船22 巻40」	大正6年10月8日～大正6年10月22日
449	C08020961600	奄美大島に関する連合艦隊司令長官報告 (1)	大正6年10月8日～大正6年10月22日
450	C08020961700	奄美大島に関する連合艦隊司令長官報告 (2)	大正6年 公文備考 巻40 艦船22
451	C08020961800	奄美大島に関する連合艦隊司令長官報告 (3)	大正6年 公文備考 巻40 艦船22
452	C08020961900	奄美大島に関する連合艦隊司令長官報告 (4)	大正6年 公文備考 巻40 艦船22
453	C08020962200	目次 「公文備考 艦船23止 巻41」	大正6年 公文備考 巻41 艦船23止
454	C08020962400	奄美大島に関する報告 (1)	大正6年 公文備考 巻41 艦船23止
455	C08020962500	奄美大島に関する報告 (2)	大正6年 公文備考 巻41 艦船23止
456	C08021609800	軍艦八雲 (2)	大正9年 公文備考 巻52 検閲
457	C08050146300	要塞地帯 (1)	大正10年 公文備考 巻11止 帝国議会議事要港及港湾
458	C08050146400	要塞地帯 (2)	大正10年 公文備考 巻11止 帝国議会議事要港及港湾
459	C08050523100	第1種部隊通信 (1)	大正11年 公文備考 巻75 演習9
460	C08050758700	海運丸	大正12年 公文備考 巻40 艦船
461	C08051145500	尻矢 (2)	大正13年 公文備考 巻43 艦船
462	C08051159600	佐世保航空隊飛行演習 (6)	大正13年 公文備考 巻50 航空
463	C08051205300	第1艦隊 (4)	大正13年 公文備考 巻76 演習
464	C08051208100	佐世保鎮守府 (3)	大正13年 公文備考 巻77 演習
465	C08051220500	善行表彰 (附善行章規則解釈) (4)	大正13年 公文備考 巻83 兵員止
466	C08051339100	秩父宮殿下御渡政関係 (3)	大正14年 公文備考 巻10 儀制

表20 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(12)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
467	C08051500200	鹿児島(埋立)	大正14年 公文備考 巻87 土木
468	C04016061900	天皇陛下海軍兵学校卒業式行幸及八丈島大島御立寄の件御取止め決定の件	公文備考 儀制1 巻19
469	C04016199000	呂号第60, 61, 62, 65, 66, 67潜水艦潜航々骨改正の件	公文備考 艦船3 巻66
470	C04016212900	練習航海に関する件	公文備考 艦船6 巻69
471	C04016284100	佐軍需兵第873号佐世保防備隊へ兵器貸与の件	公文備考 兵器2 巻87
472	C04016286900	佐軍需兵第1278号佐世保防備隊兵器定数変更の件	公文備考 兵器2 巻87
473	C04016290800	6月4日電涼駒橋へ兵器貸与の件	公文備考 兵器2 巻87
474	C04016291100	佐軍需兵第1596号佐世保防備隊へ兵器貸与の件	公文備考 兵器2 巻87
475	C04016353600	特務艇身島に臨時配乗の件	公文備考 兵員3止 巻95
476	C04016510300	急設予定航路標識位置遷出等の件(3)	公文備考 外国人 地理及水路 巻143
477	C04016741100	佐世保防備隊へ兵器貸与の件	公文備考 1 兵器 巻2
478	C04016742900	佐軍需兵第1353号佐世保防備隊へ兵器貸与の件	公文備考 1 兵器 巻2
479	C04016746000	兵器貸与の件 軍艦常盤、駆逐艦霧	公文備考 1 兵器 巻2
480	C05021016600	海軍主計大尉大友美能理外4名補職の件	公文備考 昭和5年 B 人事 巻5
481	C05021256300	第86番電 5.4.8 佐軍需兵第973号佐世保防備隊に兵器貸与の件	公文備考 昭和5年 I 兵器 巻2
482	C05021586500	甲種 戦闘運転報告(8)	公文備考 昭和6年 E 教育、演習、検閲 巻7
483	C05021741300	第174番電 6.6.13 6月11日電粟の軍艦常盤に電動送風機3機8基貸与の件	公文備考 昭和6年 I 兵器 巻3の2
484	C05021743600	第2872号 6.9.11 佐軍需兵第2752号軍艦陸奥に兵器貸与の件	公文備考 昭和6年 I 兵器 巻3の2
485	C05021919700	1艦隊機密25号の100 赤城3式艦上戦闘機8-217, 8-224遭難の件	公文備考 昭和6年 T 事件災害 巻13
486	C05021919800	赤城機密17号の87 遭難詳報の件	公文備考 昭和6年 T 事件災害 巻13
487	C05022205100	第1926号 7.5.23 佐軍需兵第2057号佐世保防備隊に兵器貸与の件	公文備考 昭和7年 I 兵器 巻2
488	C05022285200	7.9.29 奄美大島方面カトリック宣教師の軍探行為取締に関する件	公文備考 昭和7年 J 警戒計画 巻1
489	C05023097000	佐領機密第118号 昭和7.4.12 久高島に於ける飛行機飛来に関する件	公文備考 昭和8年 J 警戒計画 巻1
490	C05023982800	5、各省報告 1.内務省関係 2.農林省関係 3.鉄道省関係 4.其他(1)	公文備考 昭和9年 T 事件・災害 巻8
491	C05034502800	官房機密第46号3.1.13 鹿児島県大島郡国道速成に関する件	公文備考 昭和10年 J 警戒計画 巻13
492	C05034504100	目次 公文備考 昭和10年 J 警戒計画 巻14(1)	公文備考 昭和10年 J 警戒計画 巻14
493	C05034504600	第2661号 8.6.7 長崎県東彼杵郡彼杵村早岐町間府県道を国道に認定に関する件(2)	公文備考 昭和10年 J 警戒計画 巻14
494	C05035197600	熊鷹番第110号 10.2.25 奄美大島薩川湾口付近土地売却に関する実情調査の件	公文備考 昭和11年 J 警戒計画 巻1
495	C05035197700	官房機密第2281号 9.10.8 奄美大島薩川湾口付近土地売却に関する実情調査の件	公文備考 昭和11年 J 警戒計画 巻1
496	C05035389100	衣笠機密第62号 11.8.14 軍艦衣笠、青葉追衝報告	公文備考 昭和11年 T 事件 巻4
497	C10123873100	浮標/19年1月20日 水路局上申出測中水兵借受の件	明治19年 公文雑輯 巻17 土木
498	C10123905500	出版印刷/19年8月16日 書誌刊成届の件 (水路雑誌)	明治19年 公文雑輯 巻20 文書下
499	C10123926200	賃負/19年5月1日 公務員賃負届 (比叡艦)	明治19年 公文雑輯 巻21 学事 刑事 医事
500	C10124164600	20年1月29日 絵木環大尉休暇中旅行願上申の件	明治20年 公文雑輯 巻9 人事2
501	C10124272700	海国並気象図目録	明治21年 公文雑輯 巻1 官職
502	C10124291200	艦砲艇砲並に野砲射撃報告	明治21年 公文雑輯 巻3 教育 演習
503	C10124379000	明治21年6月8日 水路部より可受取但秘密図の件	明治21年 公文雑輯 巻9 図書 医治

表21 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(13)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
504	C10124380800	明治21年3月5日 新刊海図差出井に取扱方の義の件	明治21年 公文雑輯 卷9 図書 医治
505	C10124477200	明治21年2月20日 扶桑艦「ベンドレット」落失の義御届の件	明治21年 公文雑輯 卷19 物件2
506	C10126107800	明治30年6月9日 仏国東洋艦隊報知艦「エクレールール」号左記の各所へ寄港の件	明治30年 公文雑輯 卷7 艦船1
507	C10126108000	明治30年10月15日 仏国軍艦「バイヤール」同「デカルト」の2隻左記の各所へ寄港の件	明治30年 公文雑輯 卷7 艦船1
508	C10126722200	明治32年1月19日 左記の図書回航に必要な趣を以て不知火回航委員高木大尉より借用の件	明治32年 公文雑輯 卷8 図書
509	C10127869500	常備艦隊行動予定並に訓諭	明治36年 公文雑輯 卷2 教育 演習 艦船1
510	C10127878900	36年12月18日 外国船福音丸不開港場寄港免状書換の件	明治36年 公文雑輯 卷3 艦船2
511	C11080414600	第562号 大正14年2月19日 艦隊行動予定	在本邦英國大使館附武官との往復文書 大正14年
512	C10100003800	普第6381号の2 明治20年12月8日 普第5303号の2を以て訓令なりし海図の内 碧嶽湾第348枚右版を以て刊成りし件	明治20年 公文雑輯別輯 文書部 学事部 演習部 兵員部 職官部
513	C10100003900	普第5303号の2 明治20年10月22日 秘密因諸艦庁より請求有之石盤或ひは銅版刷りにて出版すべし件	明治20年 公文雑輯別輯 文書部 学事部 演習部 兵員部 職官部
514	C10100004400	普第1589号の3 明治20年3月25日 水路測量海図の目下已に彫刻着手の分 御届の件	明治20年 公文雑輯別輯 文書部 学事部 演習部 兵員部 職官部
515	C10100004700	普第2477号 明治20年5月4日 海図書冊差出御届の件	明治20年 公文雑輯別輯 文書部 学事部 演習部 兵員部 職官部
516	C11080974700	8年8月13日 臺灣其外図14葉回送の件	海軍省附水路寮 明治8年中
517	C08040533200	第3章 本邦南西諸島及台湾島沿岸	日清戦史編纂委員撰 日清海戦史 附記 地理摘要
518	C09020241900	明治37年1 望樓通信信号 (2)	明治37~38年 戦時書類 卷135 望樓通信信号1 37年
519	C10081154800	兵員死亡の件	大正7年8年 第2特務艦隊 准士官以上 身上関係綴
520	C10100055000	艦船行動簿明治41年2月分 (2)	明治40年12月1日~41年5月31日 艦船行動簿
521	C10100089200	艦船行動簿大正11年6月分 (1)	大正11年1月3日~11年7月24日 艦船行動簿
522	C10100095100	艦船行動簿大正13年10月分 (1)	大正13年7月1日~13年12月31日 艦船行動簿
523	C11081656500	軍艦大和春季演習に付訓示	四季演習記 2 春季演習記 其2止 明治39
524	C11081770200	41年10月13日 軍艦大和夏季演習に付訓示	四季演習記 卷4 夏季連合演習記 (1) 明治41
525	C12070027900	5月	明治24年 達上巻
526	C12070085500	11月	大正14年 達完
527	C12070217700	内令員 昭和20年4月 (2)	昭和20年1月、昭和20年6月 内令員
528	C12070409100	10月	昭和17年1月~12月 海軍公報
529	C08010933000	奄美大島位置図	佐世保海軍軍需部 引渡目録 2/2
530	C08011230700	18立石油缶の件通知	「昭和21・10以降 特別保管艦艇関係綴 1/2 横地復総務部 (1-引渡目録-225)
531	C08011237000	舞保管艦現状報告 (8月1日)	「昭和21・10以降 特別保管艦艇関係綴 2/2 横地復総務部 (1-引渡目録-226)
532	C08011237400	特保管艦現状報告 (8-15現在)	「昭和21・10以降 特別保管艦艇関係綴 2/2 横地復総務部 (1-引渡目録-226)
533	C08011238000	舞在特保管艦現状報告 (9月1日)	「昭和21・10以降 特別保管艦艇関係綴 2/2 横地復総務部 (1-引渡目録-226)

表22 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(14)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
534	C08011238700	第3、4回引渡艦回航準備特別作業成果並所見	「昭和21・10以降 特別保管艦艇関係係 2/2 横地復総務部 (1-1渡目録-226)
535	C14121058300	支那事変功績概見表 根拠地隊 警備隊 自昭和16年6月 至昭和16年11月/支那事変 第10回功績概見表綴/支那事変第10回功績 概見表 (1)/大島根機密第22号の2 大島根 地隊司令部支那事変第10回功績概見表	自昭和16年6月 至昭和16年11月 支那事変功績概見表
536	C11084047400	重巡洋艦 高雄 昭和9年3月1日～5月31日 (2)	重巡洋艦 高雄 昭和9年3月1日～5月31日
537	C08030064000	昭和19年1月20日～昭和19年5月31日 第18戦隊戦時日誌戦闘詳報 (3)	昭和19年1月20日～昭和19年5月31日 第18戦隊戦時日誌戦闘詳報
538	C08030064800	昭和19年6月1日～昭和19年11月30日 第18戦隊戦時日誌戦闘詳報 (3)	昭和19年6月1日～昭和19年11月30日 第18戦隊戦時日誌戦闘詳報
539	C08030295700	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 第228設営隊戦時日誌	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 第228設営隊戦時日誌
540	C08030305200	昭和20年3月1日～昭和20年3月31日 第226設営隊戦時日誌	昭和19年12月1日～昭和20年4月30日 第36設営隊戦時日誌
541	C08030307700	昭和20年6月1日～昭和20年6月30日 第228設営隊戦時日誌	昭和19年6月1日～昭和20年8月4日 第3112設営隊戦時日誌
542	C08030340800	昭和17年12月1日～昭和17年12月31日 佐世保鎮守府戦時日誌 (4)	昭和17年12月1日～昭和17年12月31日 佐世保鎮守府戦時日誌
543	C08030348800	昭和18年10月1日～昭和18年10月31日 佐世保鎮守府戦時日誌 (5)	昭和18年10月1日～昭和18年10月31日 佐世保鎮守府戦時日誌
544	C08030440000	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (2)	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
545	C08030462200	昭和18年6月5日～昭和18年8月20日 横須賀海軍警備隊戦闘詳報 (4)	昭和18年6月5日～昭和18年8月20日 横須賀海軍警備隊戦闘詳報
546	C08030582600	昭和19年10月21日～昭和19年11月1日 機動部隊補給部隊戦闘詳報	昭和19年10月20日～昭和19年11月1日 軍艦瑞鶴戦闘詳報
547	C08030589800	昭和19年10月25日 駆逐艦潮戦闘詳報	昭和19年10月～昭和19年11月 駆逐艦戦時日誌戦闘詳報
548	C08030692200	昭和19年9月～昭和20年7月 武装商船警戒隊戦闘詳報 船名 アの部～ソの部まで (6)	昭和19年9月～昭和20年7月 武装商船警戒隊戦闘詳報 船名 アの部～ソの部まで
549	C08030734400	昭和20年4月1日～昭和20年4月30日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
550	C13120021000	第601海軍航空隊戦闘詳報 第4号の3 自昭和20年4月12日至昭和20年4月17日/2. 経過	天1号作戦 第601海軍航空隊 戦闘詳報 (戦闘308.310.402 攻撃1) 昭和20年3月～20年4月
551	C13120021300	第601海軍航空隊戦闘詳報 第4号の3 自昭和20年4月12日至昭和20年4月17日/6. 功績	天1号作戦 第601海軍航空隊 戦闘詳報 (戦闘308.310.402 攻撃1) 昭和20年3月～20年4月
552	C13120082600	第210海軍航空隊派遣飛行機隊戦闘詳報 (天1号作戦) 自昭和20年4月1日至昭和20年4月18日/3 経過	第210海軍航空隊派遣飛行機隊戦闘詳報 (天1号作戦) 昭和20年4月1日～20年4月18日
553	C13120300900	戦闘第313飛行隊戦時日誌 自昭和20年4月1日至昭和20年4月15日/2. 人員の現状	第252海軍航空隊戦時日誌 戦闘第302. 316.304.315.316.317.313飛行隊
554	C13120331000	第343海軍航空隊戦闘詳報第5号 昭和20年4月12日奄美大島・喜界島素敵攻 撃 (戦闘第701飛行隊・戦闘第301飛行隊)	第343海軍航空隊戦時日誌 戦闘第301.407.701飛行隊 偵察第4飛行隊 第345海軍航空隊 昭和19.1.1～20.6.3
555	C13120331100	第343海軍航空隊戦闘詳報第6号 昭和20年4月16日喜界島方面素敵攻撃 (戦闘第701飛行隊・戦闘第407飛行隊・ 戦闘第301飛行隊)	第343海軍航空隊戦時日誌 戦闘第301. 407.701飛行隊 偵察第4飛行隊 第345海軍航空隊 昭和19.1.1～20.6.3
556	C13120456700	佐世保海軍航空隊本隊戦闘詳報 (対潜攻撃) 自昭和18年5月31日至昭和18年6月1日	佐世保海軍航空隊戦闘詳報 対潜攻撃. 沖縄 古仁屋派遣隊 三連上空に於ける空中戦闘 昭和18年5月31日～18年7月27日
557	C13120462200	詫間海軍航空隊戦闘詳報第1号 天1号作戦 自昭和20年4月25日至昭和20年5月31日/2. 経過	詫間海軍航空隊戦闘詳報 自昭和20年4月25日至昭和20年5月31日

表23 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料 (15)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
558	C13120462300	詫間海軍航空隊戦闘詳報第1号 天1号作戦 自昭和20年4月25日至昭和20年5月31日/3. 合達報告	詫間海軍航空隊戦闘詳報 自昭和20年4月25日至昭和20年5月31日
559	C13120462500	詫間海軍航空隊戦闘詳報第1号 天1号作戦 自昭和20年4月25日至昭和20年5月31日/6. 功績	詫間海軍航空隊戦闘詳報 自昭和20年4月25日至昭和20年5月31日
560	C13120521000	関東空部隊天作戦戦闘詳報 (第3号) 昭和20年4月	大東亜戦争戦時誌戦闘詳報 芙蓉部隊 ほか 自昭和20年4月至20年5月
561	C13120521600	関東空部隊天作戦戦闘詳報 (第9号) 昭和20年5月	大東亜戦争戦時誌戦闘詳報 芙蓉部隊 ほか 自昭和20年4月至20年5月
562	C13120521900	芙蓉部隊天作戦戦闘詳報 (第11号) 昭和20年5月	大東亜戦争戦時誌戦闘詳報 芙蓉部隊 ほか 自昭和20年4月至20年5月
563	C13120522100	芙蓉部隊天作戦戦闘詳報 (第13号) 昭和20年5月	大東亜戦争戦時誌戦闘詳報 芙蓉部隊 ほか 自昭和20年4月至20年5月
564	C13120522200	芙蓉部隊天作戦戦闘詳報 (第14号) 昭和20年5月27日	大東亜戦争戦時誌戦闘詳報 芙蓉部隊 ほか 自昭和20年4月至20年5月
565	C13120522600	芙蓉部隊天作戦戦闘詳報 (第16号) 昭和20年6月3日	大東亜戦争戦時誌戦闘詳報 芙蓉部隊 ほか 自昭和20年4月至20年5月
566	C13120522700	芙蓉部隊天作戦戦闘詳報 (第17号) 昭和20年6月4日	大東亜戦争戦時誌戦闘詳報 芙蓉部隊 ほか 自昭和20年4月至20年5月
567	C13120523200	芙蓉部隊天作戦戦闘詳報 (第21号) 自昭和20年6月25日至昭和20年6月26日	大東亜戦争戦時誌戦闘詳報 芙蓉部隊 ほか 自昭和20年4月至20年5月
568	C13120523400	芙蓉部隊天作戦戦闘詳報 (第22号) 昭和20年7月3日	大東亜戦争戦時誌戦闘詳報 芙蓉部隊 ほか 自昭和20年4月至20年5月
569	C13120523800	芙蓉部隊天作戦戦闘詳報 (第26号) 昭和20年7月18日	大東亜戦争戦時誌戦闘詳報 芙蓉部隊 ほか 自昭和20年4月至20年5月
570	C13120531200	第252海軍航空隊戦闘詳報第16号 昭和20年5月15日	第252海軍航空隊戦闘詳報 昭和18年10月6日～20年7月10日
571	C13120531300	菊水1号作戦 (奄美大島南方敵機動部隊並 に沖縄東方敵機動部隊攻撃)戦闘詳報 昭和20年4月6日	第252海軍航空隊戦闘詳報 昭和18年10月6日～20年7月10日
572	C13120531400	菊水1号作戦 (奄美大島南方敵機動部隊 攻撃)戦闘詳報 昭和20年4月11日	第252海軍航空隊戦闘詳報 昭和18年10月6日～20年7月10日
573	C05110030100	第4部 防備及び運輸通信	「極秘 明治37.8年海戦史 総目次」
574	C05110104400	目次「第4部 防備及び運輸通信 巻1」	「極秘 明治37.8年海戦史 第4部 防備及 び運輸通信 巻1」
575	C05110104500	第1編 防備/第1章 防備一般	「極秘 明治37.8年海戦史 第4部 防備及 び運輸通信 巻1」
576	C05110109700	第3編 通信/第2章 有線電信	「極秘 明治37.8年海戦史 第4部 防備及 び運輸通信 巻4」
577	C14121191500	昭和15年度帝国海軍作戦計画及指示関係級 (3)	昭和15年度 帝国海軍作戦計画及指示関係級 (3) 昭和14.8.5～16.10.1
578	C11110033100	陣中日誌案 昭和19年7月分	陣中日誌 (第32軍参謀部) 昭和19年3月27日～20年1月31日
579	C11110251600	陣中日誌案 自昭和19年7月1日至昭和19年7月31日	第32軍 陣中日誌 (案) 昭和19年3月27日～昭和20年1月31日
580	C12070204600	目録 昭和20年3月分	昭和17年8月10日、昭和20年7月13日 内令及び海軍公報 (軍極秘)
581	C12070526700	昭和20年5月	昭和19年10月26日 昭和20年8月16日 軍極秘海軍公報
582	C13072133700	5月 (4)	昭和20年1月2日 昭和20年5月31日 秘海軍辞令公報 甲
583	C08030437000	表紙「昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時誌戦闘詳報」	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時誌戦闘詳報
584	C08030437100	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時誌戦闘詳報 (1)	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時誌戦闘詳報
585	C08030437200	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時誌戦闘詳報 (2)	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時誌戦闘詳報
586	C08030437300	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時誌戦闘詳報 (3)	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時誌戦闘詳報
587	C08030437400	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時誌戦闘詳報 (4)	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時誌戦闘詳報

表24 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料 (16)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
588	C08030437500	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (5)	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
589	C08030437600	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (6)	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
590	C08030437700	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (7)	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
591	C08030437800	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (8)	昭和17年7月1日～昭和18年2月28日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
592	C08030438000	表紙「昭和20年8月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌」	昭和20年8月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
593	C08030438100	昭和20年8月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌 (1)	昭和20年8月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
594	C08030438200	昭和20年8月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌 (2)	昭和20年8月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
595	C08030438400	表紙「昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌」	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌
596	C08030438500	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌 (1)	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌
597	C08030438600	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌 (2)	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌
598	C08030438700	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌 (3)	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌
599	C08030438800	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌 (4)	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌
600	C08030438900	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌 (5)	昭和19年6月1日～昭和19年10月31日 大島防備隊戦時日誌
601	C08030439100	表紙「昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報」	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
602	C08030439200	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (1)	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
603	C08030439300	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (2)	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
604	C08030439400	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (3)	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
605	C08030439500	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (4)	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
606	C08030439600	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (5)	昭和19年11月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
607	C08030439800	表紙「昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報」	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
608	C08030439900	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (1)	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
609	C08030440000	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (2)	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
610	C08030440100	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (3)	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
611	C08030440200	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報 (4)	昭和20年4月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌戦闘詳報
612	C08030440400	表紙「昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌」	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌
613	C08030440500	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌 (1)	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌
614	C08030440600	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌 (2)	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌
615	C08030440700	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌 (3)	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌
616	C08030440800	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌 (4)	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌
617	C08030440900	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌 (5)	昭和20年6月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦時日誌
618	C08030733800	表紙「昭和19年10月23日～ 昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報」	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
619	C08030733900	目次 昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報

表25 アジア歴史資料センター「瀬戸内町の軍事施設跡」関連資料(17)

番号	レファレンスコード	標 題	資 料 名
620	C08030734000	昭和19年10月23日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
621	C08030734100	昭和20年2月1日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
622	C08030734200	昭和20年3月1日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
623	C08030734300	昭和20年3月23日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
624	C08030734400	昭和20年4月1日～昭和20年4月30日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
625	C08030734500	昭和20年5月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
626	C08030734600	昭和20年6月1日～昭和20年6月30日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
627	C08030734700	昭和20年7月1日～昭和20年7月31日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
628	C08030734800	昭和20年8月1日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報	昭和19年10月23日～昭和20年8月15日 大島防備隊戦闘詳報
629	C08030735000	表紙「昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌」	昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
630	C08030735100	目次 昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌	昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
631	C08030735200	昭和20年1月1日～昭和20年1月31日 大島防備隊戦時日誌	昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
632	C08030735300	昭和20年2月1日～昭和20年2月28日 大島防備隊戦時日誌	昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
633	C08030735400	昭和20年3月1日～昭和20年3月31日 大島防備隊戦時日誌	昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
634	C08030735500	昭和20年4月1日～昭和20年4月30日 大島防備隊戦時日誌	昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
635	C08030735600	昭和20年5月1日～昭和20年5月31日 大島防備隊戦時日誌	昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
636	C08030735700	昭和20年6月1日～昭和20年6月30日 大島防備隊戦時日誌	昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
637	C08030735800	昭和20年7月1日～昭和20年7月31日 大島防備隊戦時日誌	昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
638	C08030735900	昭和20年8月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌	昭和20年1月1日～昭和20年8月21日 大島防備隊戦時日誌
639	C08030736100	表紙「大島防備隊配備要図」	大島防備隊配備要図
640	C08030736200	大島防備隊配備要図(1)	大島防備隊配備要図
641	C08030736300	大島防備隊配備要図(2)	大島防備隊配備要図
642	C08050046600	昭和17年～18年 大東亜戦争徴備船舶行動概見表 乙 第3回	昭和17年～18年 大東亜戦争徴備船舶行動概見表 乙 第3回
643	C08050047900	昭和19年 大東亜戦争徴備船舶行動概見表 乙 第6回 (3)	昭和19年 大東亜戦争徴備船舶行動概見表 乙 第6回
644	C08050048300	昭和19年～20年 大東亜戦争徴備船舶行動概見表 乙 第7回	昭和19年～20年 大東亜戦争徴備船舶行動概見表 乙 第7回
645	C08040648300	明治28年12月 明治27・8年戦役に関する旅行報告 第4冊 佐世保鎮守府 出師準備 連合艦隊 水雷艇 運送船通信船 病院船 豊島海戦 監獄俘虜 脱投 黄海海戦 大連湾石炭庫其他建設 澎 湖島 中成湾久 蘇湾水溜其他設計 (5)	明治27・8年 戦時行動綴6
646	C10125757100	28年2月14日 佐世保鎮守府中城湾棧橋4月 10日迄に落成の件	明治28年 公文雑輯 巻10 土木上
647	C10125757200	28年2月25日 佐世保鎮守府水溜材料に戦利 品セメント使用の件	明治28年 公文雑輯 巻10 土木上
648	C03022546600	28曜白砲射表送付の件	密大日記大正10年6冊ノ内第3冊

第4章 総括

第1節 瀬戸内町の近代遺跡の特徴

今回の調査により瀬戸内町が把握できた近代の軍事施設跡は、現地調査で現存137箇所、半壊及び一部残存36箇所、消滅23箇所の計196箇所と文献資料で新たに確認した10箇所の合計206箇所を確認する事が出来た。今後も分布調査を継続する為、軍事施設跡の総数は増加が見込まれるが、今回は現在得られている調査成果を整理しながら、瀬戸内町の近代遺跡の特徴を捉え、若干の検討と今後の課題をまとめて本報告の総括としたい。

1. 時期区分

第2章において、瀬戸内町における近代の時代区分を設定したが、ここで再度確認を行いたい。近代の軍事施設が構築された当時の社会情勢については、1943（昭和18）年に陸軍築城部がまとめた『現代本邦築城史』において、大別されている。今回の調査成果から瀬戸内町の軍事施設跡も、ほぼ同時期に構築されている事が確認出来た。そこで、『現代本邦築城史』の分類を参考にし、瀬戸内町の近代の軍事施設跡に適した時期区分を下記の5期に設定した。

瀬戸内町の近代遺跡で最も特徴的な施設は、大正期に陸軍が構築した「奄美大島要塞」である。大正期の「要塞整理期」に建設が始まった要塞で、瀬戸内町の近代遺跡が本格的に構築される契機となった軍事施設である。その為、まず奄美大島要塞が構築される以前を「Ⅰ期：奄美大島要塞開庁以前」とした。また、太平洋戦争直前の昭和15～18年頃には陸軍の軍備が充実し、海軍の大島防備隊

も配備されるようになる。これは、太平洋戦争に備えた軍備増強の為と考えられ、大正期の近代遺跡と区別を行う必要がある。その為、「Ⅱ期：奄美大島要塞開庁後から太平洋戦争直前」とした。次に太平洋戦争期を戦況の状況から分け、「Ⅲ期：太平洋戦争前半」と特攻部隊が配備され緊急的な軍事施設が著しく増加する昭和19～20年を、「Ⅳ期：太平洋戦争後半」に分けた。また、終戦後の近代遺跡の状況を把握する為に「Ⅴ期：終戦後」を分けた。それでは、瀬戸内町の近代遺跡の特徴を時期区分ごとにまとめてみたい。

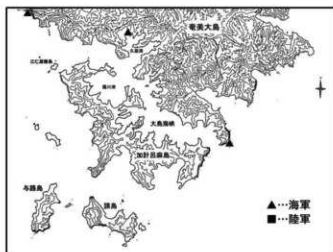
現代本邦築城史	元号	時期区分	瀬戸内町 (関連事項)				
要塞建設期	明治10年代	西南戦争					
		日清戦争	奄美大島要塞開庁以前 佐世保海軍軍需部 大島司庫（石炭庫）				
	明治20年代	日露戦争					
	明治30年代	日露戦争					
	明治40年代	第一次世界大戦					
	要塞整理期	大正8年 大正9年 大正10年 大正11年 大正12年	軍艦期	要塞整理要領 最可 陸軍築城部奄美大島支所 ワシントン海軍軍縮会議 奄美大島要塞司令部設置			
				昭和12年 昭和13年 昭和14年 昭和15年 昭和16年 昭和17年 昭和18年 昭和19年 昭和20年	日中戦争	大島防備隊設置	
						太平洋戦争 前半	濠洲 濠洲艦配置
							太平洋戦争 後半
						昭和21年	
臨時軍事費特別設計法							
臨時要塞施設期							

第378図 時期区分の設定

2. I期：奄美大島要塞開庁以前

明治維新以降、日本政府は西欧列強の植民地支配を避ける為に、最新の軍事技術を導入し国土防衛に努めた。その後、中国大陸へと進出し日清戦争及び日露戦争に勝利した。第一次世界大戦では連合国側として参戦し、ドイツに対して勝利を収め、中国大陸や南洋諸島において支配地域を広げた。

こうした東シナ海の緊迫した状況と比例して、大島海峡にも軍事施設が構築されるようになった。大島海峡で一番古い近代の軍事施設は、1891（明治24）年に建設された「佐世保海軍軍需部大島支庫（石炭庫）」である。なお、この施設には日清戦争の戦利品を用いた「水溜」が1895



第379図 主要軍事施設分布図（I期）

（明治28）年に増設されている。1896（明治29）年には奄美大島初の灯台「曾津高崎灯台」が点灯され、日清戦争後に日本領となった台湾への航路整備が行われた。その後、大島海峡の東口に「海通崎望楼」が設置され、1904（明治37）年には「曾津高崎望楼」が曾津高崎灯台内に設置された。日本海海戦が行われる直前である為、「望楼」の設置は当該地区においても日露戦争への備えが進められていた事実を窺い知る事が出来る。日露戦争が終結すると、大島海峡では海軍による演習や視察が行われるようになり、1911（明治44）年には、大島海峡の集落を中心に水源地調査が実施されている。こうした点からも、海軍が大島海峡を艦隊泊地として重要視していた事が理解できる。

I期では6箇所の軍事施設が運用されていた。「水溜」や「望楼」等が残存しており、その構造は明治期に全国的に見られる赤煉瓦造りである。島内では赤煉瓦を生産していない為、当該時期の奄美群島に最先端の建築技術が導入されていた事がわかる。

当該時期の大島海峡は日本軍にとって重要な港となった。しかし、その役割は日本本土と台湾や南洋諸島をつなぐ航路上の補給・監視地点と限定的で、根拠地や防衛ラインとしての役割は持っていなかった。

3. II期：奄美大島要塞開庁後から太平洋戦争直前

第一次世界大戦が終結すると世界情勢は安定するようになり、1920（大正9）年には国際連盟が発足、日本も国際連盟に加盟した。軍縮や国際協調の時代がしばらく続いたが、世界恐慌や不況により各国は排他的な経済圏を作り相互に対立するようになる。こうした中、日本は満州事変により満州国の建国を宣言したが、国際連盟が満州国を認めなかった為に国際連盟を脱退する。1936（昭和11）年には軍縮条約も期限切れとなり、日本は国際的な孤立を深めていく。

当該時期の大島海峡は、1920（大正9）年8月「陸軍築城部奄美大島支部」が新設され、翌年7月に「奄美大島要塞」の建築が着工された。これは大島海峡が軍港として適正地であることを確認した海軍が、軍港防衛の為に要塞を要望した為だと言われている。しかし、

1922（大正11）年に成立したワシントン海軍軍縮条約の防備制限によって、「奄美大島要塞」の工事は中止となり、これにより要塞に付帯する施設も建設が中止される。しかし、1923（大正12）年、「要塞再整理要領」が裁可され、一部未完成の部分はあるながらも、古仁屋に「奄美大島要塞司令部」が開庁された。これにより、「奄美大島要塞」は軍事上重要な基地の一つとなり、要塞地帯法や軍機保護法等の軍事法規の制限を受けるようになった。

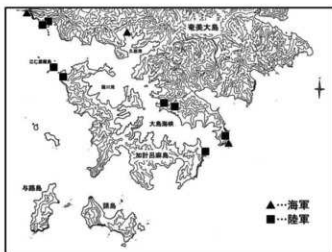
Ⅱ期では63箇所の軍事施設が運用されてきた。「奄美大島要塞」関連施設が大島海峡の全域に良好に残っている為、現在でも配備状況が容易に確認出来る。当該時期の構築物は陸軍の築城部が規格的に構築を行っており、その構造は明治期の赤煉瓦構造から艦砲射撃にも耐えうる厚みのある鉄筋コンクリート構造へと変化している。防御性は格段に向上しているが、砲台は施設上部に天蓋等防衛構造が無い事から、航空機による攻撃は想定されていなかった可能性が高い。

当該時期の大島海峡は奄美大島要塞が開庁した事により、それまでの航路上の補給・監視地点という認識から、大島海峡全域を恒久的に防御する「要塞」という認識へと変化している。

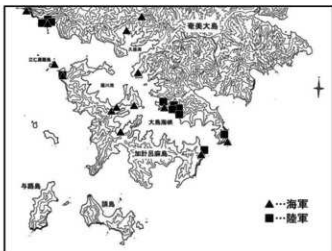
4. Ⅲ期：太平洋戦争前半

満州を支配下に置いた日本はさらに中国北部に侵攻し、盧溝橋事件が発端となり日中戦争が勃発した。また、イギリスやフランスがドイツとの戦争で劣勢になると、日本は「大東亜共栄圏」の建設を唱え、これらの国々の植民地であった東南アジアへと進出する。こうした日本の動きを非難していたアメリカとの関係は悪化し、太平洋戦争へと突入する。

当該時期の大島海峡では、「奄美大島要塞」の一部が日中戦争に合わせて軍備強化される。アメリカとの関係が悪化した1941（昭和16）年9月には「奄美大島要塞司令部」に様々な部隊が配備され、大島海峡の東西入口の砲台に砲が設置され応戦体制を整えた。また、海軍も「大島防備隊本部」や「海軍航空隊古仁屋基地」等、大島海峡の各所に施設を構築した。同年12月8日、第二次世界大戦（大東亜戦争）へと突入すると、大島海峡は重要な南進基地となり艦船の出入が激しくなった。



第380図 主要軍事施設跡分布図（Ⅱ期）



第381図 主要軍事施設跡分布図（Ⅲ期）

III期では122箇所の軍事施設が運用されていた。陸軍の「奄美大島要塞」の軍備拡張や海軍の「大島防備隊」関連施設の建設等、陸海軍の様々な軍事施設を広範囲で把握する事が出来た。軍事施設の構造は大正期に引き続き鉄筋コンクリート製が主流であり、現在でも保存状態が良好な施設も多い。

当該時期の大島海峡は新たに海軍が配備された事もあり、様々な軍事施設が構築された。こうした軍事施設や配備状況から、当該地域が軍の要地として重要視されている事を窺い知る事が出来る。また、II期と比較すると「要塞（守り）」としての性格だけでなく、「南進基地（攻撃）」としての性格も強まっている事が把握出来た。

5. IV期：太平洋戦争後半

日本は短期間で東南アジアから南太平洋にかけての広大な地域を占領したが、戦況は次第に悪化し国民生活は困窮するようになる。その後、イタリアやドイツが連合国に降伏し、勝利の見通しを失った日本だが、有利な講話条件を得る為に戦闘を続行した。しかし、日本本土への無差別爆撃が本格的に始まり、沖縄が陥落、広島・長崎に原子爆弾が投下され甚大な被害を被った。

当該時期の奄美群島では、航空基地防衛に重点が置かれる様になる。1944（昭和19）年、喜界島・徳之島の航空基地が



第382図 主要軍事施設跡分布図（IV期）

概ね完成すると、大島海峡に配備された砲台の一部が航空基地の防衛強化の為に移築される。また、「奄美大島要塞司令部」は閉庁し、陸軍の本部は徳之島へと移る。その後、大島海峡には特攻艇の「海軍震洋隊」や「陸軍海上挺進第29戦隊」が配備された。また、1945（昭和20）年には、須手の「海軍航空隊古仁屋基地」からも沖縄特攻出撃が行われるようになった。この頃から奄美大島周辺でも米軍の攻撃が激化し、「富山丸」や「対馬丸」など船舶への攻撃や市街地への空襲も急増している。

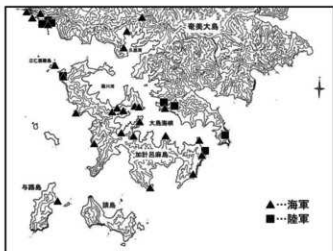
IV期では206箇所の軍事施設が運用されていた。「奄美大島要塞」が閉庁する等、陸軍の部隊が航空基地防衛の為に撤収・移転する一方、海軍の様々な施設が広範囲に配備される。特に、航空機に対応した「高射砲陣地」の建設が急増している。また「海軍震洋艇」等の配備や「海軍航空隊古仁屋基地」の水上機が沖縄特攻出撃を行う等、特攻関係の配備も増加している。当該時期の軍事施設数は全時期の中で最大であるが、軍事施設の構造は素掘りの壕が主流となり、コンクリート構造物は激減している。

当該時期の大島海峡では奄美大島要塞が閉庁し、陸軍砲台の一部が航空基地防衛の為に撤去・移築される一方、海軍の様々な軍事施設が急増している。こうした配備変更や軍事施設の急増から、日本の防衛線が当該地域に移り沖縄島陥落後の前線基地となった事を窺い知る事が出来る。また、構築物にコンクリートを使用出来ない程に物資が不足し、当該地域にも特攻艇が配備され、偵察が任務であった「海軍航空隊古仁屋基地」の水上飛行機

が特攻攻撃を行う等、戦況が一層不利になっている様相も把握する事が出来る。

6. V期：終戦後

1945（昭和20）年8月15日、日本は連合国が発表した「ポツダム宣言」を正式に受諾し、終戦を迎えた。敗戦後の日本は、全ての植民地を失っただけでなく、沖縄と奄美群島、小笠原諸島はアメリカ軍の直接統治が行われる事となり、北方領土はソビエト連邦に占拠された。日本本土は、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）による間接統治が行われ、非軍事化及び民主化等の戦後改革が行われた。



第383図 主要軍事施設跡分布図（V期）

奄美群島の武装解除は、1945（昭和20）年9月22日に徳之島において、E

・H・エドワード大佐と高田利貞陸軍少将が会見後に決定し、翌23日に徳之島から武装解除が順次開始された。大島海峡の武装解除は9月25日から各施設で行われた。武器、弾薬、機材等搬出できるものは海中投棄され、搬出困難な砲台等は砲身に爆薬を詰めて爆破された。しかし、武器以外の軍事施設は武装解除では破壊されず、施設の一部は米軍により接収、利用された。また、米軍が接収しなかった施設についても、木造兵舎等は学校の校舎や集落の集会所等に利用された。なお、終戦後は金属が不足していた為、一部の鉄筋コンクリート施設は破壊され、金属が抜き取られている。

V期には新たな軍事施設は構築されていない。武装解除により軍事施設の一部は破壊されたが、現存しない軍事施設跡の多くは、民間人によって破壊及び転用されたと考えられる。また、奄美群島が日本に復帰すると、海中投棄された弾薬等は民間業者により引き上げが行われたが、軍事施設跡の多くは未管理のまま放置され破壊も活用も行われなかった。これは山頂や谷合に立地する軍事施設跡が多く、こうした地点は終戦後の生活において不便な場所であり、開発工事等で破壊される事が少なかった為である。

7. まとめ

瀬戸内町に現存する近代の軍事施設跡について、各期の状況について報告を行った。ここでは、瀬戸内町の近代遺跡の特徴についてまとめてみたい。

(1) 瀬戸内町の軍事施設跡から当時の戦況や世界情勢を読み取る事が出来る。

大島海峡では明治から昭和（終戦）に至る期間、陸・海軍の様々な軍事施設が建設された。今後も分布調査を継続し調査成果を整理する事で、瀬戸内町の軍事施設跡から当時の世界情勢や戦況等、歴史的変遷を明らかに出来る可能性が高い。

(2) 軍事施設跡の保存状態が極めて良好である。

大島海峡の軍事施設跡は、良質な材料で規格性を持って建設された施設が多い為、保存状態が極めて良好である。また、戦時中に軍事施設が攻撃を受ける事がほとんど無

く、戦後の開発による影響も無い事から、軍事施設跡の多くが破壊を受ける事が無かった。その為、多くの軍事施設跡が武装解除当時のまま残存し、現在に至っている。

第2節 近代遺跡の現状と課題

1. 調査の状況

瀬戸内町内の近代遺跡は、これまで一部の郷土研究者により調査研究が行われていた。こうした状況を受け瀬戸内町教育委員会では、平成26年度より国庫補助事業を活用し調査を行っている、「瀬戸内町内の埋蔵文化財分布調査」の調査対象に近代遺跡（戦争遺跡）を含め調査を実施する事とした。

調査の結果、206箇所の軍事施設跡を確認し、位置と保存状況を把握する事が出来た。また、瀬戸内町内の軍事施設に関係する文献資料648点を確認する事が出来た。

今後は今回の成果を踏まえ、さらに瀬戸内町内の近代遺跡の実態を明らかにする為の発掘調査や測量調査を実施していく。また、分布調査についても、多くの研究者や研究機関と連携・協力しながら、調査を継続していく予定である。

2. 保存の状況

瀬戸内町内に現存する近代の軍事施設跡は、一部が公園化され観光や郷土教育等に活用されているが、大半の軍事施設跡は未管理のまま放置されているのが現状である。また、大正期の要塞関連施設跡の様に、保存状態が良好で安全性の高い軍事施設跡が現存する一方、終戦間際の軍事施設跡は、簡易的で脆弱な施設が多く崩壊し消滅する危険性が高い。

近代の軍事施設跡は公有地・民有地共に存在する。軍事施設跡の管理者や管理方法の確認も含め、今後調査を実施していく必要がある。

3. 近代遺跡の現状と課題

今回の調査により、瀬戸内町内に残る軍事施設跡を206箇所、近代遺跡に関連する文献資料を648点把握する事が出来た。当該地域では明治から終戦までの期間、陸・海軍の様々な施設が構築されていた。軍事施設が構築された期間を世界情勢や戦況に合わせて時期区分の設定を行い、各期における部隊配備を確認する事で各時期の特徴を捉える事が出来た。また、各軍事施設跡の分布と保存状態を確認する事で、大島海峡の自然環境を活かしながら施設が構築された様相も明らかとなった。しかし、現段階の調査成果ではこれらの軍事施設跡を単体として確認出来たに過ぎず、各軍事施設がどの様に運用され運動していたのか、そしてその目的や性格を把握するまでには至らなかった。

瀬戸内町教育委員会では、今後も広く諸分野と連携・協力を行いながら近代遺跡調査を継続的に実施して行く予定である。次年度以降は各軍事施設跡の構造を詳細に把握する為に、発掘調査及び測量調査を計画している。また、考古学的手法と並行して文献資料調査や聞き取り調査も実施して行く予定である。当該地域の軍事施設跡の目的や性格は、こうした多方面からの調査を実施する事によって実体解明が可能となり、当該地域の歴史を明らかにする事が出来るのである。

- 天城町戦後70周年記念誌編集委員会編 2016『戦後70周年記念誌 特集写真で見る戦時下の徳之島～天城町を中心にして～』天城町企画課
- 小笠原村戦跡調査委員会編 2002『小笠原村戦跡調査報告書』小笠原村教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『沖縄県の戦争遺跡 沖縄県戦争遺跡詳細確認調査の成果』沖縄県立埋蔵文化財センター企画展発掘調査速報展 2015別巻 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 屋崎一編 1989「瀬戸内町内における旧陸・海・空の軍事施設及び部隊の遺構と並に空襲被害概要『わが町の戦中戦後を語る』瀬戸内町中央公民館
- 屋崎一 1995『大島海峡周辺における軍事施設及び装備概況（戦争記録）』瀬戸内町中央公民館
- 屋崎一 2002『与路島（奄美大島）誌』屋崎一
- 鹿児島県瀬戸内町役場まちづくり観光課 2011『まんでい 加計呂麻島・請島・与路島をめぐる旅』トライ社
- 鹿児島県編 1927『奄美大島御行幸記念写真帖』鹿児島県
- 梶山瑞雲 2002『瑞雲飛翔 第三四海軍航空隊水爆部隊・戦闘記録・私記』私家版
- 鼎丈太郎編 2005『瀬戸内町遺跡詳細分布調査報告書』瀬戸内町文化財調査報告書第1集 瀬戸内町教育委員会
- 鼎丈太郎 2016「奄美大島瀬戸内町の戦争遺跡について」『鹿児島考古』第46号 鹿児島県考古学会
- 菊池実 2015『近代日本の戦争遺跡研究—地域史研究の新視点—』雄山閣
- 木俣滋郎 1998『日本特攻艇戦史 震洋・四式内薄攻撃艇の開発と戦歴』光人社
- 篠崎達男 1998『大東亜戦争中、奄美大島に於ける陸海軍の戦備と戦いの記録』私家版
- 篠崎達男 1998『大東亜戦争中、奄美大島に於ける陸海軍の戦備と戦いの記録 卷末収録資料』私家版
- 篠崎達男 1999「大東亜戦争中における奄美守備隊の回顧」『しまがたれ』第7号 しまがたれ同好会
- 篠崎達男 2000「奄美大島要塞について」『しまがたれ』第9号 しまがたれ同好会
- 浄法寺朝美 1971『日本築城史』原書房
- 震洋会編 1990『写真集 人間兵器 震洋特別攻撃隊』割田剛雄
- 瀬戸内町立図書館・郷土館編 2016『加計呂麻島 昭和37年/1962 ヨーゼフ・クライナー撮影写真集』南方新社
- 瀬戸内町編 2015『沖縄県の戦争遺跡—平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第75集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 灯光会編 2014『燈光』10月号 第59巻第10号 灯光会
- 当山昌直 安溪遊地 2013『奄美戦時下米軍航空写真集 よみがえるシマの記憶』南方新社
- 特設防衛通信隊記念誌新編下編集委員会 2000『記録のない過去 少年兵たちの手記 特設防衛通信隊記念誌』特設防衛通信隊記念誌頒布委員会
- 徳永茂二編 1996『平成八年 西部地区現地調査報告書～西古見・管鈍・花天～』瀬戸内町文化財保護審議会
- 徳永茂二編 1998『平成9年度 文化財会報』瀬戸内町文化財保護審議会
- 西古見慰霊碑建立実行委員会編 1994『西古見集落誌』西古見慰霊碑建立実行委員会
- 防衛庁防衛研究所戦史室 1968『沖縄方面海軍作戦』朝雲新聞社
- 防衛庁防衛研究所戦史室 1968『沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社
- 陸軍築城部本部編 1943『奄美大島要塞築城史』現代本邦築城史第二部第十五巻 陸軍築城部本部
- 町健次郎 2009「奄美大島の戦争記念碑に関する調査報告」『瀬戸内町立図書館・郷土館紀要』第4号 瀬戸内町立図書館・郷土館
- 町健次郎編 2011『まんでい 加計呂麻島・請島・与路島をめぐる旅』瀬戸内町役場まちづくり観光課
- 野内秀明編 2014『東京湾要塞跡 猿島砲台跡 千代ヶ崎砲台跡』横須賀市文化財調査報告書第51集 横須賀市教育委員会
- 野内秀明 2016「史跡 東京湾要塞の調査—猿島砲台跡・千代ヶ崎砲台跡—」『考古学ジャーナル』第689号 考古学ジャーナル編集委員会
- 山本正昭・伊波直樹・山口剛史「沖縄本島における海軍望楼跡—喜屋武望楼跡の調査報告—」『南島考古』第34号 沖縄考古学会

Summary

Sites in Setouchi 2: Survey on the Distribution of Military Facilities

Within Setouchi there are many historically significant former military facilities. These sites are not only important to the people of Setouchi, but also various individuals and organizations interested in historical preservation.

It is important to recognize the historical and cultural value of these facilities and similar areas. The Agency for Cultural Affairs partially revised the “Designation Criteria for Special Historic Sites, Places of Scenic Beauty and Natural Monuments, and Historic Sites” to include those areas affected by war. The period of consideration was also changed to until the end of World War Two. As a result, in 1996 the Atomic Bomb Dome in Hiroshima was designated as a historic site, a designation, which led to its registration as a UNESCO World Heritage Site. This action reflects the interest and the importance the world has for sites related to periods of war: these areas are viewed as culturally significant and in need of preservation.

The Setouchi Board of Education (BOE) conducted a survey on the distribution of former military sites within the town borders between the financial years (FY) of 2014 and 2016 with assistance from national treasury, which was granted by the Agency for Cultural Affairs of Japan. The survey located two hundred and six military structures of cultural and historical importance. However, there are still many more important areas to be found, so the BOE is committed to continuing its survey of Setouchi.

The BOE’S primary focus was on photography and marking the location of military facilities with GPS. In addition, drawings were created for some remains such as batteries to record the current conditions of certain areas. In some cases, due to safety concerns, the interiors of some buildings or structures were not explored in the survey. When artifacts were discovered, they were carefully collected and marked according to their location.

The BOE’s survey focused on the two hundred and five military facilities, and these areas and structures were given five different classifications based on the time they were built.

Stage 1: *Before the Formation of the Amami Oshima Island Fortress*

Stage 2: *After the construction of the Amami Oshima Island Fortress and Before the Beginning of World War Two*

Stage 3: *After the Start of World War Two until the Imperial Japanese Army Held Its Greatest Sphere of Influence*

Stage 4: *After the Start of the Imperial Japanese Army's Sphere of Influence until the End of World War Two*

Stage 5: *After the End of World War Two*

An example of a structure from Stage 1 is the red brick Sasebo Navy Ordinance Corps Oshima Warehouse constructed in 1895. Some Stage 2 military facilities were formed in relation to the Amami Oshima Island Fortress, built in 1921. However, according to the Washington Naval Treaty, the building of these structures was interrupted in 1922. Military facilities related to the Amami Oshima Island Fortress were not given batteries. During Stage 3 the Japanese Imperial Army built a different number of military structures, and in Stage 4 many emergency military facilities such as shelters were built because the military was preparing for supply shortages and the possibility of an enemy making land fall. Also, at that time, the Japanese Imperial Army made Kamikaze weapons such as Shinyou boats. In Stage 5 the batteries and ammunition were discarded, but the structures remained. However, after the war, there were shortages of everyday goods and materials, so wooden barracks were used for public buildings while concrete buildings were partially scraped for materials such as metals like iron. Because of these actions, some structures were lost.

In conclusion, the military facilities surveyed still require further consideration regarding their historical and cultural importance. After further study, some may be recommended for special heritage or cultural designation. Some sites were not included in report because of a lack of data and they will require more time to study and assess. After greater inquiry the cultural and historical importance of these sites will be revealed. With more work remaining to be done on the preservation of these important historical sites in Setouchi, it continues to be imperative that these military facilities be treated as historical, cultural, and archaeological assets as stipulated by the Protection of Cultural Properties Act, so their remains can be surveyed and recorded to provide greater knowledge to future generations. The Setouchi BOE, in cooperation with other individuals and organizations, is committed to continuing its survey of the many military facilities in the region.

要旨「瀬戸内町の遺跡 2 -近代遺跡 分布調査編-」

瀬戸内町では、近代以降の戦争に伴う軍事施設跡が、現在も数多く残されている。そして、その保存・活用について、地域住民はもちろん、諸分野からも関心・要望が高い。

全国的にも近代以降の戦争遺跡の注目度は高く、文化庁は『特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然基準』を一部改正し、「史跡」の指定基準に「戦跡」を加え、対象年代を第二次世界大戦終結時までと、その範囲を広げる事とした。その流れは、広島県の原爆ドームの国史跡指定へとつながり、1996年にはユネスコ世界遺産に登録され、戦争遺跡を「文化財」として保存・活用していく必要性が広く認識される契機となった。

瀬戸内町でも、文化庁国庫補助事業として2014年～2016年度にかけて、町内の近代遺跡の実態を把握する為の分布調査を行い、206施設の軍事施設跡を確認する事が出来た。しかし、未調査地が存在する為、今後も分布調査を継続する計画である。

現地調査については、基本的には写真及びGPSデータの収集を行い、町内の軍事施設跡の分布を把握する事を第一の目的とした。また、砲台等一部の遺構については遺構の略測図を作成したが、素掘りの壕は安全面を第一に優先する事から内部の確認は行わなかった。遺物は調査実施範囲において表面採集出来たもののみ採取を行った。

今回の報告書では、確認できた軍事施設跡を下記の5期に分け報告を行った。

I期：奄美大島要塞開庁以前

II期：奄美大島要塞開庁後から太平洋戦争直前

III期：太平洋戦争前半（戦争開始から旧日本軍の占領範囲が最も広かった期間）

IV期：太平洋戦争後半（太平洋戦争の戦況が不利となった時期から終戦までの期間）

V期：終戦後（終戦後から現在までの期間）

I期は、1895年に構築された佐世保海軍軍需部大島支庫（水溜）跡等があり、赤煉瓦造りの構造が特徴である。II期は、1921年に構築された奄美大島要塞関連の軍事施設跡が挙げられる。1919年の要塞整理要領に則り要塞施設の建設が行われるが、ワシントン海軍軍縮会議により工事が中断した為、備砲は行われなかった。III期は、陸・海軍の様々な軍事施設跡が建設されるようになる。IV期は、物資不足と敵の上陸を想定した施設構築が行われた為、素掘りの壕など臨時的な軍事施設跡が多い。また、震洋艇など特攻用の武器が配備されるようになる。V期は、武装解除により砲台や弾薬は廃棄されたが、構築物の多くは破壊をまぬがれる。しかし、生活物資が不足していた為、木造兵舎は共有建物として転用され、鉄筋コンクリート建造物は鉄など金属を抜き取る為に一部が破壊され、現在では消滅した近代遺跡もある。

今回、取り上げた近代の軍事施設跡は、歴史的・残存状況・遺構の特徴から重要なものとして、今後の文化財指定も念頭に入れた取り組みが必要となってくる。一方、今回は調査及び資料不足により取り上げられなかった近代遺跡や、継続調査により発見される可能性がある施設跡についても、今後、詳細な調査を行う事によりその重要性が認識される可能性が高い。よって、こうした近代遺跡（戦争遺跡）を文化財保護法における埋蔵文化財として、記録保存も含めた開発対応を行う事が望ましい。瀬戸内町教育委員会では、今後も広く諸分野と連携・協力を行い、近代遺跡調査を継続的に実施して行く予定である。

瀬戸内町文化財調査報告書第6集

瀬戸内町内の遺跡2
—近代遺跡 分布調査編—

発行年月日 2017年3月31日

編集・発行 瀬戸内町教育委員会

〒894-1592 鹿児島県大島郡瀬戸内町古仁屋船津23

TEL:0997-72-0113 FAX:0997-72-3434

印刷 有限会社 広報社

〒894-0006 鹿児島県奄美市名瀬小浜町31番2号

TEL:0997-52-1138 FAX:0997-53-1620